

まえだ きょうづ か きん せい ぼ ぐん
前田・経塚近世墓群 10

前田真知堂 B 丘陵 (2)

— 都市計画街路国際センター線及び沢岬石嶺線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2017 (平成 29) 年 9 月

沖縄県 うらそえし 浦添市教育委員会

まえだ きょうづ か きん せい ぼ ぐん
前田・経塚近世墓群 10

前田真知堂 B 丘陵 (2)

— 都市計画街路国際センター線及び沢岬石嶺線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2017 (平成 29) 年 9 月

沖縄県 うらそえし 浦添市教育委員会



巻頭1 遺跡全景（B丘陵北斜面）北西側から



巻頭2 遺跡全景（B丘陵北斜面）北側から



巻頭 3 13号墓の蔵骨器安置状況



巻頭 4 11号墓の蔵骨器検出状況

序 文

本報告書は、字前田と経塚にまたがる浦添南第一地区土地区画整理事業の実施に伴い、浦添市都市建設部からの委託を受けて平成 14 年度に実施した前田・経塚近世墓群真知堂 B 丘陵の発掘調査の成果をまとめたものです。

前田・経塚近世墓群は、浦添市字前田と経塚に分布する丘陵に横穴を掘り込んで造られた掘込墓を主とする墓群です。これまでの発掘調査では 1,000 基を超える墓が発見されており、調査成果によるとこれらの多くは近世に造営されたことがわかっています。

この近世の墓には、「ジーシガーミ」と呼ばれる蔵骨器が安置されており、その中に納められた人骨を分析することで、被葬者の性別や年齢、顔立ち、体格、病気など様々な生活の履歴を知ることができます。また、多くの蔵骨器には被葬者名や社会的地位、洗骨・没年月日等を記した「ミガチ（銘書）」が墨書きされており、被葬者をとおして当時の歴史的情報を得ることができます。このことは、文献資料が少ない沖縄において近世の人や家族の歴史にとどまらず、当時の浦添の歴史、ひいては沖縄全体の歴史を明らかにできる歴史資料であるともいえます。調査した B 丘陵では、54 基の墓が確認されていますが、その中には沖縄戦の一端を窺い知ることができる遺構も確認されています。検出された壕跡や避難時に利用された墓の様子等から、激戦地となった浦添前田地域の戦時下の様子が垣間見える貴重な発見もありました。

本報告書が沖縄・浦添の近世から近代を通じた葬制・墓制、また、沖縄戦を知る上で、市民をはじめ多くの方々に活用され、文化財の保護と活用に一層の関心を持って頂けるものになれば幸いに存じます。

末尾になりますが、現地調査および資料整理にあたってご指導・ご協力を賜りました方々、並びに事業実施にあたりご協力を賜りました方々に深く感謝申し上げます。

平成 29 年 9 月

浦添市教育委員会
教育長 嵩元 盛兼

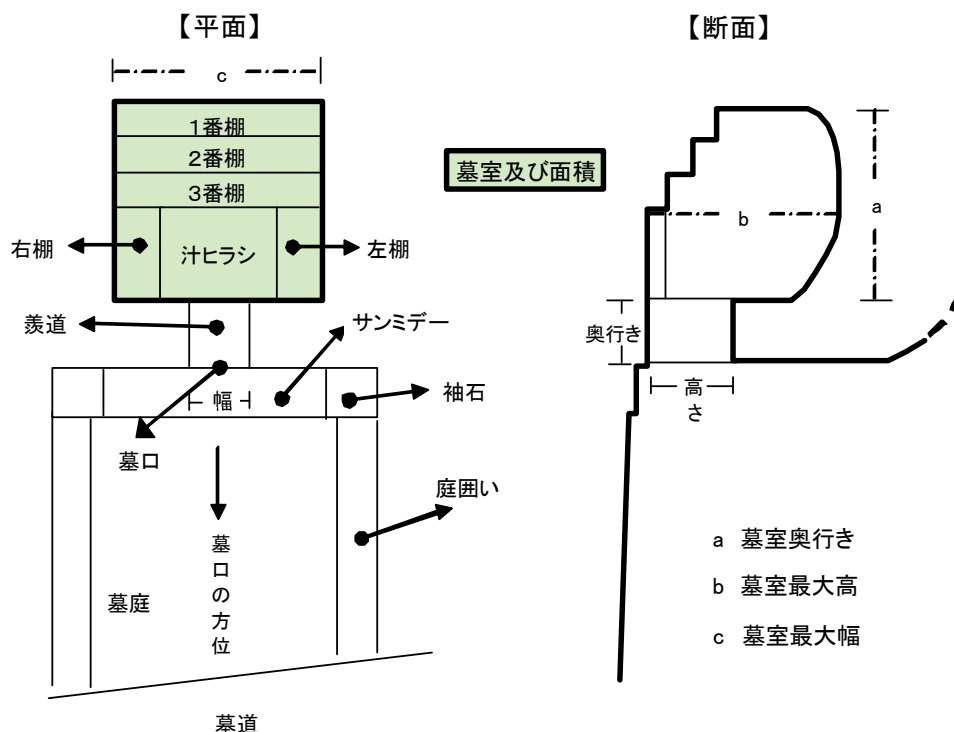
例 言

1. 本報告書は、都市計画街路国際センター線及び沢岬石嶺線工事に伴う埋蔵文化財「前田・経近世墓群」真知堂地区の発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 「前田・経塚近世墓群」は、沖縄県浦添市の字前田から字経塚の丘陵一帯に所在する墓群である。今回はその内、字前田の真知堂に所在する墓群について「前田真知堂B丘陵（1）」と同一丘陵であることから「前田真知堂B丘陵（2）」として報告を行う。なお、発掘調査地点の所在地は沖縄県浦添市字前田 1122 番を中心とする丘陵一帯である。
3. 発掘調査は、当該建設事業を所管する浦添市都市建設部区画整理課からの委託を受け、浦添市教育委員会文化課が実施した。
4. 発掘調査に係る現場作業は、平成 14 年度に実施した。調査期間は平成 15 年 2 月 7 日から同年 3 月 24 日である。調査の実施にあたっては、株式会社中部日本鉱業研究所（現：株式会社アーキジオ パシフィック支店）へ委託して行った。
5. 資料整理作業は浦添市教育委員会文化課が実施し、職員及び臨時・嘱託職員がこれにあたった。
6. 出土遺物の実測・トレース等については、蔵骨器を株式会社中部日本鉱業研究所へ、副葬品を株式会社イビソクへ委託して行った。
7. 本書の執筆は安和吉則、編集は志良堂恵が行った。なお、資料の整理にあたり、下記の方々に協力をいただいた。また、陶磁器については新垣力氏（沖縄県立埋蔵文化財センター）より指導助言をいただいた。記して感謝申し上げる。
新里まゆみ（平成 15 年度資料整理：銘書） 北條真子（平成 16 年度資料整理：人骨）
8. 本書の編集にあたっては、墓別に本文、遺構の実測図・表・出土遺物、写真などを記した。
9. 掲載遺物は、原則として遺物の種別に応じて一連番号を付し、遺物番号とした。従って遺物番号と図版・実測図・観察表の番号は一致する。
10. 本書に表示した基準高はすべて海拔高を用い、メートル単位で表した。
11. 座標は日本測地系を用いた。
12. 遺構図に記した方位は、地形図が座標北を、各墓の遺構平面図は磁北を示す。
13. 遺構断面図を作成した位置については、遺構平面図に横断ラインで示した。

14. 地形測量図については、1/500 の縮尺で掲載している。
15. 遺構図については 1/20 を基本スケールとする手書き実測で作成し、1/60 または 1/80 の縮尺で掲載している。一次葬人骨については 1/10 の縮尺で掲載している。
16. 遺物実測図の縮尺については、蔵骨器は 1/8 で掲載し、その他の遺物は大きさに応じて 1/3 から原寸大までを使い分けた。
17. 本書で用いた墓の各部名称については凡例 1 のとおりである。
18. 蔵骨器の各部名称と計測位置などは、浦添市教育委員会刊行の浦添市文化財調査研究報告書第 25 集『伊祖のいめ御拝領墓の厨子甕と被葬者』（1997 年）及び『比嘉門中墓の家族史』（2006 年）を参考にしている。詳細は凡例 2・3 のとおりである。
19. 本調査に係る写真、実測図など一切の調査記録は、浦添市教育委員会において保管している。

凡例 1

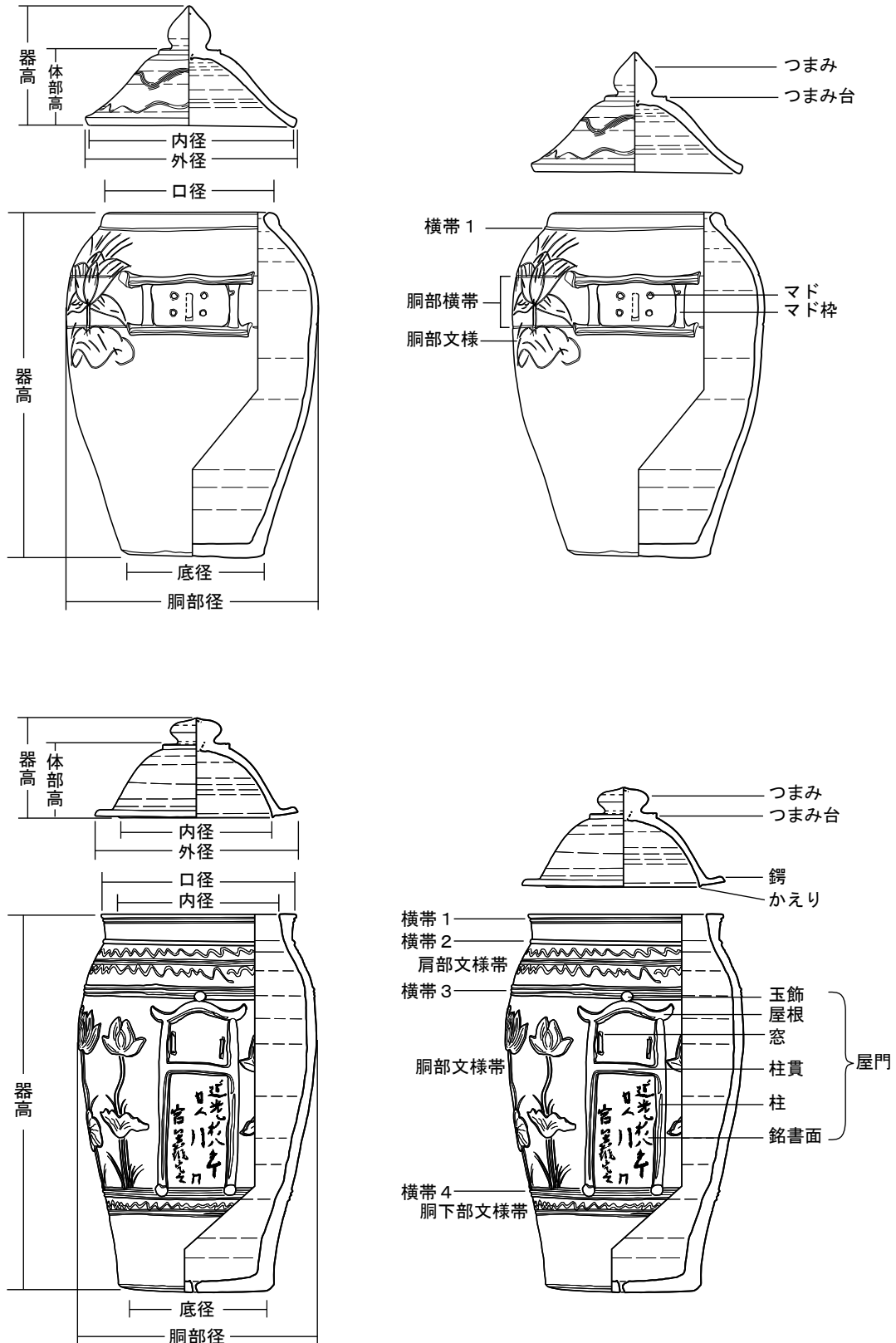
墓の各部名称と計測位置



- ・ 蔵骨器の有無は、墓室での有無を意味する。また、墓室に蔵骨器が無い墓を「空き墓」と称している。
- ・ 表中の「 - 」記号は不明または計測不能を意味する。
- ・ 墓口の方位は、磁針方位を示す。主軸方向は墓室奥壁を背にして墓口方向を見ている。

凡例 2

・蔵骨器の各部名称と計測位置(上段:ボージャ形、下段:マンガン釉甕形)

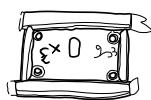


・窓、屋門の部位名称と計測位置

マド枠の分類（ボージャ－形）



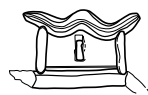
寄棟形
1方2方



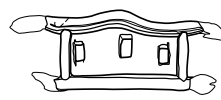
平葺形
1方4円



平葺形
1方2方

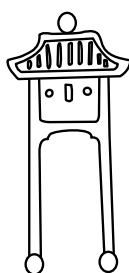


唐破風形
1方

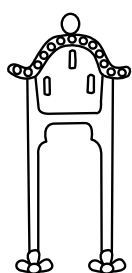


唐破風形
1方2方

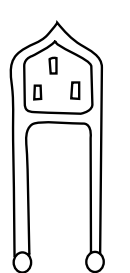
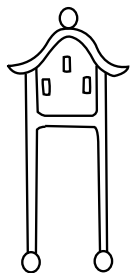
屋門の分類（マンガン軸囊形）



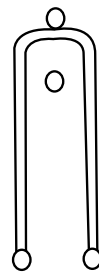
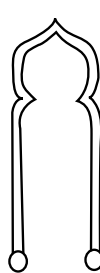
瓦屋形



唐破風形



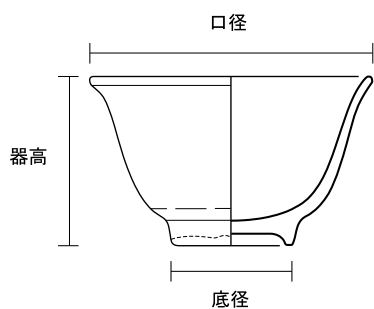
位牌形



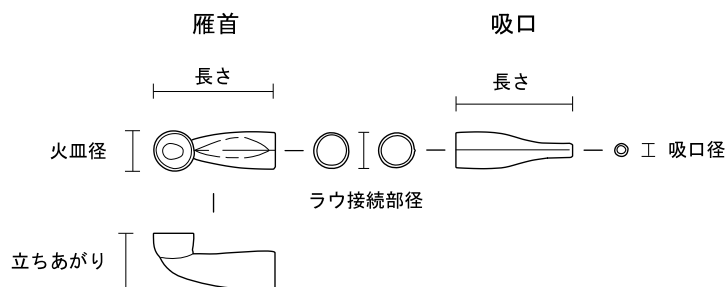
アーチ形

・遺物の各部名称と計測位置は以下のとおりである。

陶磁器



煙管



目 次

巻頭図版

序文・例言・凡例・目次

第 1 章 はじめに

第 1 節	発掘調査に至る経緯と期間	1
第 2 節	調査体制	1

第 2 章 遺跡の位置と環境

第 1 節	浦添市の地理的環境	3
第 2 節	遺跡の地理的環境	4

第 3 章 発掘調査の概要

第 1 節	調査の方法	9
第 2 節	層序と遺構	9

第 4 章 調査の成果

第 1 節	1 号墓・脇墓 1・脇墓 2	14	第 7 節	11 号墓	69
第 2 節	2 号墓	21	第 8 節	53 号墓	77
第 3 節	6 号墓	37	第 9 節	13 号墓	83
第 4 節	7 号墓	50	第 10 節	14 号墓	90
第 5 節	9 号墓	59	第 11 節	17 号墓	97
第 6 節	10 号墓	63			

第 5 章	総括	110
-------	----	-----

報告書抄録

巻頭写真

- 巻頭1 遺跡全景（B丘陵北斜面）北西側から
巻頭2 遺跡全景（B丘陵北斜面）北側から
巻頭3 13号墓の蔵骨器安置状況
巻頭4 11号墓の蔵骨器検出状況

挿図目次

第1図 浦添市と遺跡の位置図	3	第25図 9号墓 平・断面、蔵骨器配置	60
第2図 字前田・経塚の水系区分と小字区分図	4	第26図 9号墓 蔵骨器	61
第3図 調査地区の位置図	6	第27図 9号墓 出土遺物	62
第4図 都市計画街路と調査地区の位置図	7	第28図 10号墓 平・断面、蔵骨器配置	64
第5図 各墓の位置図	8	第29図 10号墓 出土遺物	66
第6図 1号墓 平・断面	15	第30図 10号墓 蔵骨器	67
第7図 1号墓 一次葬人骨出土状況	16	第31図 11号墓 平・断面、蔵骨器配置	70
第8図 1号墓 蔵骨器	18	第32図 11号墓 出土遺物	73
第9図 1号墓 出土遺物	18	第33図 11号墓 蔵骨器（1）	74
第10図 2号墓 平・断面	22	第34図 11号墓 蔵骨器（2）	75
第11図 2号墓 蔵骨器（1）	28	第35図 53号墓 平・断面、蔵骨器配置	78
第12図 2号墓 蔵骨器（2）	29	第36図 53号墓 出土遺物・蔵骨器（1）	80
第13図 2号墓 蔵骨器（3）	30	第37図 53号墓 蔵骨器（2）	81
第14図 2号墓 出土遺物	35	第38図 13号墓 平・断面、蔵骨器配置	84
第15図 6号墓 平・断面	39	第39図 13号墓 蔵骨器（1）	86
第16図 6号墓～8号墓 平・断面	40	第40図 13号墓 蔵骨器（2）	87
第17図 6号墓 蔵骨器	42	第41図 13号墓 出土遺物	89
第18図 6号墓 出土遺物（1）	45	第42図 14号墓 平・断面、蔵骨器配置	91
第19図 6号墓 出土遺物（2）	46	第43図 14号墓 蔵骨器（1）	94
第20図 6号墓 出土遺物（3）	47	第44図 14号墓 蔵骨器（2）	95
第21図 7号墓 平・断面、蔵骨器配置	51	第45図 14号墓 出土遺物	95
第22図 7号墓 蔵骨器（1）	55	第46図 17号墓 平・断面	98
第23図 7号墓 蔵骨器（2）	56	第47図 17号墓 蔵骨器	102
第24図 7号墓 出土遺物	58	第48図 17号墓 出土遺物	105

表目次

第1表 遺構一覧表	10	第7表 2号墓出土遺物の観察一覧表	34
第2表 出土遺物一覧表	12	第8表 3号墓蔵骨器の観察一覧表	36
第3表 墓室平面形の類型	13	第9表 6号墓蔵骨器の観察一覧表	41
第4表 1号墓蔵骨器の観察一覧表	17	第10表 -1 6号墓出土遺物の観察一覧表	43
第5表 1号墓出土遺物の観察一覧表	19	第10表 -2 6号墓出土遺物の観察一覧表	44
第6表 -1 2号墓蔵骨器の観察一覧表	24	第11表 -1 7号墓蔵骨器の観察一覧表	53
第6表 -2 2号墓蔵骨器の観察一覧表	25	第11表 -2 7号墓蔵骨器の観察一覧表	54
第6表 -3 2号墓蔵骨器の観察一覧表	26	第12表 7号墓出土遺物の観察一覧表	58
第6表 -4 2号墓蔵骨器の観察一覧表	27	第13表 9号墓蔵骨器の観察一覧表	61

第 14 表 9 号墓出土遺物の観察一覧表	62	第 21 表 -1 13 号墓蔵骨器の観察一覧表	85
第 15 表 -1 10 号墓蔵骨器の観察一覧表	65	第 21 表 -2 13 号墓蔵骨器の観察一覧表	86
第 15 表 -2 10 号墓蔵骨器の観察一覧表	66	第 22 表 13 号墓出土遺物の観察一覧表	89
第 16 表 10 号墓出土遺物の観察一覧表	66	第 23 表 -1 14 号墓蔵骨器の観察一覧表	92
第 17 表 -1 11 号墓蔵骨器の観察一覧表	71	第 23 表 -2 14 号墓蔵骨器の観察一覧表	93
第 17 表 -2 11 号墓蔵骨器の観察一覧表	72	第 24 表 -1 17 号墓蔵骨器の観察一覧表	100
第 17 表 -3 11 号墓蔵骨器の観察一覧表	73	第 24 表 -2 17 号墓蔵骨器の観察一覧表	101
第 18 表 11 号墓出土遺物の観察一覧表	73	第 25 表 17 号墓出土遺物の観察一覧表	104
第 19 表 -1 53 号墓蔵骨器の観察一覧表	79	第 26 表 -1 出土人骨の観察一覧表	106
第 19 表 -2 53 号墓蔵骨器の観察一覧表	80	第 26 表 -2 出土人骨の観察一覧表	108
第 20 表 53 号墓出土遺物の観察一覧表	82	第 27 表 遺構観察一覧表	111

図版目次

図版 1 1 号墓	16	図版 25 10 号墓	63
図版 2 1 号墓 蔵骨器 (1)	19	図版 26 10 号墓	64
図版 3 1 号墓 蔵骨器 (2)	20	図版 27 10 号墓 出土遺物	66
図版 4 1 号墓 出土遺物	20	図版 28 10 号墓 蔵骨器	68
図版 5 2 号墓	21	図版 29 11 号墓	69
図版 6 2 号墓	23	図版 30 11 号墓	70
図版 7 2 号墓 蔵骨器 (1)	31	図版 31 11 号墓 出土遺物	73
図版 8 2 号墓 蔵骨器 (2)	32	図版 32 11 号墓 蔵骨器	76
図版 9 2 号墓 蔵骨器 (3)	33	図版 33 53 号墓	77
図版 10 2 号墓 出土遺物	35	図版 34 53 号墓	78
図版 11 3 号墓 蔵骨器	36	図版 35 53 号墓 出土遺物・蔵骨器	82
図版 12 6 号墓	37	図版 36 13 号墓	83
図版 13 6 号墓	38	図版 37 13 号墓	84
図版 14 6 号墓 蔵骨器	42	図版 38 13 号墓 蔵骨器	88
図版 15 6 号墓 出土遺物 (1)	48	図版 39 13 号墓 出土遺物	89
図版 16 6 号墓 出土遺物 (2)	49	図版 40 14 号墓	90
図版 17 7 号墓の位置	50	図版 41 14 号墓	91
図版 18 7 号墓	52	図版 42 14 号墓 出土遺物	95
図版 19 7 号墓 蔵骨器 (1)	57	図版 43 14 号墓 蔵骨器	96
図版 20 7 号墓 蔵骨器 (2)	58	図版 44 17 号墓の位置	97
図版 21 7 号墓 出土遺物	58	図版 45 17 号墓	99
図版 22 9 号墓	59	図版 46 17 号墓 蔵骨器 (1)	102
図版 23 9 号墓 蔵骨器	61	図版 47 17 号墓 蔵骨器 (2)	103
図版 24 9 号墓 出土遺物	61	図版 48 17 号墓 出土遺物	105

第1章 はじめに

第1節 発掘調査に至る経緯と期間

前田・経塚近世墓群は本市の字前田、経塚にまたがる総面積 82.4 ヘクタールの土地区画整理事業地内に所在している。同事業は本市が主体となり、市街地交通体系整備及び都市形成のテーマである『緑の骨格』形成上重要な地域と位置づけられ、市の急速な人口増加に伴い市街地が急速に進展する地区として平成 4 年度から土地区画整理事業に着手した。平成 10 年に仮換地指定を行い、良好な市街地の形成を図る街づくりを進めるために本格的な工事の着手となった。

当該事業の実施に伴い市教育委員会は、平成 6 ～ 9 年度にかけて遺跡詳細分調査を実施し、その結果、同事業地内に 1,000 基を超える近世の墓が所在するものと推定された。

同事業において、小字真知堂には都市計画街路国際センター線及び交差する沢峠石嶺線の道路工事が計画されていたため、市教育委員会が平成 14 年度に確認調査を実施し、B 丘陵で 50 基余、C 丘陵で約 30 基、両丘陵で合計 80 基余の古墓の所在を確認した。この調査結果を受けて市都市建設部区画整理課と市教育委員会文化課はその取扱いについて協議し、平成 14 年度は工事計画に係る 15 基について記録保存による発掘調査を実施することとなり、平成 14 年 8 月 20 日付浦都南一第 20 号により発掘調査の依頼が提出された。これを受けて、市教育委員会は平成 14 年 8 月 29 日付浦教文第 126 号にて調査を実施する旨の回答を行った。このような経緯を経て、平成 14 年 9 月 24 日付で市と教育委員会の間に業務委託契約が締結された。発掘調査は、平成 15 年 2 月 7 日から同年 3 月 24 日で実施し、株式会社中部日本鉱業研究所（現：株式会社アーキジオ パシフィック支店）へ委託して行った。

第2節 調査体制

調査体制は以下のとおりである。

調査主体	浦添市教育委員会	教育長	大盛 永意	（平成 14・16 年度）
〃	〃	〃	西原 廣美	（平成 17 ～ 19・21 年度）
〃	〃	〃	池原 寛安	（平成 28 年度）
〃	〃	〃	嵩元 盛兼	（平成 29 年度）
事業所管	浦添市教育委員会	教育部長	与座 盛一	（平成 14 年度）
〃	〃	文化部長	安里 進	（平成 16 ～ 18 年度）
〃	〃	〃	宮里 親一	（平成 18 年度）
〃	〃	〃	下地 安広	（平成 19・21・28 年度）
〃	〃	〃	山田 勉	（平成 29 年度）
事業総括	〃	文化課長	安里 進	（平成 14 年度）
〃	〃	〃	下地 安広	（平成 16 ～ 18 年度）
〃	〃	〃	糸数 青次	（平成 19 年度）

事業総括	浦添市教育委員会	文化課長	當間 眞榮	(平成 21 年度)
〃	〃	〃	松川 章	(平成 28・29 年度)
事業調整	〃	文化課 文化財係長	松川 章	(平成 14・16・17 年度)
〃	〃	〃	宮里 信勇	(平成 18・19・21 年度)
〃	〃	〃	渡久地政嗣	(平成 28・29 年度)
事業事務	〃	文化課 文化財係主任	宮城 増美	(平成 14・16 年度)
〃	〃	〃	安里 静子	(平成 17 年度)
〃	〃	〃	宮城 キミ	(平成 18・19 年度)
〃	〃	〃	石川美代子	(平成 21 年度)
調査員	〃	文化課 文化財係主任	安和 吉則	(平成 14～18・28・29 年度)

資料整理臨時職員

飯沼由紀子 池宮城聡子 石原泉 上江洲才洋 上間安彦 浦崎祐子 兼島博志
具志みどり 古波蔵保直 城間恵美子 城間孝子 陣内優 津嘉山理恵 照屋葉史
照屋芳美 名嘉祥子 濱田興明 比嘉尚輝 比嘉美智子 比嘉幸枝 外間一成
宮城かの子 (五十音順)

調査協力

志良堂恵 鈴木悠 玉那覇有登

発掘作業等委託

株式会社中部日本鉱業研究所 (現：株式会社アーキジオ パシフィック支店)

遺物実測等業務委託

株式会社中部日本鉱業研究所 (現：株式会社アーキジオ パシフィック支店)

株式会社イビソク沖縄営業所

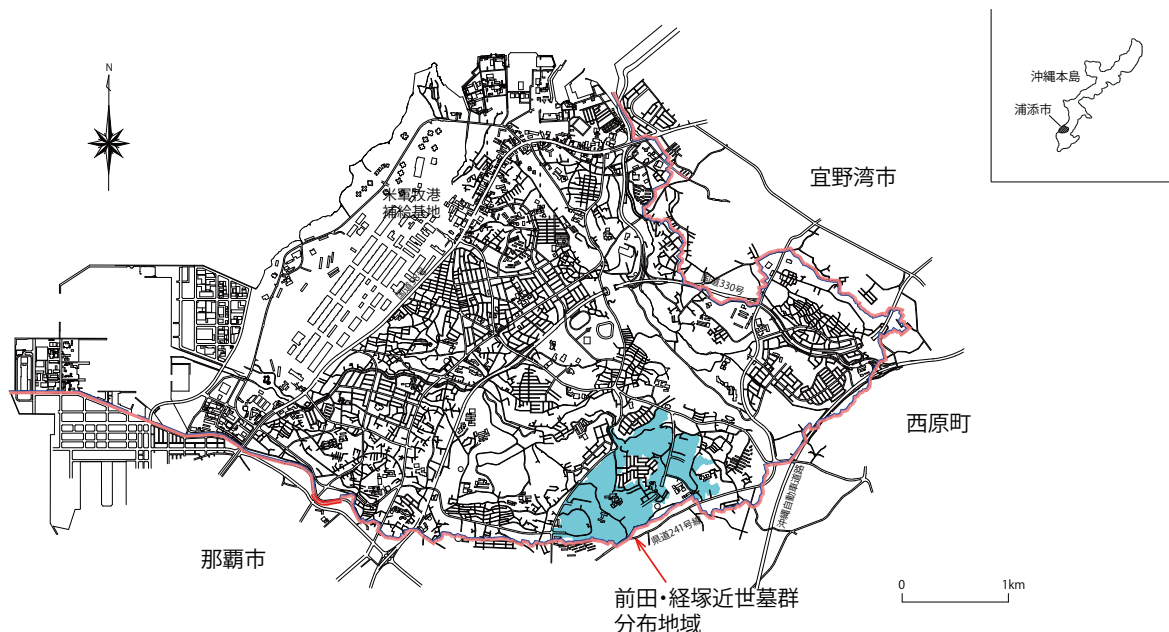
第2章 遺跡の位置と環境

第1節 浦添市の地理的環境

前田・経塚近世墓群が所在する浦添市は、沖縄本島中南部の西海岸に位置し、南側に県都である那覇市、東側に西原町、北側に宜野湾市が隣接する。西側は東シナ海に面しており、遠くには慶良間諸島を望むことができる。市域は東西 8.4km、南北 4.6km、総面積は平成 23 年 1 月 4 日に西洲 3 丁目の都市機能用地 (0.16km²) と緑地 (0.02km²) の埋め立てによって 19.27km² となっている。人口は 113,578 人、48,100 世帯（平成 29 年 3 月末時点）を擁する市である。市の西部には国道 58 号線、中央部に県道 330 号線、東部に沖縄自動車道が南北に通っており、島の南北を結ぶ各主要交通路が縦貫する。海浜部は、米軍施設の牧港補給地区(面積 273.7ha)が所在し市面積の 14.3%を占めている。

市の地形は、標高約 40 m前後でほぼ二分され、東部は起伏の小さな丘と浅い谷が連なる波浪状の丘陵地、西部は東シナ海に続く東高西低の地形である。北部には、北西－南東方向に標高 120 ～ 140 mの浦添断層崖が形成されている。本市の最高点は、字仲間から前田に所在する国指定史跡浦添城跡内の 138.4 mである。それらの丘陵を分水嶺に北流する牧港川、シリン川、西流する小湾川、安謝川の河川はいずれも東シナ海へ注いでいる。海岸線は沖合にかけて、豊かなサンゴ礁が発達している。

本市に分布する地層は、下位から上位に島尻層群、琉球層群、海浜堆積地及び沖積層に大別することができる。島尻層群は、本市の基盤を形成し、市の中央部から南東部に広く露出するが、西部や北部では、琉球層群が広く分布する。沖積層や海浜堆積物は四本の河川の河口付近や海岸沿いにみることができる。植生については、本市全域が去る大戦の激戦地であったために、ほぼ焼け野原の状態になり、現在残っている植被は二次林となっている。気象は隣接する那覇市において年平均気温 23.1 度、降水量 2040.8 ミリメートルで、冬は北東、夏は南東の季節風が卓越する。気温的には亜熱帯で降水量は多く、特に梅雨期や台風期に多い。風は東アジア季節風帯に属している。



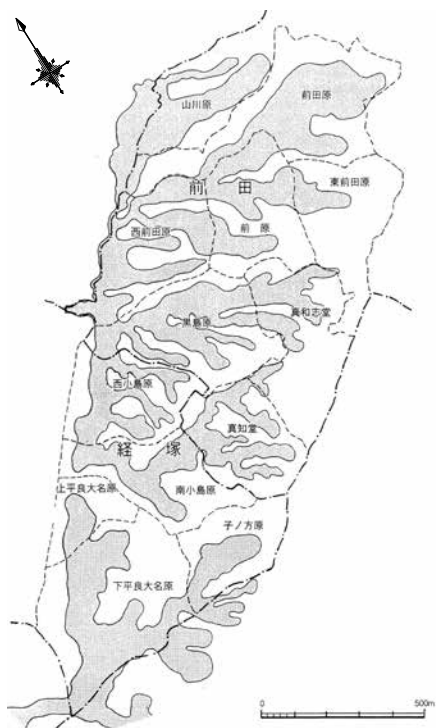
第1図 浦添市と遺跡の位置図

第2節 遺跡の地理的環境

前田・経塚近世墓群は、浦添市の南東に位置する字前田と那覇市に隣接する字経塚一帯の丘陵地に分布する墓群の総称である。この地域は、小湾川と安謝川の上流域にあたり、その分水嶺にまたがる地域であり、一帯の地形はそれに由来する幾筋もの狭く浅い谷底低地と尾根から構成される。そのため、土地の起伏に富む地形となっており、幾つもの舌状の小丘が入り組む複雑な地形が形成されている。これらの表層の地質は、豊見城層（小禄砂岩層）で構成されている。この砂岩は固結度が低い細粒の砂岩層であり、方言名で「ニービ」と呼ばれている。この地域の谷筋は、尾根の森を水源涵養林として、古くから水田や畑として開発されてきたが、その斜面にはニービを掘り抜いた多くの掘込墓（方言名：フィンチャーバカ）が形成されている。

現在、区画整理事業が進められる当墓群が所在する丘陵地一帯は、地形形状小湾川上流の安波茶川水系と安謝川上流の沢岬川水系に分かれ、現在の行政区域では字前田と字経塚に属している。この地区の小字は、安波茶水系に属する山川原、前田原、前原、東前田原、西前田原、黒島原、真和志堂原、真知堂、西小島原、南小島原と沢岬川水系に属する子ノ方原、上平良大名原、下平良大名原の13小字からなる（第2図）。かつては、安波茶川水系の全ての小字と沢岬川水系の最上流域の子ノ方原が字前田に属し、沢岬川水系の上・下平良大名原が字沢岬に属していたが、大正5年の字経塚の新設にあたり、字沢岬・字前田・字安波茶の小字をそれぞれ割いて設立した時より、現在の归属になっている。

墓は、西前田原、東前田原、真和志堂原、前原、真知堂、南小島原、下平良大名原、子ノ方原に主に分布し、特に真知堂に集中している。今回報告を行う墓群の所在する丘陵は、真知堂の北部に位置する。調査範囲は前田真知堂B丘陵の中央部の北側斜面であり、その斜面部に横穴を掘り込んだ墓が50基余が確認された。



第2図 字前田・経塚の水系区分と小字区分図

第3節 遺跡周辺の歴史的環境

浦添市が所在する沖縄本島中南部の遺跡分布の特徴としては、貝塚時代後期には海浜部に遺跡群が形成され、内陸部の遺跡は少ない。グスク時代には、畑作や稲作が行われるようになり、遺跡も内陸部の石灰岩台地周辺に展開するようになるが、前田・経塚地区のような石灰岩がなく谷底低地が発達した地域は、グスク時代遺跡の分布が希薄な地域であるといわれている。

近世には、琉球王府の地方統治組織として「間切・村制度」が採用されるが、17世紀中頃の『琉球国絵図郷村帳』には、この地区一帯に「前田村」・「沢岬村」・「あはき村」（安波茶村）という村名

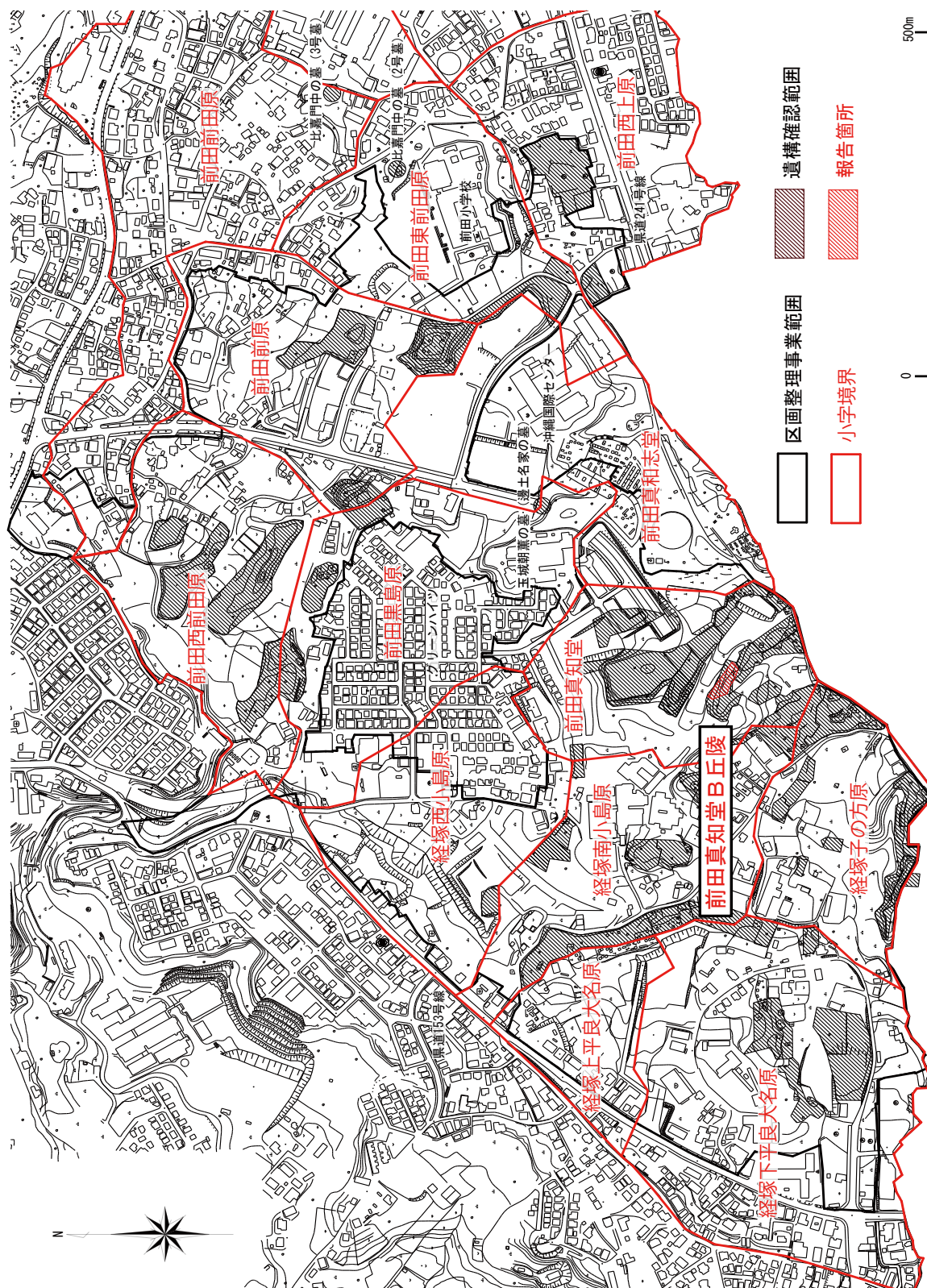
が登場する。この時に現在の経塚集落には、単独の村名はなく、安波茶・前田・沢岬の各村の一部で、首里から移住してきた土族が構えた屋取集落があった。また、『琉球国高究帳』（17世紀中頃）には、各村の田畠の石高が記されているが、浦添間切全体では、水田の石高が全体の49.4%でほぼ田畠半々であるが、前田村は88.3%と水田が卓越していたことがわかる。これまで確認されている前田・経塚近世墓群の墓の所有者については、概ね北側の前田一帯の墓は、前田の人のものが多く、南側の経塚一帯の墓は、首里の人の墓が多いというデータがある。前田・経塚近世墓群の年代は古いものでは1700年頃の銘書がある蔵骨器もみられることからこの頃には墓地としての利用が始まったものと考えられる。その後、近世・近代・現代を通じて造営され続け、墓も横穴墓からコンクリート製の墓へと変化した。現在も区画整理に伴う墓の集約（墓地街区）というかたちでコンクリート製や石製の墓が造営され続けている。

また、去る沖縄戦では1945（昭和20）年4月に沖縄本島中部西海岸に上陸した米軍は、東海岸に至り本島を南北に分断した後に南北両方向に侵攻したが、防衛する日本軍は主要陣地帯を中南部に集中させていたため、主戦場となったそれらの地域では各所で戦闘が繰り広げられた。特に宜野湾の嘉数、浦添の前田高地（浦添城跡）では激戦が展開され、多くの兵士や民間人が倒れていった。前田高地の南側に位置する前田・経塚は軍司令部（首里）との中間地点にあるため、多くの部隊が戦闘の経過と共に入れ替わり駐留していたようである。その際に丘陵斜面に坑道式の壕を構築することあれば、近世及び近代に造営された墓を転用することもあったようで、これまでの調査でそういった遺構が確認されている。また、墓は民間人の避難場所にもなっており、これらの墓については多くの証言が得られている。

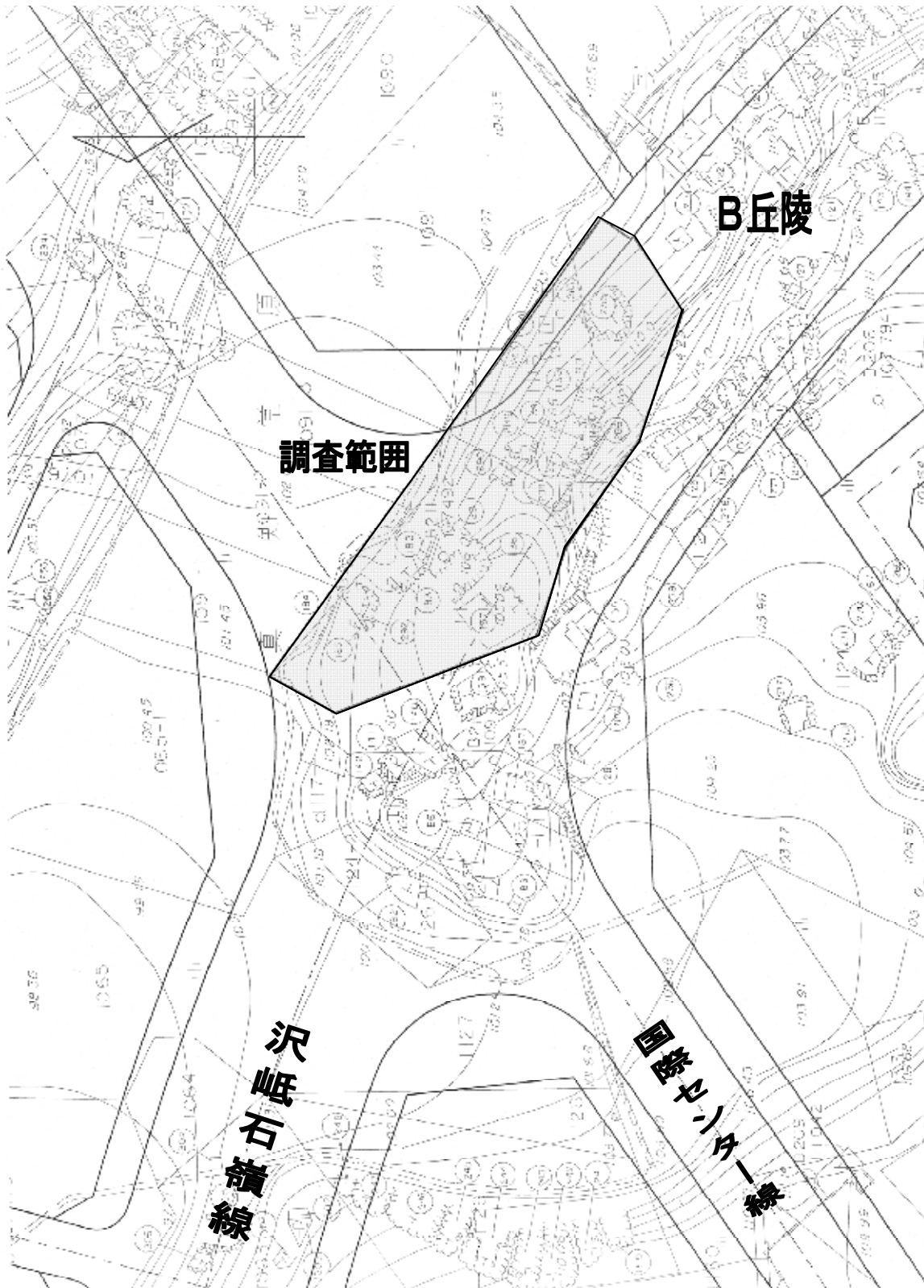
戦後は、昭和52年頃に南第一地区の字前田に新興住宅地（グリーンハイツ）が造営され、近年は区画整理事業が進行し、かつての景観は急速に失われている。

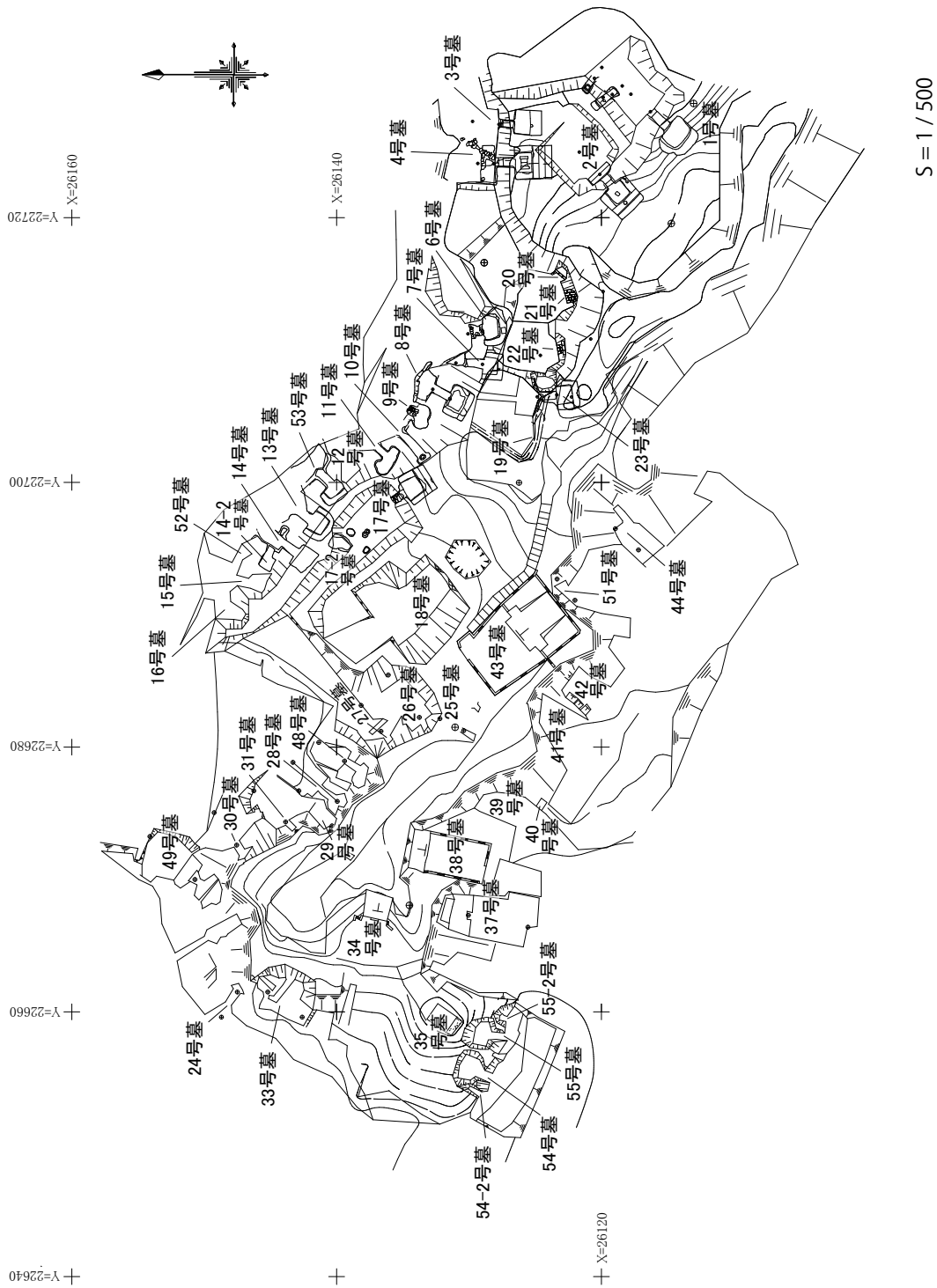
《引用・参考文献》

- 浦添市教育委員会 1980『うらそえの文化財』
- 浦添市史編集委員会 1981『浦添市史 第二巻 資料編1』浦添市
- 浦添市史編集委員会 1984『浦添市史 第五巻 資料編4 戦争体験記録』浦添市
- 浦添市史編集委員会 1986『浦添市史 第六巻 資料編5』浦添市
- 浦添市史編集委員会 1987『浦添市史 第七巻 資料編6』浦添市
- 浦添市史編集委員会 1989『浦添市史 第一巻 通史編』浦添市
- 浦添市教育委員会 1998『浦添間切前田村・沢岬村の近世墓と水田分布調査』
- 浦添市教育委員会 2004『墓からわかる家族の歴史 近世墓シンポジウム報告書』
- 浦添市教育委員会 2004『前田・経塚近世墓群―市道111号線埋蔵文化財発掘調査―』
- 経塚自治会 2006『字経塚史』
- 浦添市教育委員会 2007『市内遺跡発掘調査報告書（1）―平成13～18年度調査報告―』
- 浦添市 2015『広報うらそえ 平成27年10月号』



第3図 調査地区の位置図





第5図 各墓の位置図

第3章 発掘調査の概要

第1節 調査の方法

調査区内の着手前の状況は、東西に伸びる丘陵の尾根を中心にリュウキュウマツやアカギ、タブノキなどの植物群落が南北斜面地に広がっていた。本調査前に実施した範囲確認調査でこれらの自然林を伐木・伐採すると、一帯の地表には腐葉土や崩落土が堆積しており、墓口上部が確認できるものや崩落した墓と想定される地形上のくぼみがいくつも確認された。本調査では、表土の除去と伐根についてはバックホウを用いた機械掘削で行い、墓正面や庭囲いが出始めると人力掘削に切り替えて墓口や墓庭の検出を行った。前田・経塚近世墓群の遺構は、地山である細粒砂岩の丘陵地に掘り込まれていることから、基本的に地山面を検出することで造墓時の状況や遺構面を検出することができる。その結果、丘陵斜面に一段又は二段を形成しつつ横並びで墓が立地する状況が確認された。調査で確認された墓については、東側から西側に順に番号を付し、出土遺物は墓単位にまとめて取上げた。

第1章第1節で既述のとおり事前の範囲確認調査によってB丘陵で50基余の墓が確認されていた。これらの墓のうち、遺構や遺物の残存状況が良好で比較的情報量の多い26基の墓と、後世の攪乱などの影響から遺構や遺物の残存状況が悪く情報量の少ない「空き墓」やそれに近い状態の24基の墓であることが判明した。平成14年度は26基の墓のうち15基の調査を実施し、翌年度に残りの11基の調査を実施した。前者の情報量の多い墓については1/20の実測図の作成を行い、一次葬人骨は1/5で実測図の作成を行った。空き墓については略測図の作成を行った。写真撮影はすべての墓で適時、調査開始から完掘まで行った。

第2節 層序と遺構

前節に記したとおり、本調査地は戦時中もしくは近現代の攪乱が著しいことが確認されたため、墓の上部や墓前については、重機と人力による掘削によってこれらの土層の除去作業を行い、遺構面の検出を行った。特に、南斜面に所在する墓は、戦時中に壕に利用される状況や戦後にコンクリート修復された墓が多く確認されており、一方、北斜面では天井が崩落した墓や入口のみ埋没する状況がみられた。天井部分が崩落している遺構については、墓室内には墓の天井部分を形成していた基層と表層が混在して厚く堆積している状況であり、墓の入口のみが埋没した墓については、墓の内部にはほとんど堆積土がない状態であった。このような状況であることから本調査では明確な層序関係を把握することは適わなかった。

検出された遺構は、横穴状の掘込墓15基である。墓室天井や墓口前が崩落した埋没墓が半数を占め、その内、墓が機能していた頃の状態がパックされたまま埋没したと考えられるものが数基検出された。それぞれの墓の特徴については第1表に示したとおりである。なお、墓室の類型については、浦添市教育委員会2007『市内遺跡発掘調査報告書（1）』掲載の第18表を一部改変し、加筆修正している。

出土遺物については第2表のとおりである。なお、出土点数については破片数ではなく個体数を掲載している。

第1表 遺構一覧表

墓 番号	墓室 類型	汁ヒラシ 面積(m ²)	墓口 方位	墓口の寸法(m)			墓口の閉塞方法 ①形状 ②材質	墓室 面積(m ²)	墓室の寸法(m)		
				高さ	幅	奥行※1			高さ	幅	奥行
1号墓	3c	3.15	N42° E 北東	1.25	0.6	1.5	切石組？ ①方形 ②石灰岩	6.3	1.9	2.8	2.25
1号墓 脇墓1	1c	—	N140° E 南東	0.9	0.6	—	不明	0.74	1.2	0.6	1.24
1号墓 脇墓2	1c	—	N124° E 南東	0.7	0.6	—	不明	0.42	0.9	0.6	0.7
2号墓	6b	1.96	N47° E 北東	0.9	0.6	1.0	蓋石 ①一枚板状 ②石灰岩	6.25	1.9	2.5	2.5
3号墓	4b	1.04	N4° E 北	0.9	0.6	0.8	蓋石 ①一枚板状 ②石灰岩	3.6	1.6	1.8	2.0
4号墓	5b	1.68	N2° E 北	1.0	0.6	1.6	蓋石 ①一枚板状 ②石灰岩	7.0	2.2	2.5	2.8
6号墓	3a	2.16	N11° W 北	—	0.7	1.0	積石 ②石灰岩、砂岩	5.04	—	2.8	1.8
7号墓	3a	1.32	N1° E 北	0.9	0.55	1.4	不明	3.00	1.4	2.0	1.5
8号墓	3b	1.21	N30° E 北北東	1.3	0.6	1.4	積石 ②石灰岩、砂岩	3.91	1.7	2.3	1.7
9号墓	1a	—	N25° E 北北東	—	0.7	0.7	積石 ②石灰岩、砂岩	1.62	— (1.4)	1.8	0.9
10号墓	1c	—	N50° E 北東	0.9	0.6	—	積石 ②石灰岩、砂岩	1.63	1.0	0.65	2.5
11号墓	1a	—	N40° E 北東	—	0.55	1.2	積石 ②石灰岩、砂岩	2.20	— (1.1)	2.2	1.0
53号墓	3c	1.17	N40° E 北東	0.9	0.6	1.0	積石 ②石灰岩、砂岩	2.47	1.1	1.9	1.3
13号墓	3a	1.82	N33° E 北北東	1.05	0.8	0.45	積石 ②石灰岩、砂岩	4.58	1.15	2.35	1.95
14号墓	1b	—	N36° E 北東	1.2	0.6	1.2	積石 ②石灰岩、砂岩 か？	2.52	1.15	1.8	1.4
17号墓	6b	1.96	N34° W 北西	0.9	0.6	1.1	積石 ②石灰岩、砂岩	4.84	1.8	2.2	2.2
23号墓	3a 変形	1.56	N5° W 北	—	0.6	1.4	不明	3.57	— (1.6)	2.1	1.7

※1 羨道の長さ

※2 一番棚の高さ

※3 蔵骨器の有無は、○＝墓室内で原位置、△＝攪乱、●＝移転廃棄で区別した。

棚高 ※2 (m)	サンミデー 有無	庭囲い 有無	排水溝 有無	蔵骨器 有無 ※3 点数	一次葬 人骨	備考
0.6	×	○	×	△ 5	○	蓋石は墓口半分の大きさで上部は開口する。墓室内で戦争遺物が出土。棚の高さまで埋土堆積。棚上に蔵骨器は無いが、汁ヒラシで大量の破片と一次葬人骨を検出。庭囲い(左側)に小規模な墓が2基(脇墓1・2)所在する。
-	×	×	×	×	○	棺箱の台石の一部が残存する。台石は使用面が比較的平らな10～20cm大の砂岩と石灰岩を使用。人骨の残存状態は不良。頭位は不明だが墓室形状から墓口方位と同軸上と判断される。閉塞方法は不明。
-	×	×	×	○ 1	×	人骨を伴う蔵骨器が割れた状態で検出された。墓口の閉塞方法は不明。
0.5	○	○	×	● 17	×	空き墓。墓庭に蔵骨器17点廃棄(人骨無し)。サンミデーと墓口下部は石灰岩を使用しモルタルで仕上げる。
0.38	×	×	○	×	×	空き墓。墓室壁面の石灰化が顕著。義道から庭に暗渠を構築。隣接する4号墓と墓庭を共有する。
0.38	○	○ (左)	○	×	×	空き墓。汁ヒラシに棺箱の台石(石灰岩製)を4個配置。台石は奥壁に対して縦位に隙間なく並べる。隣接する3号墓室と同様に壁面の石灰化が顕著で、高湿度環境が窺える。サンミデー下部に暗渠を構築。
0.42	×	○	×	△ 8	×	埋没墓。墓室天井が崩落する。墓室埋土中から7、8点分の蔵骨器破片と近代磁器皿・碗等30点余出土。右棚は一部消失。西隣の7号墓室とつながる。戦時中に避難場所に利用。
0.4	×	×	×	△ 10	×	墓室内は棚上まで埋土で覆われる。隣接する6号墓の墓室とつながる。墓庭は左右非対称。西隣の8号墓が先に造墓されていたため、西側へ拡張できなかったと考えられる。
0.5	?	×	×	×	?	棚上まで埋土で覆われる。汁ヒラシ南東隅で人骨1体出土。人骨は手足が揃えられた(整理された)状態で出土。棚は部分的に掘削され、右棚の残存状態は不良。墓口前に細長い砂岩ノジュールが露頭しており、サンミデーの縁石に利用した可能性がある。
-	×	×	×	○ 2	×	埋没墓。墓室天井が崩落する。原位置を保つ蔵骨器は2点(胴下部が残る)。蔵骨器片が墓室埋土から大量出土。
-	×	×	×	○ 5	×	埋没墓。墓室形状から本来は一次葬用の造墓と推測されるが、奥壁及び奥壁両側を拡張して蔵骨器を安置する。
-	×	○ (右)	×	○ 13	×	埋没墓。墓口上部が崩落する。蔵骨器の蓋が落下しているものも数点確認されたが、身はほぼ原位置を保持する。
0.2	×	○ (右)	×	○ 7	×	埋没墓。墓口上部の崩落により、墓室内は半分程の高さまで土砂堆積する。蔵骨器No.3のみ身の底部下に蓋を逆さにして置く。壁面に刃幅4cmのノミ痕が明瞭に残る。
0.42	×	×	×	○ 9	×	埋没墓。墓口前は堆積土で埋まり、汁ヒラシも棚の半分程の高さまで土砂堆積する。蔵骨器9点のうち5点の蓋が落下している。棚上の蔵骨器2点は、ほぼ半分には割れている。墓庭で埋納土坑を検出。土坑内から瓶子と小杯が出土。
-	×	×	×	○ 10	×	埋没墓。墓口前は堆積土で埋まる。蔵骨器10点のうち4点の蓋が外れていた。墓庭の堆積土中から閉塞石と推察される石灰岩と砂岩がまとまって出土。
0.4	×	○	×	● 11	×	空き墓。墓庭参道側に蔵骨器11点廃棄(人骨無し)。墓庭土坑4基中2基は葬具品を埋納。脇墓で転用蔵骨器(油壺)が1点出土したが、人骨の残存状態が不良のため判然としない。
0.3	×	×	×	● 5	×	墓室内で割れた蔵骨器(人骨無し)が大量出土。コンクリート製のサンミデー、コンクリートブロック石による墓口閉塞は戦後の補修か。壁面に刃幅4cmのノミ痕が明瞭に残る。

第2表 出土遺物一覽表

[illegible]

第3表 墓室平面形の類型（浦添市教育委員会 2007『市内遺跡発掘調査報告書（1）を一部改変』）

類型		墓室平面形と柵の形状	墓室及び柵の特徴や構築方法
1類	a		楕円またはいびつな形状。
	b		直線的な規格性をもって造る。
	c		蔵骨器が数点置けるくらいの広さで、墓口から奥壁まで直線的に造る。平面形は縦長の方形となる。1人（一次葬人骨）を安置する墓として造られる。棺箱は遺構形状と同様に縦置きとなる。 ※ 奥壁の片側または両側を拡張して蔵骨器を安置する場合もある。
	d		蔵骨器が数点置ける広さで平面形は楕円に近い。1c同様一次葬人骨を安置する墓として造られる。1cでは棺箱を縦置きするが、1dは横置きになる。
2類	a		正面の奥壁を凸状（＝出窓状）に成形。柵幅が汁ヒラシ幅より短くなる。
	b		正面奥壁と左右側壁を凸状に成形。
	c		正面奥壁と、左右側壁のいずれか片側を凸状に成形。
3類	a		平面形が「コ」字を90度反時計回りに回転した形状。柵は平坦になる。 ※ 左右柵の片側いずれかと正面柵の接地部に段差ができることもある。 ※ 柵の高さの違いで造墓年代が異なる可能性あり。
	b		平面形は3類aと同じだが、正面柵と左右柵の接地部に段差ができる。正面に比べて左右の柵が低くなる。
	c		奥壁（正面）と側壁のいずれか片側のみ柵を造る。平面形は「L」字を90度または180度、時計回りに回転した形状。
4類	a		墓室内が楕円またはいびつな形状で、ほぼ平行するように正面1段の柵を造る。
	b		墓室内が直線的な規格で造られ、正面に1段の柵を造る。 ※ 柵の高さの違いで造墓年代が異なる可能性あり。
	c		墓室内が直線的な規格で造られ、正面に2～3段の柵を造る。
5類	a		3類a＋4類c
	b		3類b＋4類c
	c		3類c＋4類c
6類	a		3類a＋4類b
	b		3類b＋4類b
	c		3類c＋4類b

第4章 調査の成果

調査した墓は前田真知堂B丘陵に所在する1・4・6・11・13・14・17・23・53号墓の15基で、全て丘陵の基盤砂岩層に横穴を掘って墓室にする掘込墓であった。各墓の立地状況についてみると、1・2号墓は、調査区東側の北斜面の標高106～108 mに、2号墓北側の標高約105 mには墓庭を共有する3・4号墓が立地していた。調査区中央の北斜面では段を形成していて、標高約110 mの上段に21～23号墓の3基が横並びし、下段には東側の6号墓から西側の16号墓までの約30 m間に12基の墓が隙間無く横並びしていた。6号墓は標高105 m、16号墓は標高102 mで、地形的にみると東から西へ向かってゆるやかに傾斜している。17号墓は、調査区中央付近の丘陵尾根が西側に扇状に広がる緩斜面の途中に所在しており、17号墓の庭囲いと12～14号墓は同一斜面の南北面に造られていた。

以下で、各墓の調査成果を記述していくが、調査した墓15基のうち遺構と遺物の残存状態が比較的良好な11基の墓について報告する。

第1節 1号墓・脇墓1・脇墓2

墓は、調査区内の最も東側にあつて西側には2号墓が隣接している。2号墓より低い位置に構築されていて墓庭の比高差は約2 mある。調査前の状況は、墓口付近に土砂が堆積し、半分ほど開口した隙間から墓室内を窺うと汁ヒラシには流入した土が棚の高さまで達していて、蔵骨器等はみられなかった。

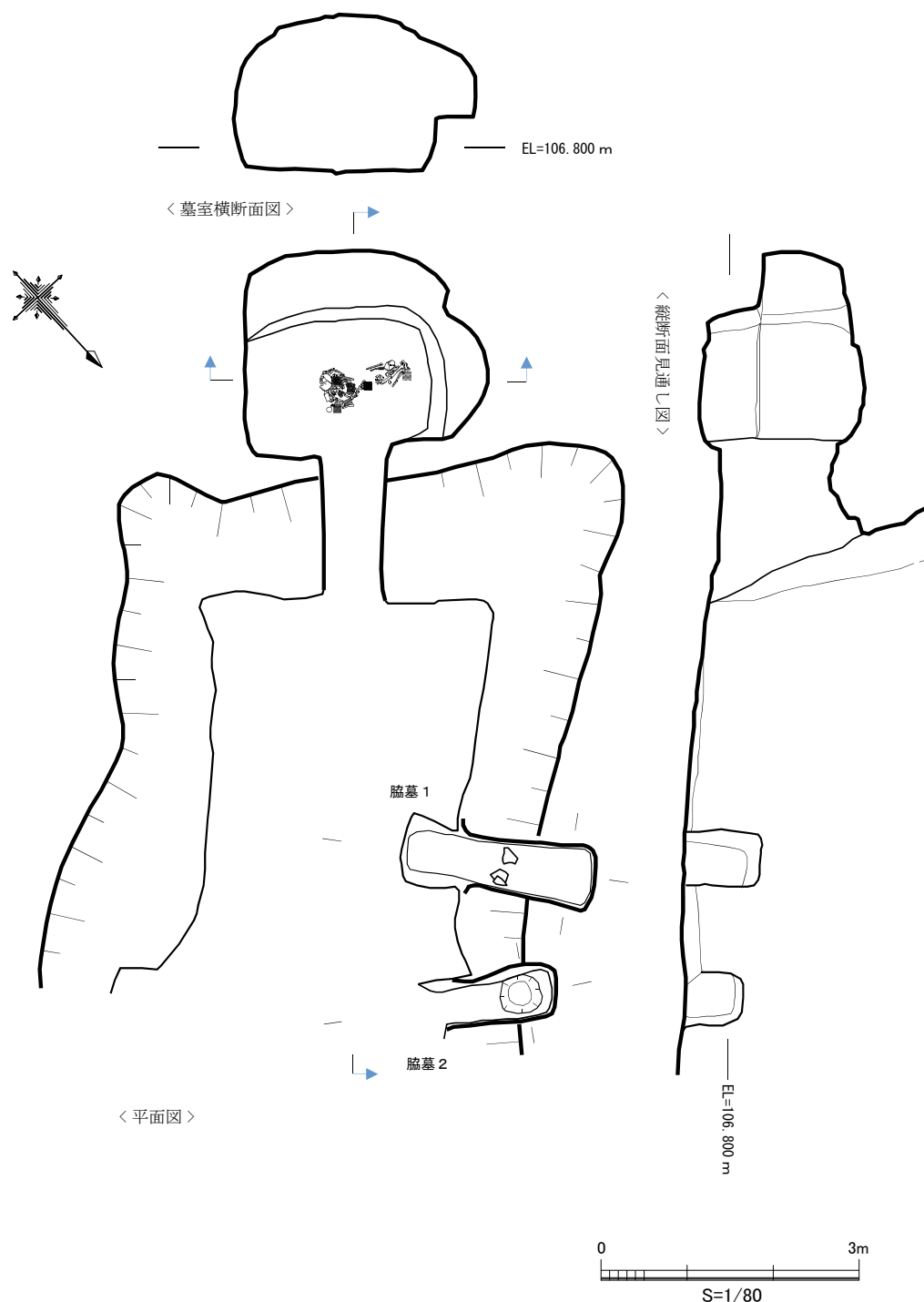
墓口前の土砂を除去すると、墓口下部で石灰岩の切石が出土した。切石の形状は正方形で、寸法は高さと同幅が0.6 m、厚さは0.15 mを測る。この切石は、出土地点が墓口下部であつたことや墓口幅とほぼ同じ大きさから閉塞石の一部と判断された。墓口の寸法は、幅0.6 m、高さ1.25 mで、羨道の長さは1.5 mを測る。墓口の方位は、北東（N42° E）を向く。汁ヒラシでは、埋土中から蔵骨器の破片が大量に出土し、これらを除去すると、ほぼ中央部で一次葬人骨が検出された。人骨は横向きに安置され、頭部は南東（N 126° E）を向いていた。残存状態は良好に思われたが、成人以外の情報は得られていない。一次葬の時期については、頭部傍のガラス瓶の副葬から近代以降と推察された。

墓室は、棚（L字状）と汁ヒラシで構成され、平面形は歪な隅丸方形を呈しており、墓室平面形のタイプの3類cに分類される。寸法は幅2.8 m、奥行き2.25 m、高さ1.9 m、棚の高さは調査した15墓の中では最大値となる0.6 mを測る。

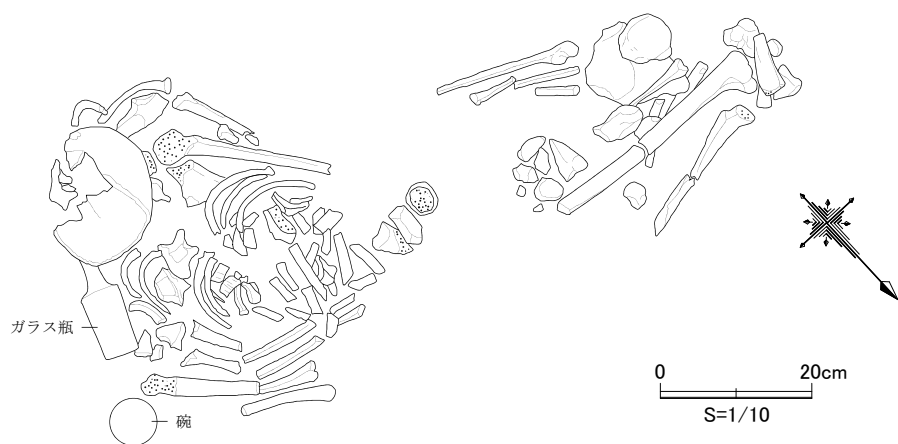
墓庭についてみると、西側の庭囲い部分に2基の脇墓が構築されており、墓口に近い方から番号を付した。脇墓1は、墓口から奥壁まで直線的に掘り込み、タイプの1類cに分類される。状態不良な一次葬人骨（若年1体）が検出され、頭位は不明であつたが長方形の墓室形状と同軸上になるものと考えられた。このほか、棺箱に使用された釘や棺箱の台石とみられる10～20cm大の砂岩と石灰岩が人骨の周りから検出された。脇墓2も1類cに分類されるタイプであつたが、脇墓1に比べて奥行きは短い。墓室内では蔵骨器が割れた状態で出土し、内部に人骨も確認された。この2基の

脇墓の規模や形状と遺物の出土状況から、脇墓 1 が一次葬用で、脇墓 2 が改葬後の蔵骨器安置用として、使い分けしていたことが推察された。脇墓は 2 基とも墓口側の天井が崩落して埋没状態で発見されており、調査時には閉塞石は確認できなかった。

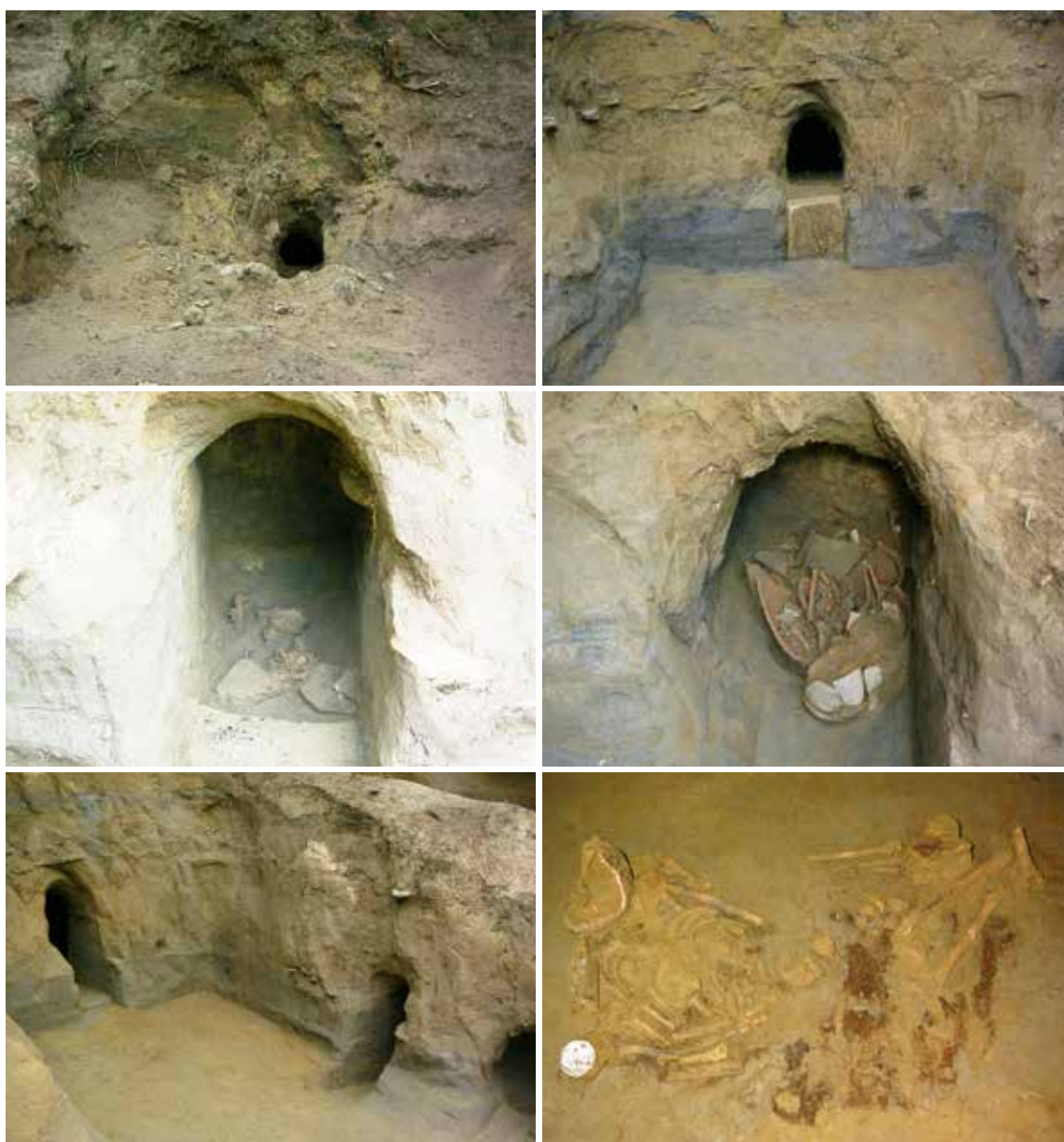
墓の造営年代を明らかにすることはできなかったが、蔵骨器の銘書の古い年代は「乾隆■年」（乾隆年間は 1736 ～ 1795 年）で、新しいものは「昭和 5 年」が確認されており、少なくとも 1930 年までは墓が機能していたことが窺える。



第 6 図 1 号墓 平・断面



第7図 1号墓 一次葬人骨出土状況

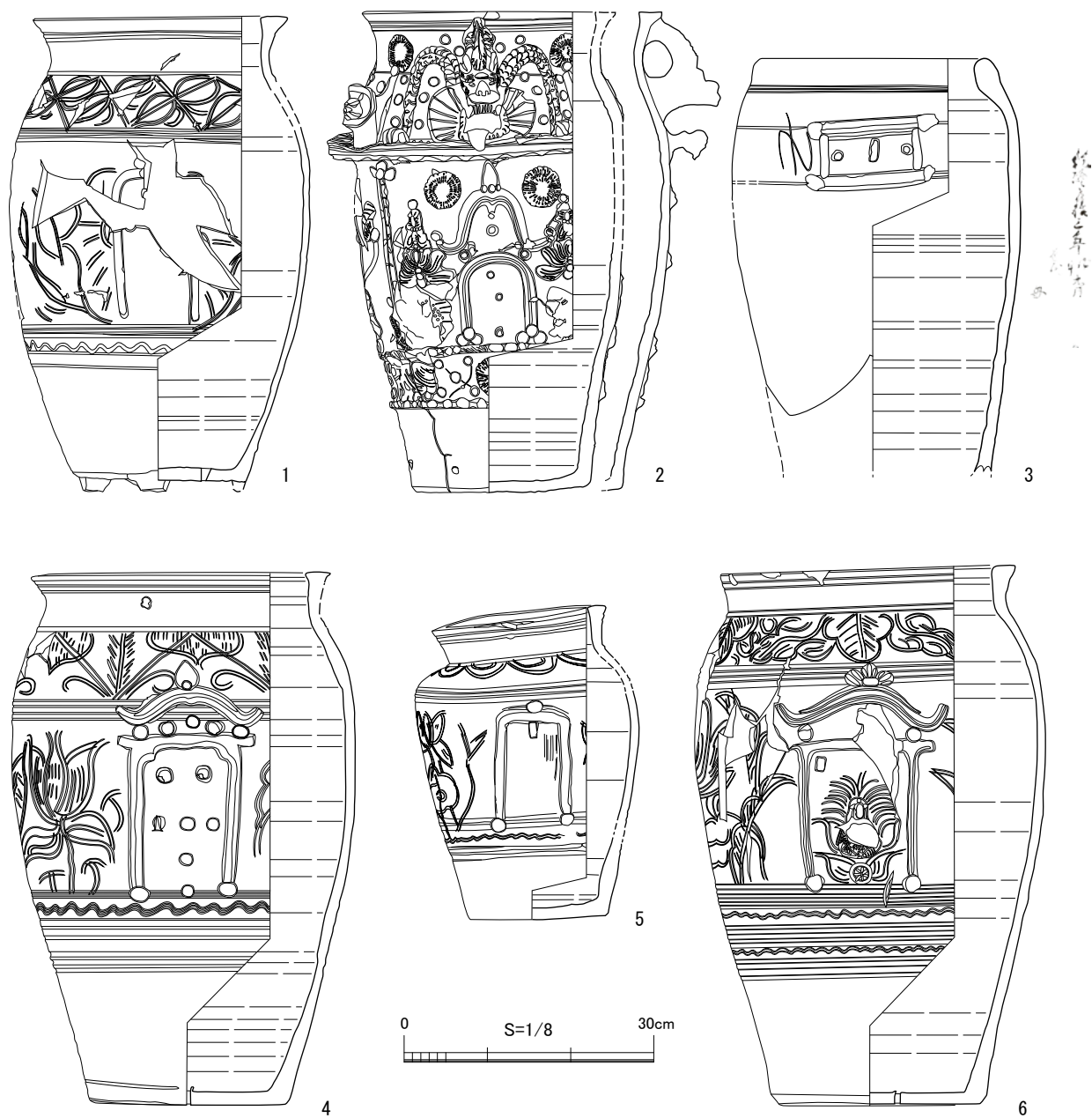


図版1 1号墓
 1段目左：掘削前の状況 右：墓口の閉塞石
 2段目左：脇墓1 一次葬人骨 右：脇墓2 蔵骨器検出状況
 3段目左：墓庭検出後 右：汁ヒラシ一次葬人骨

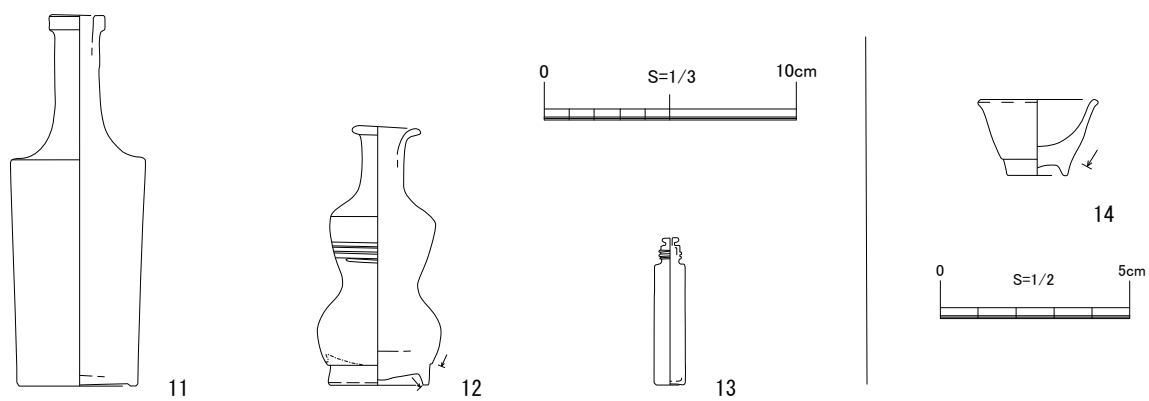
第4表 1号墓蔵骨器の観察一覧表

連番	挿図番号 図版番号	名称	型式	寸法 (cm)	観察所見 (蓋)①つまみ ②文様等 ③調整他 (身)①正面示形 ②文様等 ③調整他	銘書	銘書年代	被葬者			出土 地点
								人数	性別	年齢	
1	第8図 図版2	マンガン釉 甕形(身)	V D	30.6 35.6 20.9 57.2	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凹3・凹3。肩部:沈線葉文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線波状文。貼付三脚(うち一脚欠損)。底面孔:半月形15個。 ③外面:胴下部ヘラ削り。内面:水挽き。			1 1	女性 男性	成人 熟年	墓室埋土
2		マンガン釉 底付甕形 (身)	不明	30.4 32.2 21.2 57.5	①屋門:唐破風形貼付。 ②横帯凹2・凸1・無し・凸2。肩部(貼付+沈線):龍頭1・獅子頭3・龍・円形・格子。胴部(貼付+沈線):蓮上の仏と花(正面)・蓮文(側面~背面)。腰部(貼付+沈線):花文・格子・不明文様・円形孔11個。底面孔:円形11個。 ③外面:器面全体にナデ調整。内面:水挽き。						墓室埋土 墓庭
3		ボージャー 形(身)	IV	27.4 34.6 - -	①マド枠:平葺形貼付・1方2円。 ②横帯凹3。判有り。 ③外面:器面全体にナデ調整、胴下部指押さえ痕。内面:水挽き。	乾隆■拾三年 戊申■■■■■ ■/■■■■■■■■■■ /■■■■	1788?				墓室埋土 墓庭 3号墓庭
4		マンガン釉 甕形(身)	IV B	35.9 41.2 24.0 64.0	①屋門:唐破風形貼付。 ②横帯凹3・凸1・凹4・凹2。肩部:沈線葉文・鋸歯状文。胴部:沈線蓮華文。屋門内:貼付円文7個。腰部:沈線波状文2段。底面孔:円形15個。 ③外面:器面全体にナデ調整、胴下部ヘラ削り。内面:水挽き。			1 1 1 1	女性 男性 不明 不明	成人 成人 未成人 幼児	脇墓2
5		マンガン釉 甕形(身)	IV D	21.0 26.3 16.7 37.1	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凹3・凹3。肩部:沈線二重半円文。胴部:沈線蓮華文。胴下部:波状文。底面孔:半月形6個。 ③外面:胴下部ヘラ削り、器面全体にナデ調整。内面:水挽き。			1 1	不明 不明	幼児 小児	脇墓2
6		マンガン釉 甕形(身)	IV B	35.3 42.0 25.6 64.6	①屋門:唐破風形貼付。 ②横帯凹2・凹1・凸4・凹4。肩部:沈線葉文。胴部:沈線蓮華文。屋門内:沈線蓮華文の上に法師像貼付。腰部:沈線波状文2段。底面孔:半月形12個。 ③外面:器面全体にナデ調整、胴下部回転ヘラ削り。内面:水挽き。			1 1	不明 不明	成年 成人	墓室埋土
7	図版3	マンガン釉 底付甕形 (蓋)		32.0 25.5 15.7 11.3	①有孔宝珠・つまみ台1段。 ②つまみ台下貼付獅子頭4。体部沈線葉文。底下円形孔8個。鏝3.4cm。かえり無し。 ③外面:水挽き後、つまみ台は削り出し、つまみ下はナデ調整。内面:胴下部に横位のヘラ削り、水挽き。	大正八年八月 五日死保幸地 大良昭和五年 庚午十月廿八 日洗骨	死去:1919 洗骨:1930				墓室埋土
8		マンガン釉 甕形(蓋)		30.5 25.5 19.8 12.3	①有孔宝珠。つまみ台3段。 ②鏝2.4cm。かえり1mm。 ③外面:水挽き後、回転横ナデ。内面:水挽き。	光緒五年卯七 月十二日幸地 妻死去十七年 辛卯三月廿七 日洗■	死去:1879 洗骨:1891				墓室埋土
9		マンガン釉 甕形(蓋)		34.0 27.5 16.9 13.4	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②鏝2.6cm。かえり1.5mm。 ③外面:水挽き後、つまみ台は回転削り出し、つまみ下はナデ調整。内面:水挽き。	光緒二十一年/ 乙未■五月/廿 八日洗骨/久場 田■/二男…/ 筑登之	洗骨:1895				脇墓2
10		マンガン釉 甕形(蓋)		30.0 23.8 18.1 12.5	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②鏝3.0cm。かえり無し。 ③外面:水挽き後、回転横ナデ。内面:水挽き。	コチ■ニシクサ リン鳥女					墓室埋土

寸法は、ボージャー形・甕形の蓋が上から外径/内径/器高/体部高、身が上から口径/胴径/底径/器高の計測値である。
 家形・御殿形は、蓋が上から縁部(長辺×短辺)/器高、身が上から口縁部(長辺×短辺)/底部(長辺×短辺)/器高の計測値である。



第8图 1号墓 藏骨器



第9图 1号墓 出土遗物

第5表 1号墓出土遺物の観察一覧表

単位:cm
括弧内は残存の寸法

連番	挿図番号 図版番号	器種 残存状況	口径 器高 底径	胎土・露胎 部の色調	釉種	施釉 (範囲、方法)	貫入	観察所見 (成形・調整・施文他)	産地 年代	出土地点
11	第9図 図版4	ガラス瓶 完形	2.2 14.7 4.65	透明	-	-	-	外底面に波状の凹み。	不明	1号墓 墓室汁ヒラシ 一次葬人骨 の頭部近く
12		瓶 ほぼ完形	2.7 10.3 3.9	白色粒子、 黒色粒子・ にぶい橙	褐釉・鉛 釉系	内面頸部途中から外面は高台際まで。高台内は部分的に施釉されるが釉剥ぎは無い。高台をつまんで浸し掛。	無	胴部に3本の沈線。ケズリ高台。高台内中央部分がやや盛り上がる。高台内に付着物。	沖縄産 施釉陶 器	1号墓 脇墓1墓室 堆積土
13		ガラス瓶 完形	0.65 5.8 1.2	透明	-	-	-	薬瓶か。	不明	1号墓 脇墓2墓室 堆積土
14		小杯 完形	2.2 2.0 1.6	不明・ 淡灰褐	透明釉	内底から外面高台際まで。高台をつまんで浸し掛。	無	ケズリ高台。高台内中央部は突起状に盛り上がる。	沖縄産 施釉陶 器	1号墓 脇墓1墓室 堆積土



図版2 1号墓 蔵骨器(1)



図版3 1号墓 蔵骨器 (2)



図版4 1号墓 出土遺物

第2節 2号墓

墓は、調査区内の東側に位置し、東隣に1号墓が所在している。墓の規模や構築方法は1号墓とほぼ同じだが墓庭の標高で比べると2m程高い位置に造られている。墓口は開いていて、墓庭には板状の閉塞石や香炉石、遺骨の入っていない19点の蔵骨器が整然と置かれていた。状況から、遺骨のみを移転して蔵骨器が廃棄されたものと判断された。

墓口の寸法は、幅0.6m、高さ0.9m、羨道の長さは1.0mを測り、墓口の方位は北東(N47°E)を向く。墓口の造り方が特徴的で、羨道の片側壁の途中を断面L字形に成形している。このL字部分は、閉塞石が墓室側へ倒れないようにする「かかり」の役目を果たしている。このタイプの墓口は、基本的には入口寄りの両側壁や上部壁を断面L字形にすることが確認されており、類例から閉塞石が板状になる傾向が窺える。また、墓庭側の閉塞石の転倒対策としては、香炉石(押え石兼用で、墓口幅とほぼ同じ寸法の横幅をもつ)が配置される事が多い。サンミデーと墓口下部には石灰岩の切石が使用され、モルタルで仕上げている。モルタルは近代以降の補修と推察された。

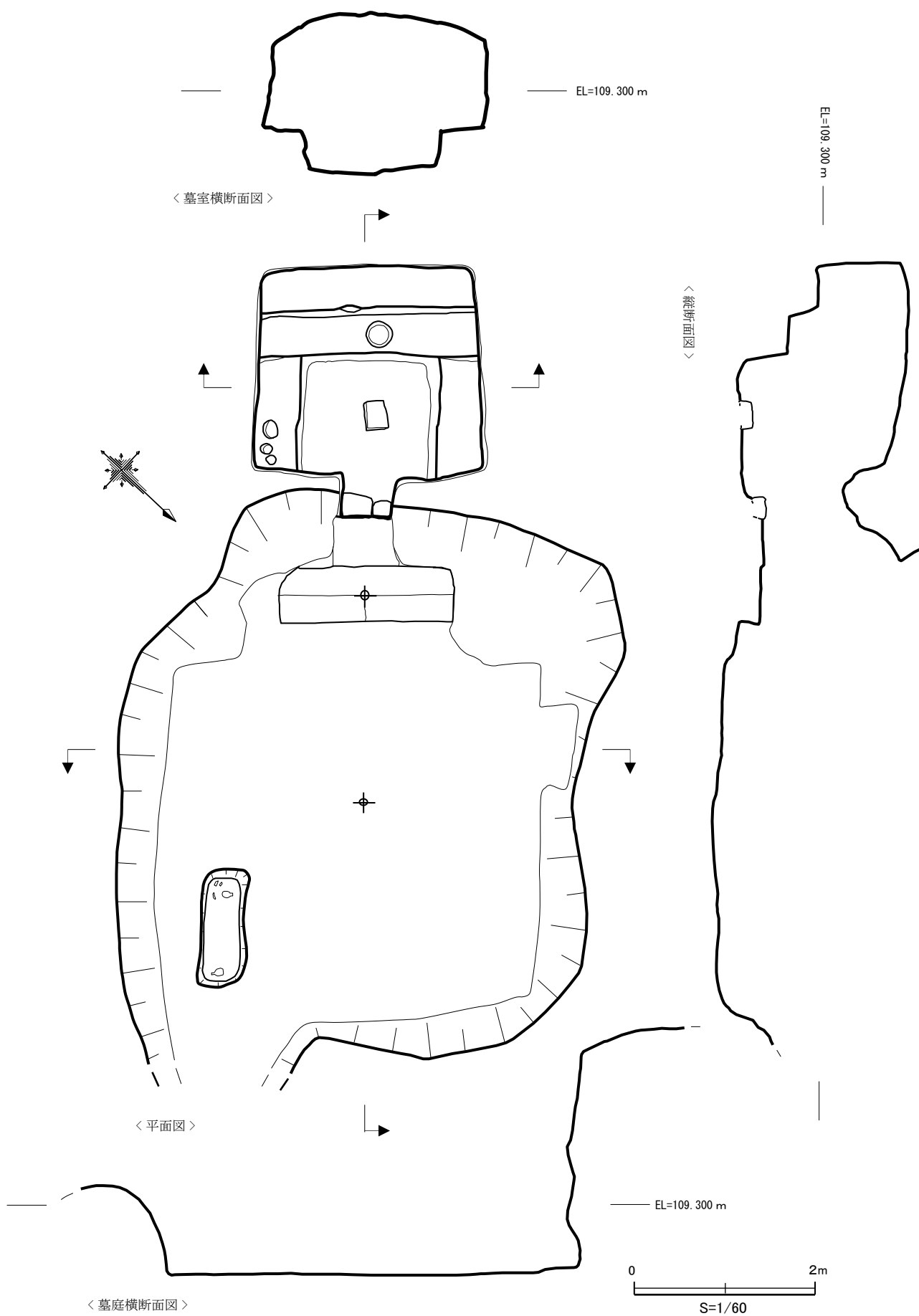
墓室は、棚(コ字状+1段)と汁ヒラシからなり、類型の6類bに分類される。平面形は正方形で、幅と奥行きは2.5m、高さは1.9mを測る。墓室内に堆積土が無いことからほぼ造墓時の状態と考えられた。このほか正面2番棚と右棚に円形の浅い凹みが4箇所確認されている。この凹みの直径が蔵骨器の底径サイズと推察されたため、蔵骨器を据えるためのものと考えられた。この凹みの構築時期については、墓室が手狭となり整理が必要となって行った可能性が高いと考えられることから、墓が機能していた終盤頃と推察された。

墓庭は、寸法が4.5m×4.2mを測り、入口は北東隅に造られている。基盤砂岩層を利用した土手状の庭囲いを有し、西側に面した庭囲い部分の途中に用途不明の横穴がある。穴の寸法は幅0.9m、奥行き0.4m、高さ0.5mを測る。また、墓庭入口近くでは土坑(幅0.55m、長さ1.4m、深さ0.1～0.25m)が検出されており、土坑内から瓶2点と煙管の雁首と吸口が出土した。第14図52の瓶と同図58・59の煙管はセットで出土し、少し離れた位置から第14図53の瓶が1点出土した。出土地点がやや離れており、穴の深さも異なるため、2基の土坑の可能性も考えられたが、掘形で明確に分けることはできなかった。

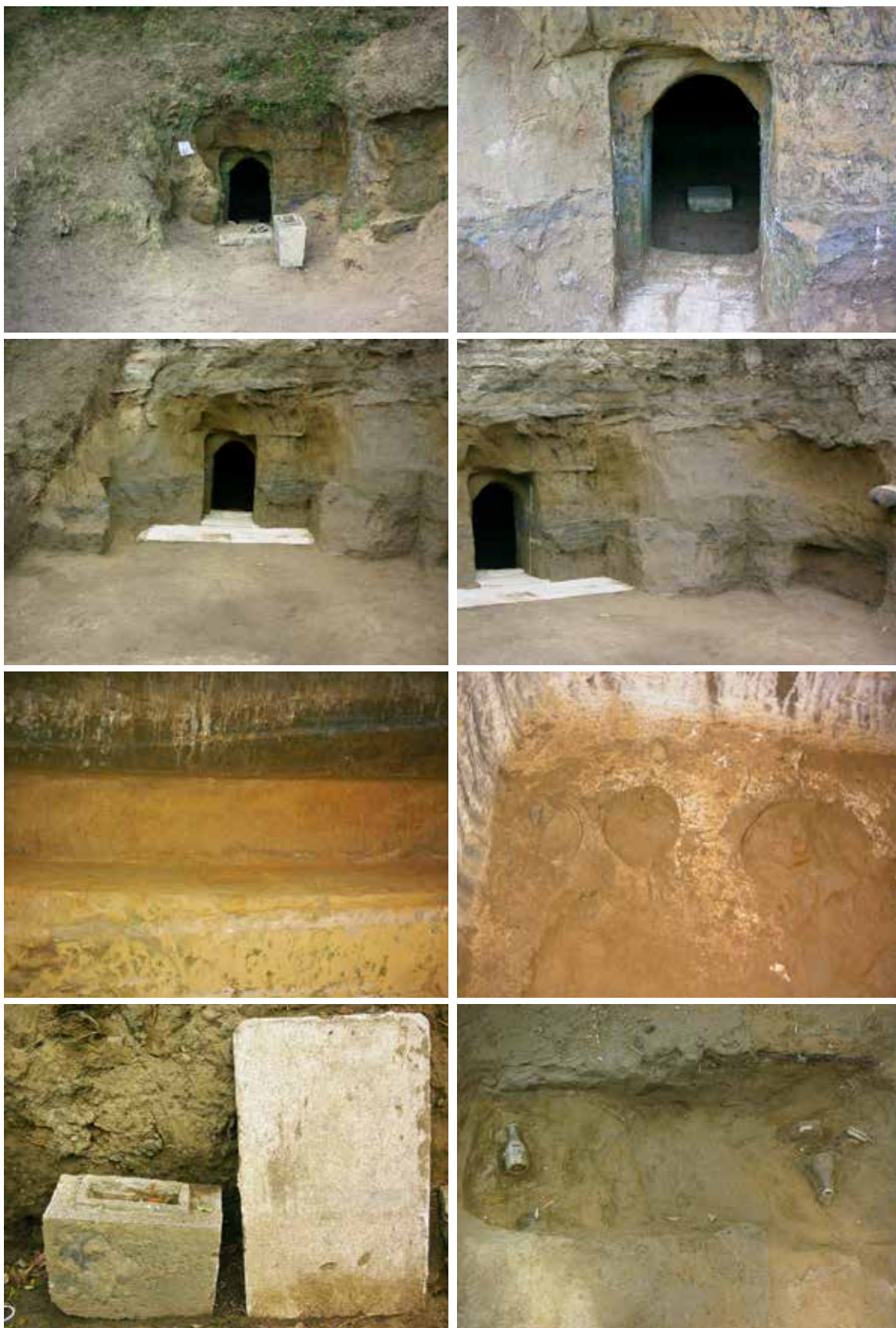
墓の造営年代を明らかにすることはできなかったが、蔵骨器の銘書の古い年代は「嘉慶18年(1813年)」で、新しいものは「1969年」が確認されており、近年の区画整理に伴う墓移転時まで使用されていたものと推察された。



図版5 2号墓 左：除草後の状況 右：蔵骨器の廃棄状況



第10図 2号墓 平・断面



図版6 2号墓
 1段目左：掘削前の状況 右：墓口
 2段目左：検出後 右：庭囲いの不明横穴
 3段目左：凹み遺構（正面二番棚） 右：凹み遺構（右棚）
 4段目左：閉塞石と香炉石 右：土坑内の遺物検出状況

第6表 - 1 2号墓蔵骨器の観察一覧表

連番	挿図番号 図版番号	名称	型式	寸法 (cm)	観察所見 (蓋)①つまみ ②文様等 ③調整他 (身)①正面示形 ②文様等 ③調整他	銘書	銘書年代	被葬者			出土 地点
								人数	性別	年齢	
15	第11図 図版7	マンガン釉 甕形(蓋)		29.8 24.2 16.9 11.8	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②鏝3.0cm。かえり2mm。 ③外面:水挽き後、横位のヘラ削り。内 面:水挽き。	四男高嶺里子親 雲上正行妻同治 拾壹年申十月二 十六日死去光緒 三年丑二月二十 八日洗骨/ 壽二十二	死去:1879 洗骨:1891				墓庭
16		マンガン釉 甕形(身)	IV D	28.9 34.2 22.6 52.9	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凸2・凹3。肩部:沈線葉 文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線波状 文2段。底面孔:半月形6個。 ③外面:底部近くまで丁寧なナデ調整、 斜位ヘラ削り。内面:水挽き。	四男高嶺里子親 上正行妻壽二十 二同治拾壹年申 十月・六日死去 光緒三年丑二月 二十八日洗骨	死去:1879 洗骨:1891				墓庭
17		マンガン釉 甕形(身)	III C	27.3 34.1 23.0 55.7	①屋門:位牌形貼付。屋門内露胎。 ②横帯凹2・凸1・凸3・凸3。肩部:沈線鋸 齒文(一部分)。胴部:貼付蓮華文+沈 線茎文。腰部:沈線波状文1段。底面 孔:半月形6個。 ③外面:器面全体にナデ調整、胴下部 にヘラ削り、内面:水挽き。						墓庭
18		マンガン釉 甕形(身)	IV B	35.3 42.4 23.2 63.6	①屋門:唐破風形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凸3・凹3。肩部:沈線葉 文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線波状 文2段。底面孔:円形16個。 ③外面:器面全体にナデ調整、胴下部 ヘラ削り。内面:水挽き。						墓庭
19		マンガン釉 甕形(身)	IV D	29.9 34.9 20.7 55.7	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹2・凹1・凸3・凹4。肩部:沈線葉 文。胴部:沈線蓮華文。屋門内:貼付蓮 華上に仏、腰部:沈線波状文2段。底面 孔:三日月形9個。 ③外面:器面全体にナデ調整、胴下部 ヘラ削り。内面:水挽き。						墓庭
20		マンガン釉 甕形(身)	IV B	33.0 40.2 22.4 61.2	①屋門:唐破風形貼付。 ②横帯凹3・凸1・凸3・凹3。肩部:沈線葉 文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線波状 文2段。底面孔:半月形14個。口縁内面 に「〇+」の墨書。 ③外面:器面全体にナデ調整、胴下部 ヘラ削り。内面:水挽き。						墓庭
21		マンガン釉 甕形(身)	IV C	30.3 37.1 19.0 56.7	①屋門:アーチ形貼付。屋門内露胎。 ②横帯凹2・凸1・凸2・凹3。肩部:沈線葉 文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線波状 文2段。底面孔:半月形6個。 ③外面:器面全体にナデ調整、胴下部 回転横ナデ。内面:水挽き。						墓庭
22		マンガン釉 甕形(身)	V 以降 D	19.1 24.0 15.8 39.6	①屋門:アーチ形沈線。 ②横帯凹2・凹1・凹3・凹3。肩部:沈線葉 文。胴部:沈線蓮華文。胴下部:沈線波 状文2段。底面孔:円形8個、雑な穿孔で 空いていない孔が3個ある。 ③外面:水挽き後、横と斜位のナデ調 整、胴下部回転ヘラ削り。内面:水挽 き。						墓庭

寸法は、ボージャー形・甕形は、蓋が上から外径/内径/器高/体部高、身が上から口径/胴径/底径/器高の数値を記している。
家形・御殿形は、蓋が上から縁部(長辺×短辺)/器高、身が上から口縁部(長辺×短辺)/底部(長辺×短辺)/器高の計測値を記している。

第6表 - 2 2号墓蔵骨器の観察一覧表

連番	挿図番号 図版番号	名称	型式	寸法 (cm)	観察所見 (蓋)①つまみ ②文様等 ③調整他 (身)①正面示形 ②文様等 ③調整他	銘書	銘書年代	被葬者			出土 地点
								人数	性別	年齢	
23	第12図 図版7	マンガン釉 甕形(身)	V D	26.1 28.0 18.7 54.7	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凹4・凹4。肩部:鋸歯文 (葉文の簡略?)・波状文。胴部:無し。 腰部:沈線波状文2条2段。底面孔:円形 19個。底部立ち上がり付近に穿孔:円形 6個。 ③外面:水挽き後、横と斜位のナデ調 整、所々へら削り。内面:水挽き。						墓庭
24		転用 (壺・身)		9.3 13.5 8.0 19.1	③外面:水挽き後、横と斜位のナデ調 整、口唇部回転へら削り。内面:水挽 き。外面で付着物が所々に認められる。						墓庭
25	第12図 図版8	転用 (壺・身)		10.5 18.8 10.0 21.0	②外面の口縁部と高台を除く胴部全面 に縦位の飛び匏を施す。 ③口唇部と畳付にアルミナが付着し、口 縁部内外でアルミナを削り落とした痕が 見られる。内外面に茶褐色の釉を施す。						墓庭
26		現代骨壺 (蓋)		17.3 14.3 3.3 -	①無し。 ②外面:沈線+絵付けの葉文、ペンキ状 の藍・灰・金・緑色の釉。 ③外面:刷毛調整。内面:水挽き。	一九六九年六月 十日亡/故高嶺 ツル霊/行年九 十一才	死去:1969 ※マジック ペンで書か れる。				墓庭
27		現代骨壺 (身)		16.6 19.3 16.4 25.3	①屋門:唐破風形貼付。 ②肩部:貼付円形。胴部:沈線+絵付け の蓮文、ペンキ状の藍・灰・金・緑色の 釉。 ③外面:器面全体にナデ調整。内面:水 挽き。						墓庭
28		マンガン釉 甕形(身)	IV B	28.8 34.8 21.8 54.3	①屋門:唐破風形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凸2・凹3。肩部:沈線葉 文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線波状 文2段。底面孔:半月形5個。 ③外面:水挽き後、横と斜位のナデ調 整、胴下部にへら削り。内面:水挽き。						墓庭
29		マンガン釉 底付甕形 (身)		33.8 38.9 24.8 65.6	①屋門:唐破風形貼付(門を龍柱1対、 屋門内に蓮と仏)。 ②横帯凹2・凸1・凸1・凸1、肩部(貼付): 龍頭1・獅子頭5・龍。胴部(貼付+沈 線):前面に竹管の刺突文、側面に貼付 蓮華と蓮上に仏。腰部(貼付):龍と円形 文、花文。底面孔:円形30個。 ③外面:水挽き後、横と斜位に丁寧なナ デ調整。内面:水挽き。						墓庭
30		マンガン釉 甕形(身)	V D	25.6 27.4 16.2 53.9	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹3・凸1・凹5・凹3。肩部:沈線葉 文。胴部:無し。腰部:沈線波状文2段。 底面孔:円形11個。底部立ち上りに穿 孔4個。 ③外面:器面全体にナデ調整。内面:水 挽き。底部に砂大量付着。						墓庭
31		マンガン釉 底付甕形 (身)		20.9 37.6 20.0 62.6	①屋門:唐破風形貼付(門を龍柱1対、 屋門内に蓮と仏)。 ②横帯凹2・凸1・凸2・凸2。肩部(貼付): 龍頭1・獅子頭4・花文(正面)・格子+円 形文(側面~背面)。胴部(貼付+沈 線):蓮華文と蓮上に仏、花文と雲。腰部 (貼付+沈線):巴文・雲・葉?文。底面 孔:円形13個。 ③外面:水挽き後、横と斜位に丁寧なナ デ調整。内面:水挽き。						墓庭

第6表 - 3 2号墓蔵骨器の観察一覧表

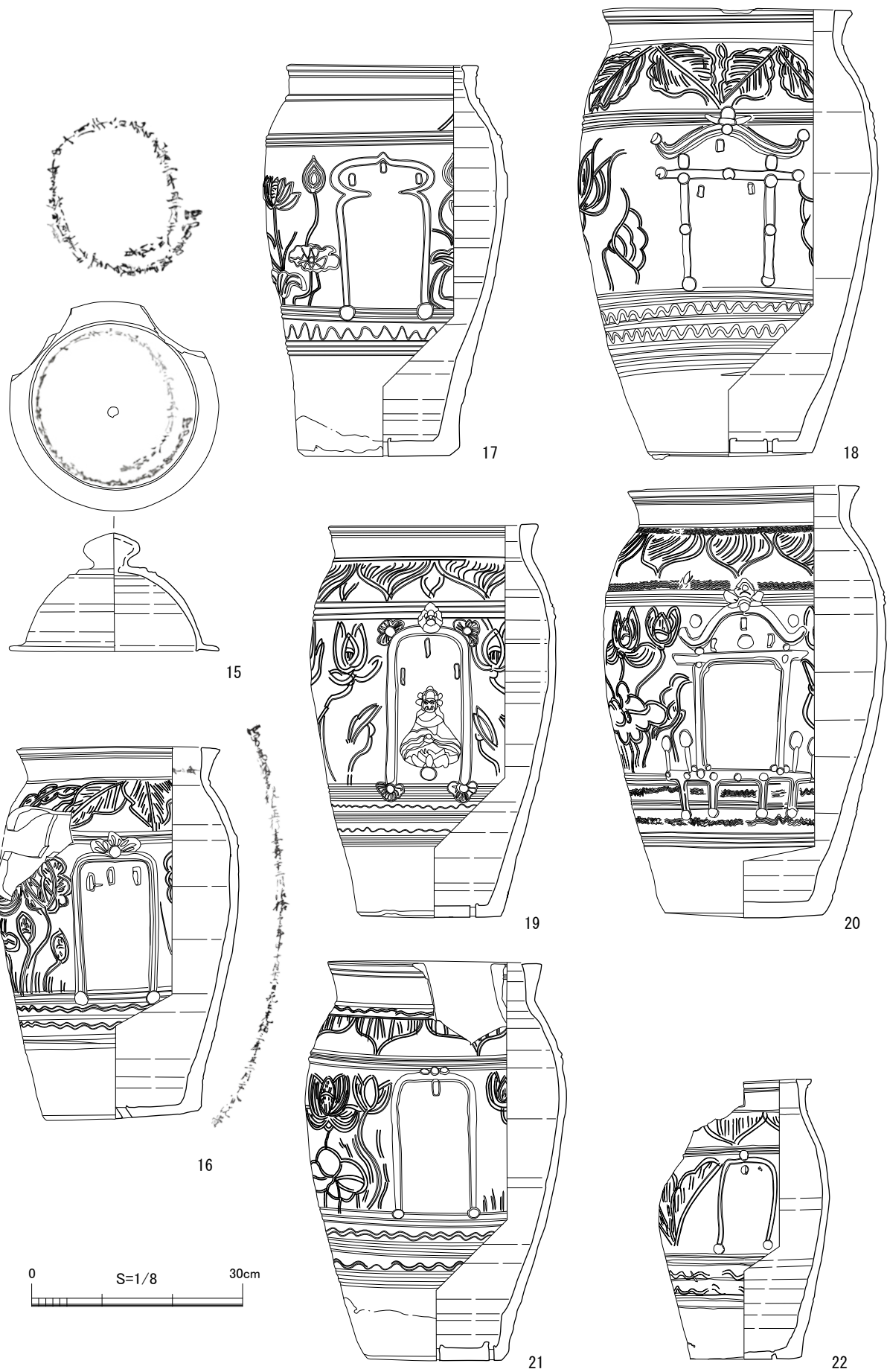
連番	挿図番号 図版番号	名称	型式	寸法 (cm)	観察所見 (蓋)①つまみ ②文様等 ③調整他 (身)①正面示形 ②文様等 ③調整他	銘書	銘書年代	被葬者			出土 地点
								人数	性別	年齢	
32	第12図 図版8	マンガン釉 甕形(身)	V D	26.6 30.9 19.2 54.9	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹2・凹1・凹3・凹2。肩部:沈線葉文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線波状文2段、底面孔:正方形23個、胴下部に方形孔6個、脚付3個。 ③外面:水挽き後、横と斜位のナデ調整、内面:水挽き。						墓庭
33		マンガン釉 甕形(身)	V D?	34.0 35.6 18.0 56.4	①屋門:アーチ形?貼付。 ②横帯凹2・凸1・凹3・凹3。肩部:沈線葉文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線波状文2段。底面孔:半月形8個。 ③外面:水挽き後、横と斜位のナデ、腰部以下へう削り。内面:水挽き。						墓庭
34	図版8	マンガン釉 甕形(身)	IV式 以降 E	20.0 25.7 17.2 35.4	①屋門:唐破風形線彫り。 ②横帯凹2・凸1・凹3・凹2。肩部:沈線葉文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線波状文。底面孔:半月形11個。 ③外面:器面全体にナデ調整、腰部以下へう削り。内面:水挽き、回転横ナデ。						墓庭
35		マンガン釉 甕形(身)	IV B	28.0 33.4 20.5 51.4	①屋門:唐破風形貼付。屋門内露胎。 ②横帯凹2・凸1・凸3・凹3。肩部:沈線葉文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線波状文2段。底面孔:円形9個。 ③外面:器面全体にナデ調整、胴部へう削り。内面:水挽き。						墓庭
36	第13図 図版9	マンガン釉 甕形(蓋)	IV C	30.0 24.3 18.2 13.2	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②鐐2.9cm。かえり2mm。 ③外面:水挽き後、横位のへう削り。内面:水挽き。	光緒八年壬午八月三日邊土名親方正延二女真牛洗骨	洗骨:1882				墓庭
37		マンガン釉 甕形(蓋)	IV C	33.2 27.6 18.7 14.6	①有孔宝珠。つまみ台3段。 ②鐐2.5cm。かえり3mm。 ③外面:水挽き後、横ナデ。内面:水挽き、天井部へう削り。つまみ:へう削り。	光緒十七年辛卯二月廿四日洗骨 嫡子高嶺子童名蒲戸	洗骨:1891				墓庭
38		マンガン釉 甕形(蓋)	IV C	27.8 21.2 13.6 10.0	①有孔宝珠。つまみ台1段。 ②鐐2.9cm。かえり2mm。 ③外面:回転へう削り。内面:水挽き。	明治三十二年己亥十一月二十二日高嶺正良母御洗骨	洗骨:1899				墓庭
39		マンガン釉 甕形(蓋)		29.8 24.6 18.2 13.2	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②鐐3.2cm。かえり2mm。 ③外面:水挽き後、横ナデ、鐐周辺は刷毛調整。内面:水挽き、横位と斜位に刷毛調整、天井部へう削り、3cm大の付着物2個。つまみ:刷毛調整、接合部は横ナデ。						墓庭
40		マンガン釉 甕形(蓋)		30.9 24.3 16.5 11.6	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②鐐3.2cm。かえり3mm。 ③外面:水挽き後、回転へう削り、鐐周辺は刷毛調整、内面:水挽き、天井部へう削り、つまみ:丁寧な刷毛調整。	同治三年又五月九日死去同年十一年甲申十月廿七日洗骨邊土名親雲上伯母	死去:1864 洗骨:1872				墓庭
41		マンガン釉 甕形(蓋)		26.8 20.0 14.6 11.1	①有孔宝珠。つまみ台1段。 ②鐐3.2cm。かえり3mm。 ③外面:水挽き後、横ナデ、鐐周辺は刷毛調整。内面:水挽き、天井部へう削り。つまみ:へう調整	大清道/光武拾六/年卒辰/正月五日卒/元■邊/土名親方/室也/咸豐三/年丑九月/二十七日洗骨/二代邊/土名親雲上五男三良/一同二洗骨	死去:1836 洗骨:1853				墓庭

寸法は、ボージャー形・甕形は、蓋が上から外径/内径/器高/体部高、身が上から口径/胴径/底径/器高の数値を記している。

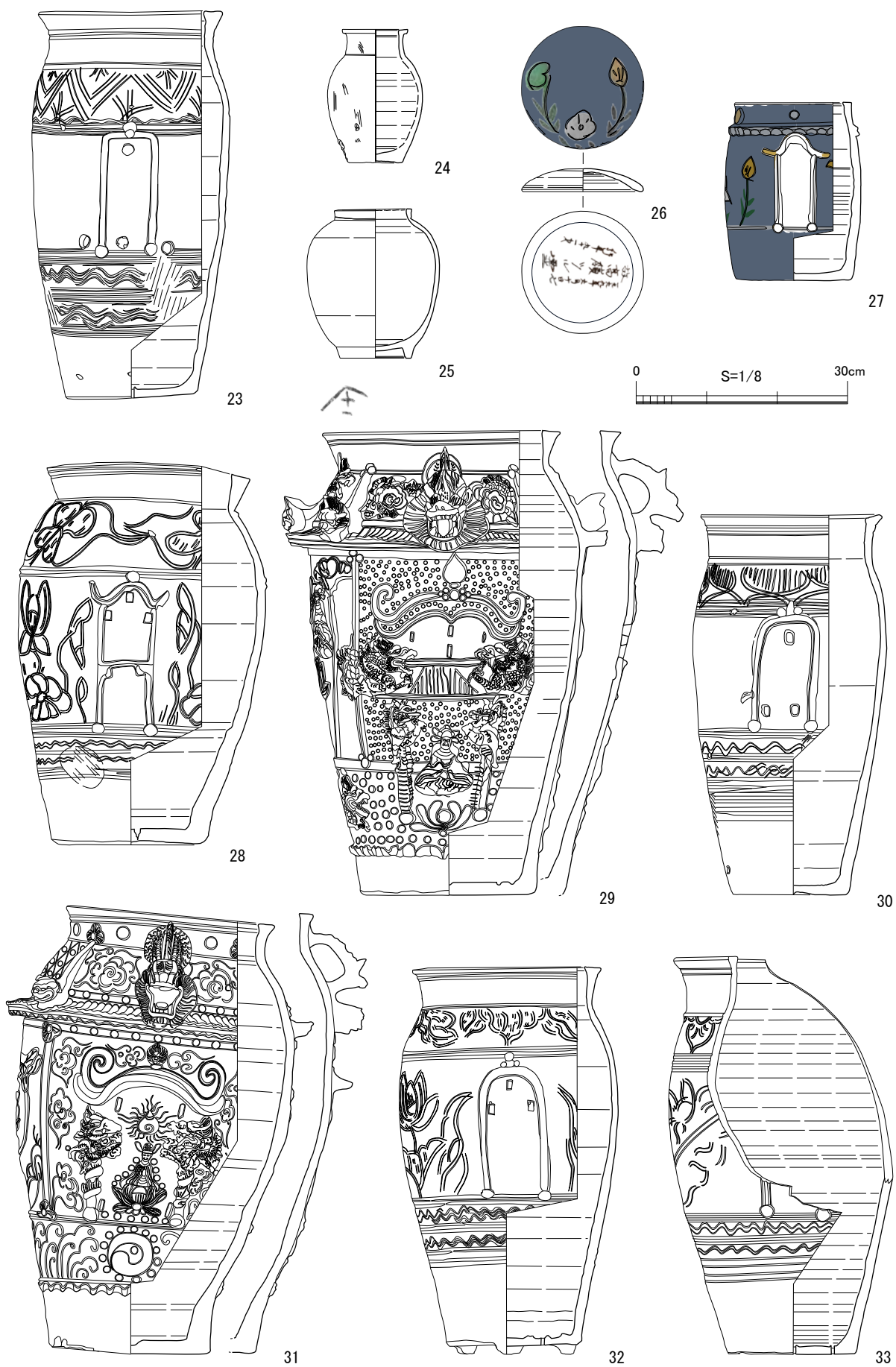
家形・御殿形は、蓋が上から縁部(長辺×短辺)/器高、身が上から口縁部(長辺×短辺)/底部(長辺×短辺)/器高の計測値を記している。

第6表 - 4 2号墓蔵骨器の観察一覧表

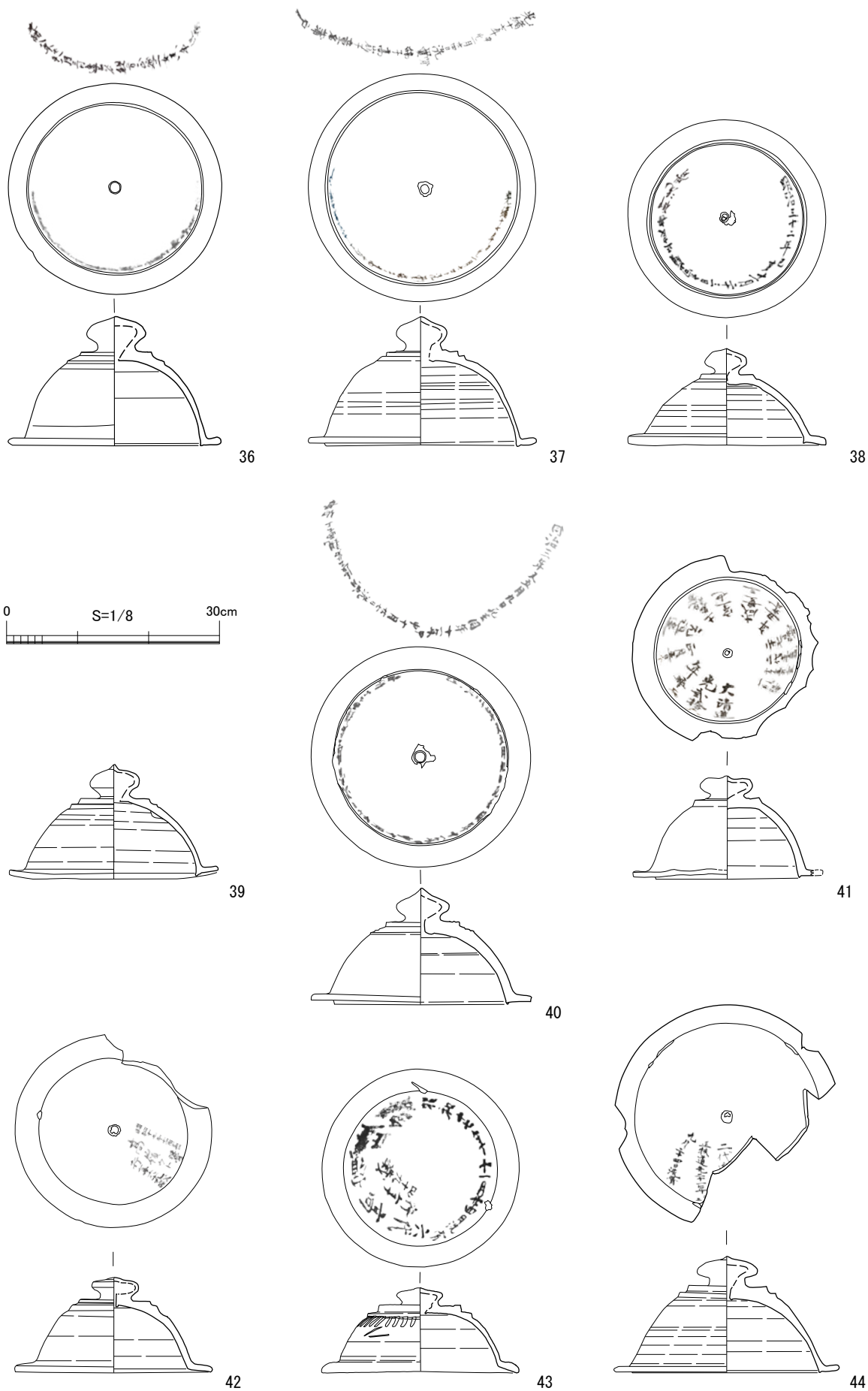
連番	挿図番号 図版番号	名称	型式	寸法 (cm)	観察所見 (蓋)①つまみ ②文様等 ③調整他 (身)①正面示形 ②文様等 ③調整他	銘書	銘書年代	被葬者			出土 地点
								人数	性別	年齢	
42	第13図 図版9	マンガン釉 壺形(蓋)		27.8 21.0 13.5 10.3	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②鐫3.4cm。かえり無し。 ③外面:水挽き後、横ナデ、鐫周辺は刷毛調整。内面:水挽き、横位と斜位に指ナデと刷毛調整。つまみ:ヘラと刷毛による調整。	昭和十七年十一月二十四日/洗骨/高嶺ウト/行享六十九歳	洗骨:1942				墓庭
43		マンガン釉 壺形(蓋)	VI D	27.7 21.5 11.9 9.5	①有孔宝珠。つまみ台2段、台外縁に凹線1条。 ②鐫3.0cm。かえり無し。つまみ台二段目下に縦位の飛び鉋を廻らす。 ③外面:水挽き後、横位の調整。内面:水挽き、横位の刷毛調整、天井部ヘラ削り。つまみ:ヘラと刷毛による調整。	六代高嶺■■■正全昭和十七年十一月廿四日洗骨/行年/四十九歳	洗骨:1943				墓庭
44		マンガン釉 壺形(蓋)	III C	31.8 26.2 16.5 12.2	①有孔宝珠・つまみ台2段、台外縁に凹線1条。 ②鐫2.6cm。かえり2mm。 ③外面:水挽き後、横ナデ、縁部から体部に凸面を帯状に5条残す。鐫周辺はナデ。内面:水挽き、横位と斜位のナデ、天井部ヘラ削り。つまみ:ナデ調整。	二代(欠)/正伏道光二十一年辛丑/九月二十四日洗骨	洗骨:1841				墓庭
45	図版9	マンガン釉 壺形(蓋)		22.3 15.9 - 9.6	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②鐫3.2cm。かえり1.5mm。 ③外面:水挽き後、横ナデ。内面:水挽き。	咸豊十一■■■■ 辺土名親雲上娘 死去真嘉■	死去:1861				墓庭
46		マンガン釉 壺形(蓋)		29.2 22.8 17.2 12.6	①有孔宝珠。つまみ台3段。 ②鐫3.4cm。かえり4mm。墨書の判?。 ③外面:水挽き、つまみ台接合部回転ヘラ削り。内面:水挽き。	咸豊九未/年十一月六男/樽金長女真牛/兩人一同洗骨	洗骨:1859				墓庭
47		マンガン釉 壺形(蓋)		28.8 21.4 16.1 11.5	①有孔宝珠。つまみ台1段。 ②鐫3.1cm。かえり4mm。 ③外面:水挽き後、ナデ、回転ヘラ削り。内面:水挽き。	嘉慶拾八年癸酉/四月式拾六日/邊土名親方室/■同人娘嘉■/■人洗骨/道光拾四年甲午七月十二日/邊土名親方娘/■■■ ■骨入加	洗骨:1813 追葬?: 1834				墓庭
48		マンガン釉 底付壺形 (蓋)		32.5 25.9 17.0 13.0	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②鐫3.0cm。かえり4mm。正面に開口龍頭胴付、左右後ろに閉口龍頭。つまみ台下花文(貼付と沈線)、屋根瓦。底下円形孔4個。 ③外面:水挽き後、器面全体にナデ。径2mmの孔点在。内面:水挽き。	四代嫡子高嶺正有/光緒十七年卯二月二十三日明治二十五年旧三月廿三日/死明治三十四年旧十二月/洗骨/大正十四年丑旧/五月十七日正有/妻ウト洗骨	死去:1892 洗骨:1901				墓庭
49		マンガン釉 底付壺形 (蓋)		33.4 26.7 19.5 13.5	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②鐫2.9cm。かえり1mm。正面に開口龍頭胴付、左右後ろに閉口龍頭。つまみ台下沈線花文、魚子貼付、屋根瓦。底下円形孔8個。 ③内面:水挽き。	国頭按司正倉/次男馬宏勲/邊土名親方/正延道光/十四年甲午七月/十二日洗骨	洗骨:1835				墓庭



第11图 2号墓藏骨器(1)



第12图 2号墓藏骨器(2)



第13图 2号墓 藏骨器 (3)



图版7 2号墓 藏骨器 (1)



图版8 2号墓 藏骨器 (2)

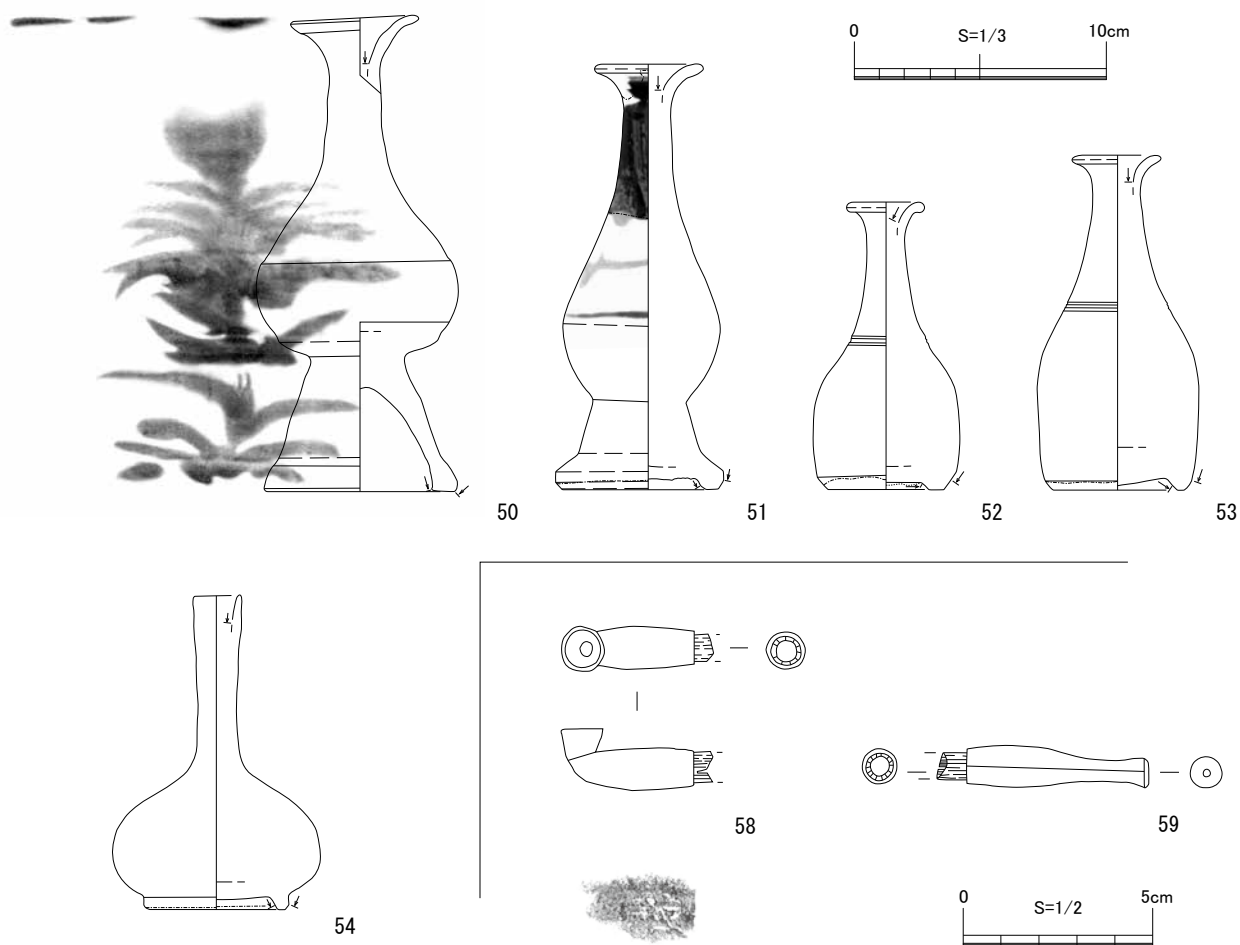


図版9 2号墓 藏骨器 (3)

第7表 2号墓出土遺物の観察一覧表

単位:cm
括弧内は残存の寸法

連番	挿図番号 図版番号	器種 残存状況	口径 器高 底径	胎土・露胎 部の色調	釉種	施釉 (範囲、方法)	貫入	観察所見 (成形・調整・施文他)	産地 年代	出土地点
50	第14図 図版10	瓶子 ほぼ完形	5.1 18.9 7.5	黒色微粒子・灰白(高台外面の欠損部)	白化粧 呉須 透明釉 鉄釉	内面口縁部直下から 量付を除き総釉。白 化粧後、口唇～口縁 内下部と外面の草花 文を呉須で描き、透明 釉を施す。高台内は 鉄釉。	有	外面の頸部途中から 高台に呉須で草花文 を描く。胴上部に廻る ケズリ線と、ツケ高 台の接合部に釉溜まり。 量付にアルミナが 残る。高台内外に付 着物。	沖縄産 施釉陶 器	墓庭
51		瓶子 ほぼ完形	4.3 16.9 (6.3)	混入物無し・ 灰白(高台 欠損部)	白化粧 透明釉 呉須?	内面頸部途中から外 面は量付を除き総 釉。白化粧後、呉須、 透明釉を施す。呉須 は頸部を浸し掛、口縁 内外を筆?で不定間 隔に施す。	有	胴最大幅部分で釉溜 まり状に圈線が廻る。 高台内に砂が付着。 量付にアルミナがわ ずかに残る。	沖縄産 施釉陶 器	墓庭
52		瓶 ほぼ完形	3.1 11.4 4.6	混入物無し・ にぶい赤褐 (高台)、灰 白(胴部の 欠損部)	褐釉・鉛 釉系	内面は口縁部直下ま で、口唇部釉剥ぎ。外 面は高台際まで。量 付露胎。	有	頸下部に2条の沈線。 高台内に砂等の付着 物。量付幅が不均一。 胴部で一部欠損(正 方形状に打割?)。	沖縄産 施釉陶 器	墓庭土坑 (副葬品廃棄)
53		瓶 完形	3.5 13.3 5.2	不明・にぶ い黄橙(高 台際)	褐釉・鉛 釉系	内面頸部途中から外 面高台際と高台内ま で。高台をつまんで浸 し掛。量付の外側は 露胎、内側(高台内) は釉剥ぎ。	無	首部に3条の沈線。 高台内と外面に付着 物。量付にアルミナが 残る。	沖縄産 施釉陶 器	墓庭土坑 (副葬品廃棄)
54		瓶 ほぼ完形	1.8 12.4 5.4	混入物無し・ 淡黄橙(頸 部欠損部)	白化粧 鉄釉	内面頸部途中から外 面は量付を除き総釉 (白化粧後、鉄釉)。量 付は釉剥ぎ。	無	量付には白化粧が明 瞭に残り、アルミナも わずかに残る。外面 に付着物が点在。	沖縄産 施釉陶 器	墓庭
55	図版10	小杯 完形	3.4 2.0 1.7	不明・灰白 (高台内)	透明釉 灰釉?	量付、高台内は露胎。 高台際と口縁部直下 に釉溜まり。	有	外反口縁。ケズリ高 台。	沖縄産 施釉陶 器	墓庭
56		小杯 ほぼ完形	3.6 2.1 1.8	赤色微粒子・灰白(高台欠損部)	透明釉 灰釉?	内面～外面腰部ま で。高台をつまんで浸 し掛。	有	高台際をケズリ出す。 高台内中央部は突起 状に盛り上がる。	沖縄産 施釉陶 器	墓庭
57		小杯 完形	3.4 1.9 1.8	不明・灰白 (高台内)	白化粧?	量付、高台内を除き、 白化粧するが、全体的 に露胎気味。	無	ケズリ高台。高台内中 央部は突起状に盛り 上がる。	沖縄産 施釉陶 器	墓庭
58	第14図 図版10	煙管 (雁首) 完形	火皿1.1 羅字0.9 全長4.0					銅製で重量7.7g。緑青 付着。「村田」の線刻 あり。		墓庭土坑 (副葬品廃棄)
59		煙管 (吸口) 完形	吸口0.8 羅字0.9 全長5.6					銅製で重量6.3g。緑青 付着。		墓庭土坑 (副葬品廃棄)



第 14 图 2 号墓 出土遺物



図版 10 2 号墓 出土遺物

第8表 3号墓蔵骨器の観察一覧表

連番	挿図番号 図版番号	名称	型式	寸法 (cm)	観察所見 (蓋)①つまみ ②文様等 ③調整他 (身)①正面示形 ②文様等 ③調整他	銘書	銘書年代	被葬者			出土 地点
								人数	性別	年齢	
60		マンガン釉 庇付甕形 (蓋)		30.3 22.8 15.4 122	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②残存部1/2。鐫3.5cm。かえり2mm。つまみ台下貼付下り棟2。屋根瓦。 ③外面:器面全体にナデ。内面:水挽き、つまみ台接合部ナデ。	…七月七日洗骨					墓庭
61	図版11	マンガン釉 甕形(身)	Ⅲ D	28.6 23.3 36.6 24.7	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凸3・凸3。肩部:沈線波状文2段。胴部:貼付蓮華文+沈線茎文。 ③外面:器面全体にナデ調整。内面:水挽き。						墓庭

寸法は、ボジャー形・甕形は、蓋が上から外径/内径/器高/体部高、身が上から口径/胴径/底径/器高の数値を記している。
家形・御殿形は、蓋が上から縁部(長辺×短辺)/器高、身が上から口縁部(長辺×短辺)/底部(長辺×短辺)/器高の計測値を記している。



図版11 3号墓 蔵骨器

第3節 6号墓

墓は、調査区中央付近の丘陵下段に位置しており、該墓から西側に11基（7～16号墓、53号墓）の墓が横並びで所在する。10 m東側には墓庭を共有する3・4号墓が、上段には5基（19～23号墓）の墓が横並びして所在した。該墓は、墓室天井の崩落により内部が埋没した状態で発見された。

墓口の寸法は、幅0.7 m、高さは不明で羨道の長さは1.0 mを測る。墓口の方位は北(N11°W)を向く。羨道部の内外に拳～頭大の石灰岩の礫石が残存しており、これらは閉塞石の一部と判断された。

墓室は、棚（コ字状）と汁ヒラシからなり、右棚側が半分程消失しているが残存部の遺構形状から3類aに分類できる。平面形は横長の隅丸方形で、寸法は幅2.8 m、奥行き1.8 mを測る。墓室内の埋土から蔵骨器7点分と近代磁器（碗・皿等）30点余の破片が出土し、正面棚中央近くで完形の石厨子1点が検出された。左棚の側壁には幅0.6 m、高さ0.4 mの穴が開いており、隣接する7号墓の墓室に貫通する。穴の大きさは人が行き来するには微妙な大きさではあるが、戦中避難時の拡張が推察された。該墓については、近代磁器の大量出土や墓室内の攪乱、墓室天井の崩落状況等から戦時下に避難場所に利用され、爆撃等によって埋没したものと考えられた。

墓の造営年代を明らかにすることはできなかったが、蔵骨器の銘書では「乾隆31年（1766年）」が確認されている。戦時中の攪乱もみられるものの、墓口幅がやや広く造られていることや積石による閉塞、石厨子やボージャー形を安置する状況からすると、少なくとも18世紀中頃には墓が機能していたものと推察された。

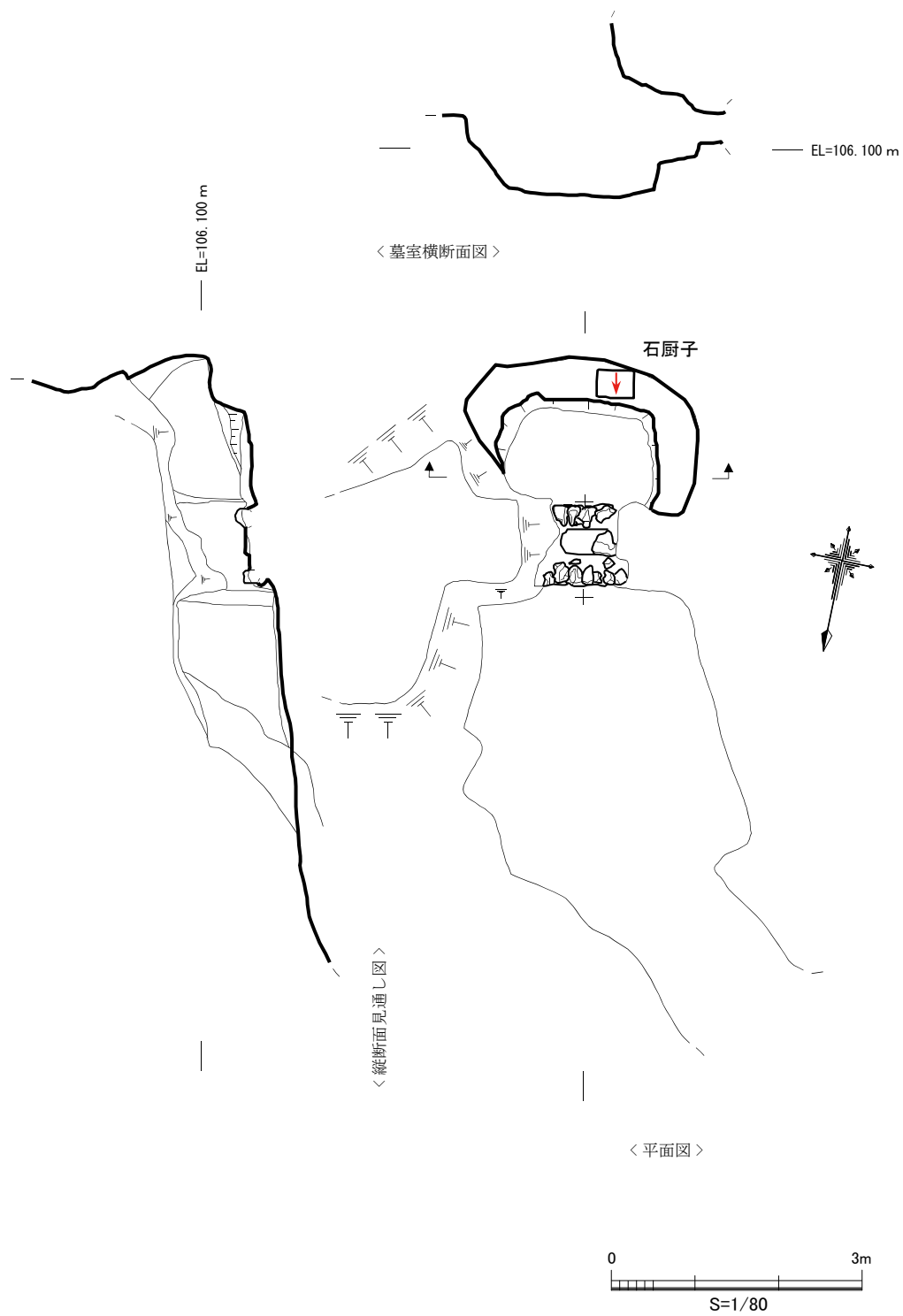
ところで、7号墓の調査成果については次節で詳述するが、ここでは該墓と7号墓、その西隣にある8号墓を含めた3基の墓の先後関係について報告しておきたい。7号墓は、左右非対称の造りになっており、その原因は西隣の8号墓に制約されていたことが考えられた。6号墓と7号墓の墓庭についてみると、両墓庭の床面で比高差が0.1 m程あり、6号墓が低い。墓庭埋土除去後の状況は、6号墓の墓庭が7号墓の墓庭を削平して構築しているようにみえるため、遺構の重複関係でみると7号墓が先で、6号墓が後の造墓と判断される状況にある。しかし、逆の説明（6号墓が先に造られ、墓庭の堆積土が0.1 mに達した後に7号墓を造墓する）もできるため、7号墓の墓庭が左右非対称となっていることも併せて考えると、6号墓と8号墓が先に存在していて、その隙間に7号墓が造られた可能性が高いと推察された。



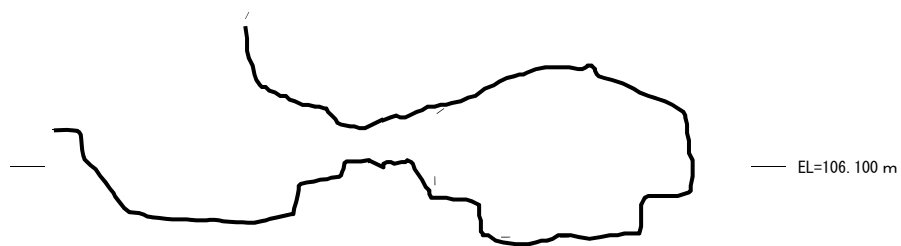
図版 12 6号墓 左：着手前 右：完掘後



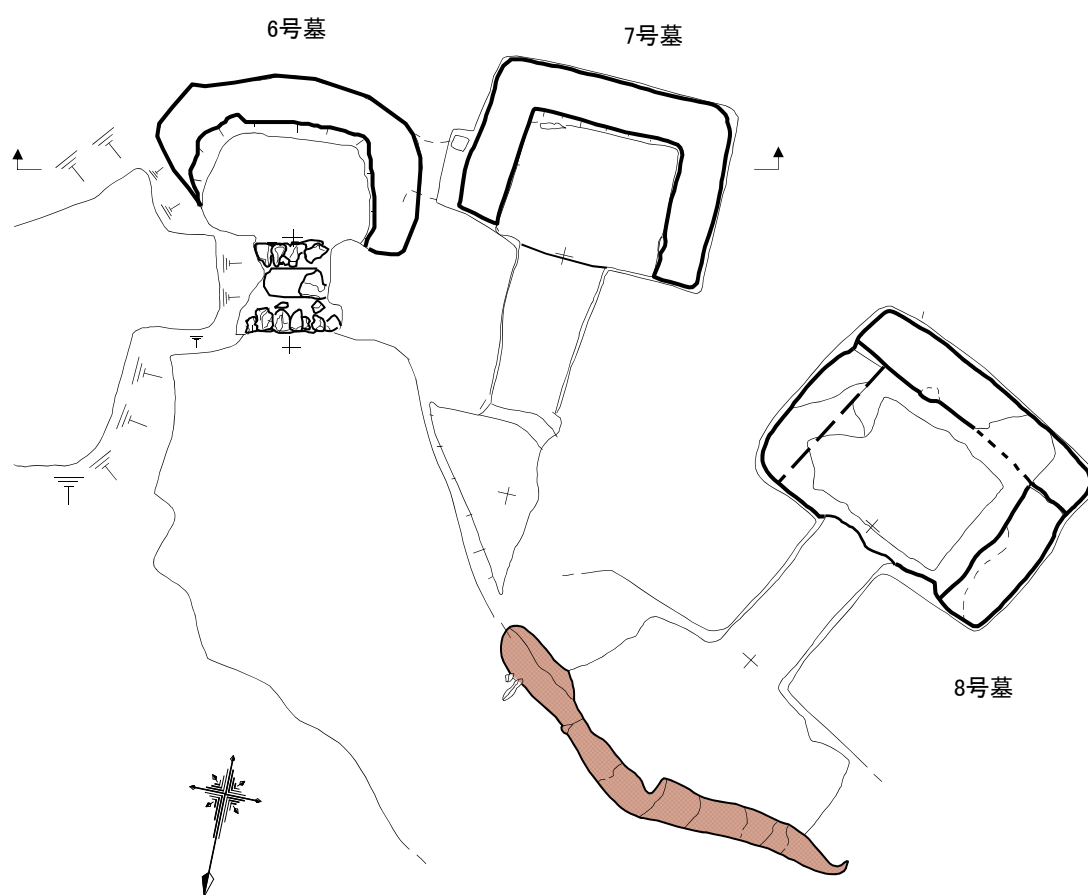
図版 13 6号墓 1 段目左：蔵骨器の出土状況 右：墓口の検出状況
2 段目左：6 号墓室及び墓口の検出状況 右：7 号墓室との貫通状況
3 段目：左から 6 号墓・7 号墓・8 号墓・9 号墓の完掘後



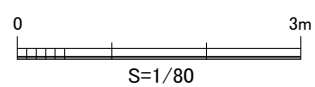
第15図 6号墓平・断面



＜ 6号墓・7号墓 墓室横断面図＞



＜ 平面图＞

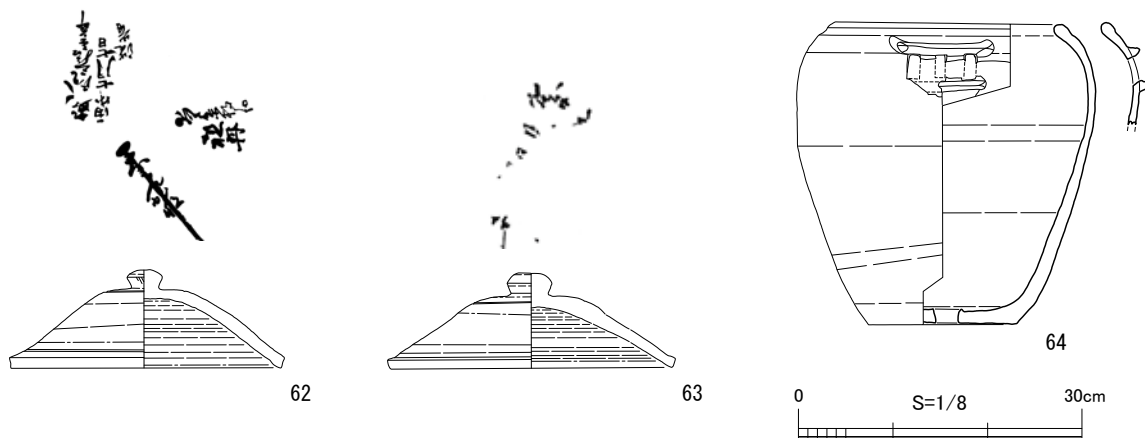


第 16 図 6号墓～8号墓 平・断面

第9表 6号墓蔵骨器の観察一覧表

連番	挿図番号 図版番号	名称	型式	寸法 (cm)	観察所見 (蓋)①つまみ ②文様等 ③調整痕他 (身)①正面示形 ②文様等 ③調整痕他	銘書	銘書年代	被葬者			出土 地点
								人数	性別	年齢	
62	第17図 図版14	ボージャー 形(蓋)	V b	29.2 28.6 10.4 8.5	①無孔宝珠。 ③外面:体部回転ヘラ削り、縁部回転 横ナデ。内面:水挽き後、ナデ。つま み:回転横ナデ後静止ナデ。	乾隆三十三年/ 丙戌七月七日/ 洗骨/[当]原に や/祖母/■■ 加那	洗骨:1766				墓室埋土
63		ボージャー 形(蓋)	V b	24.8 29.8 10.2 8.0	①無孔宝珠。 ③外面:体部回転ヘラ削り、横ナデ。 内面:水挽き後、ナデ。つまみ:回転 横ナデ。	比嘉/同■■…/ 同…/■■…/… ■■					墓室埋土
64		ボージャー 形(身)	III a	27.3 32.0 15.2 31.8	①マド枠:平葎形貼付・1方2方。 ②横帯凹1。マド枠下に凹2。底面孔: 円形1個。 ③外面:水挽き後、回転ヘラ削り、底 部に糸切り痕。内面:水挽き後、回転 ヘラ削り、口縁近くはナデ、内底外縁 を1.2mm幅でヘラ削り。赤焼の蔵骨 器。						墓室埋土
65	図版14	石製家形 (蓋)		52.0× 35.7 21.4	①つまみ無し。 ②屋根:入母屋形。 ③内面に横と斜め方向のノミ痕が明 瞭に残る。サンゴ石製。外面全体に 波状の縞模様が見られる。						墓室 正面棚
66		石製家形 (身)		50.0× 32.6 50.1× 34.7 52.2	①方形穿孔2個。 ②正面穿孔部の下に削り出しで柱と 段を模した意匠。脚付4個。 ③外面:ノミで削り出し、痕跡を残さ ないよう丁寧に調整する。内面:横と斜 めのノミ痕が明瞭に残る。サンゴ石 製。外面全体に波状の縞模様が見ら れる。			1	不明	成人	墓室 正面棚
67		ボージャー 形(身)	V	32.5 38.0 22.1 47.3	①マド枠:唐破風形・1方4円。 ②横帯凹3。マド枠上部に縦位の削り で垂木を模した成形。下部に縦位の 削りと鋸歯文。底面孔無し。判有り。 ③外面:器面全体にナデ。内面:水挽 き後、回転横ナデ。						墓室埋土
68		ボージャー 形(身)		— — 22.0 —	②横帯凹2。底面孔:小円10個③外 面:器面全体にナデ、胴下部回転ヘラ 削り。内面:水挽き。						墓室埋土
69		転用 (小壺・身)		12.4 6.0 13.9	③内面:水挽き。雑な成形。 ③外面:水挽き後、ヘラ削り。口縁近く はナデ調整。付着物多い。						墓室埋土
70		転用 (壺・身)		42.8 29.4 17.5	③内面:水挽き後、斜位のナデ調整。 ヘラ削り。指押さえ痕。 ③外面:縦位に丁寧にナデ調整。底 部近く泥釉?2~3mmの白色粒含む。						墓室埋土

寸法は、ボージャー形・甕形は、蓋が上から外径/内径/器高/体部高、身が上から口径/胴径/底径/器高の数値を記している。
家形・御殿形は、蓋が上から縁部(長辺×短辺)/器高、身が上から口縁部(長辺×短辺)/底部(長辺×短辺)/器高の計測値を記している。



第 17 图 6 号墓 藏骨器



图版 14 6 号墓 藏骨器

第10表 - 1 6号墓出土遺物の観察一覧表

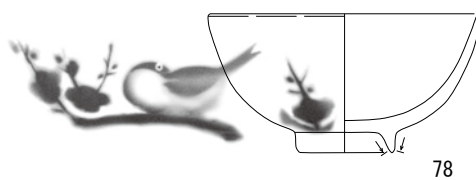
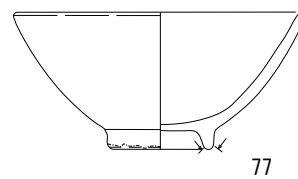
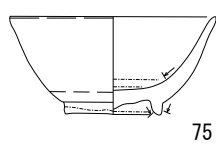
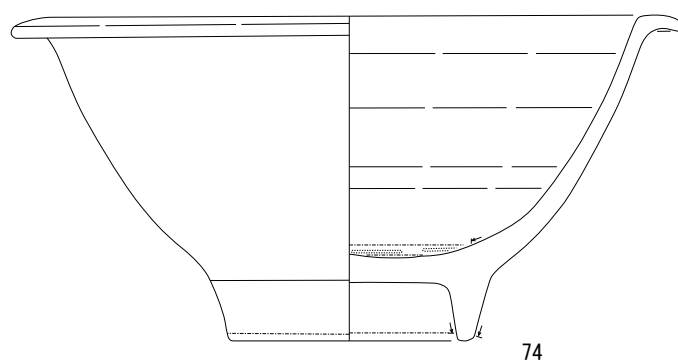
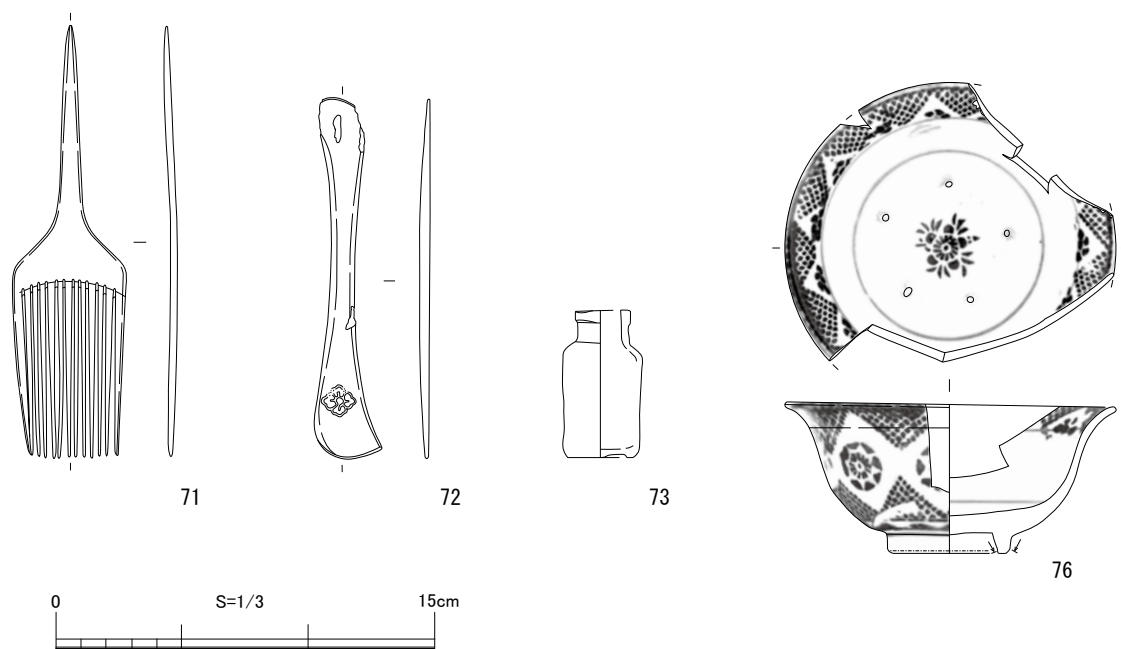
単位:cm
括弧内は残存の寸法

連番	挿図番号 図版番号	器種 残存状況	口径 器高 底径	胎土・露胎 部の色調	釉種	施釉 (範囲、方法)	貫入	観察所見 (成形・調整・施文他)	産地 年代	出土 地点
71	第18図 図版15	くし 完形	全長17.2 幅4.5 厚0.3	表面の色調 は黄橙				プラスチック製。13箇。		墓室
72		ヘラ ほぼ完形	全長19.4 幅2.7 厚0.4	表面の色調 は明褐				木製。表面下部に花文 が描かれる。上端で一 部欠損。下端部はやや バチ形。重量9.65g		墓室
73		ガラス瓶 完形	2.2 5.85 2.6	透明				薬瓶か。		墓室
74		鉢 ほぼ完形	26.4 12.9 9.4	混入物ほぼ 無し・明褐 灰	白化粧 透明釉 鉄釉	施釉は外面の鉄釉から 行う。内面は、白化 粧後透明釉。口唇下 まで施釉。内面の一 箇所、灰釉を親指状 に施す。	有	見込は蛇の目釉剥ぎと 重ね焼きの目痕が残 る。量付釉剥ぎ。アルミ ナ？が残る。高台内 で部分的(三箇所)釉剥 ぎ。	沖縄産陶 器 別称「ワ ンブー」	墓室
75		小碗 ほぼ完形 口縁部で 一部欠損	8.2 3.9 3.75	混入物無 し・にぶい橙	白化粧 透明釉	量付を除く全体に白 化粧後、透明釉を施 釉。外面は高台を上 にして流し掛。内面は 振り掛。	有	見込は蛇の目釉剥ぎさ れ、アルミナも残る。高 台は釉剥ぎか、わずか にアルミナも残る。高台 内中央は突起状に盛り 上がる。高台内に露胎 箇所あり。	沖縄産施 釉陶器	墓庭 5～6号墓間
76		碗 口縁部で 一部欠損	13.1 6.0 4.5	混入物ほぼ 無し・白灰	コバルト 透明釉	透明釉を量付を除き 施釉。外面にコバルト で型紙絵付。	無	型紙絵付と筆による単 純な線文。見込に目痕5 箇所。高台内にひび割 れ。	砥部産 別称「ス ンカンマ カイ」	墓室
77		碗 完形	11.6 5.45 3.8	-	緑系	量付を除き施釉。	無	型成形。見込中央部が わずかに突起。	瀬戸美濃 近代	墓室
78	第19図 図版15	碗 ほぼ完形	10.7 5.5 3.7	混入物ほぼ 無し・白	透明釉 コバルト 緑系	透明釉を量付を除き 施釉。外面にコバルト (梅)、緑系釉(ウグイ ス)の絵付。	無	型成形。外面にウグイ スと梅を描く。	瀬戸美濃 近代	墓室
79		小碗 ほぼ完形	8.2 4.8 2.85	混入物無 し・白灰	透明釉 コバルト？	透明釉を量付を除き 施釉。外面にコバルト ？で型紙絵付。	無	型成形。型紙絵付け。 型紙は山水画と吉祥文 を交互に4箇所、連弁 文は高台脇に廻らす。 高台内に不明スタンプ。	瀬戸美濃 近代	墓室
80		皿 口縁～底 部全体の 2/3	10.9 1.95 5.95	混入物無 し・白灰	透明釉 緑系 茶系	透明釉を量付を除き 施釉。口唇に茶系の 釉。内面は緑系釉で 型紙絵付。	無	内面に桜、竹、三つ葉を 廻らす。量付に砂付着 箇所あり。	瀬戸美濃 近代	墓室
81		皿 ほぼ完形	11.0 2.25 6.4	混入物無 し・白灰	透明釉 緑系	透明釉を量付を除き 施釉。内面は緑系釉 で型紙絵付。	無	型成形。内面に桜と吉 祥文を廻らす。	瀬戸美濃 近代	墓室
82		皿 ほぼ完形	11.2 2.4 6.4	混入物無 し・白灰	透明釉 鉄釉？ コバルト？	透明釉を量付を除き 施釉。口唇に鉄釉。 内面はコバルト？で 型紙絵付。	無	内面に松竹梅を廻ら す。量付に微量の砂付 着。	瀬戸美濃 近代	墓室
83		皿 口縁～底 部全体の 2/3	13.2 2.3 7.8	混入物無 し・白灰	透明釉 茶系 緑系	透明釉を量付を除き 施釉。口唇に茶系の 釉。内面は緑系釉で 型紙絵付。	無	内面に宝尽くし、格子、 窓絵に雀と草花。量付 にアルミナ？が少量付 着。	瀬戸美濃 近代	墓室
84		皿 口縁～底 部全体の 3/4	13.4 2.6 8.0	混入物無 し・白灰	透明釉 緑系 茶系	透明釉を量付を除き 施釉。口唇に茶系の 釉。内面は緑系釉で 型紙絵付。	無	胴内部に浜千鳥と波。 見込に果物の入った籠 と梅、木、「春山」の文 字。	瀬戸美濃 近代	墓室
85	第19図 図版16	皿 ほぼ完形	13.0 2.7 7.6	混入物無 し・白灰	透明釉 茶系 コバルト？	透明釉を量付を除き 施釉。口唇に茶系の 釉。内面はコバルト？ で型紙絵付。	無	内面に草花、見込に 花。	瀬戸美濃 近代	墓室

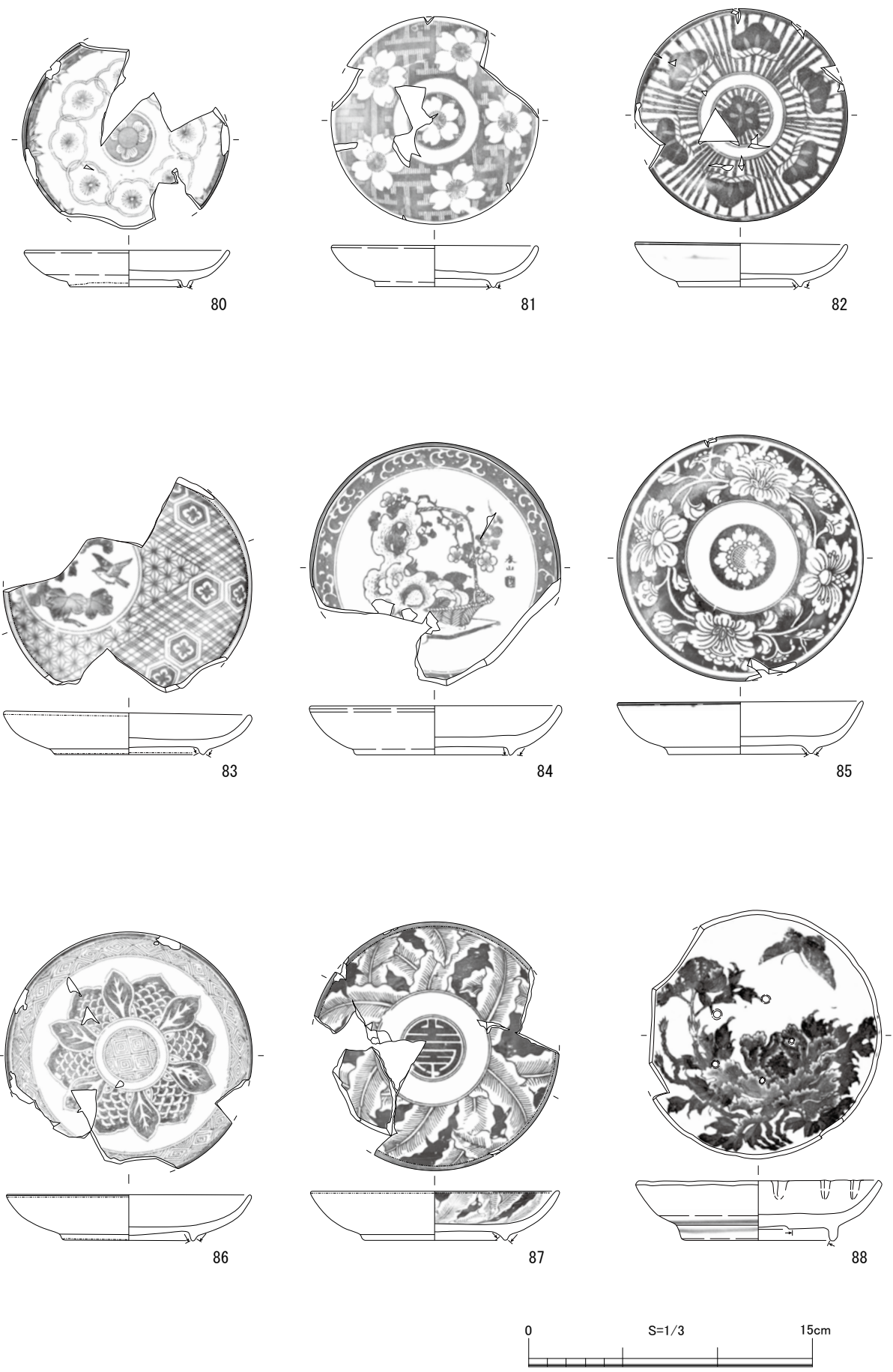
第10表-2 6号墓出土遺物の観察一覧表

単位:cm
括弧内は残存の寸法

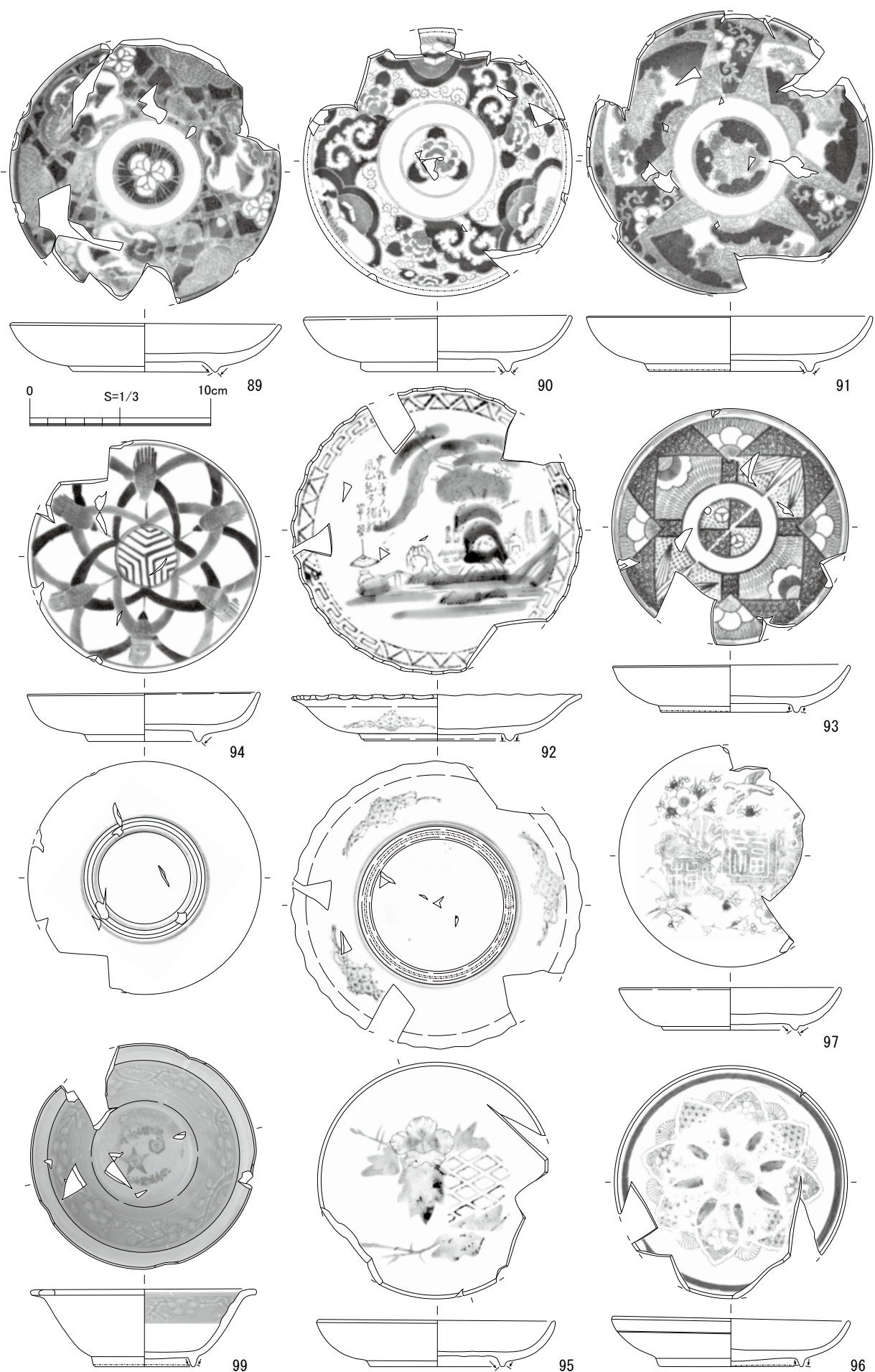
連番	挿図番号 図版番号	器種 残存状況	口径 器高 底径	胎土・露胎 部の色調	釉種	施釉 (範囲、方法)	貫入	観察所見 (成形・調整・施文他)	産地 年代	出土 地点
86	第19図 図版16	皿 ほぼ完形	13.1 2.45 7.0	混入物無し・白灰	透明釉 緑系	透明釉を量付を除き施釉。口唇に茶系の釉。内面は緑系の釉で型紙絵付。	無	胴内部に菱形状の渦巻き文。菱形状の渦巻きは見込中央にもあり、その周りは草花文を廻らす。	瀬戸美濃 近代	墓室
87		皿 ほぼ完形	13.2 2.6 7.4	混入物無し・白灰	透明釉 茶系 コバルト?	透明釉を量付を除き施釉。口唇に茶系の釉。内面はコバルト?で型紙絵付。	有	内面に芭蕉、見込に文様文字か。	瀬戸美濃 近代	墓室
88		皿 ほぼ完形	13.1 3.2 7.8	混入物無し・白灰	透明釉 コバルト?	透明釉を量付を除き施釉。内面はコバルト?で型紙絵付。外面高台脇にコバルト?で二重圈線を施す。	無	型成形の稜花皿。内面に椿の花、蝶。見込に円形目痕5箇所。高台内中央部は円形(直径3.1cm)に凹む。その周りはアルミナ?を塗る。	瀬戸美濃 近代	墓室
89	第20図 図版16	皿 ほぼ完形	15.0 2.7 8.0	混入物無し・白灰	透明釉 茶系 コバルト?	透明釉を量付を除き施釉。口唇に茶系の釉。内面はコバルト?で型紙絵付。	無	内面に松、竹、見込と胴内部に梅、窓絵に山水。	瀬戸美濃 近代	墓室
90		皿 ほぼ完形	14.9 3.1 7.9	混入物無し・白灰	透明釉 茶系 コバルト?	透明釉を量付を除き施釉。口唇に茶系の釉。内面はコバルト?で型紙絵付。	無	内面に唐草とアジサイ、窓絵に寺院。高台内の付着物は取らないで焼成される。	肥前 近代	墓室
91		皿 ほぼ完形	15.85 3.05 9.0	混入物無し・白灰	透明釉 茶系 コバルト?	透明釉を量付を除き施釉。口唇に茶系の釉。内面はコバルト?で型紙絵付。	無	内面に菊、梅、波、雲を廻らす。見込は菊と雲。	瀬戸美濃 近代	墓室
92		皿 ほぼ完形	16.1 2.4 8.1	混入物無し・白灰	透明釉 薄緑系 茶系	透明釉を量付を除き施釉。内外面に薄緑系または茶系の釉で文様を描く。	無	外面腰部に吉祥文、内面の口縁部に雷文と三角帯文を上下交互に配し、見込に水墨画を模した画を描く。	瀬戸美濃 近代	墓室
93		皿 ほぼ完形	13.1 2.7 7.6	混入物無し・白灰	透明釉 茶系 コバルト?	透明釉を量付を除き施釉。口唇に茶系の釉。内面はコバルト?で型紙絵付。	無	型紙2枚の接合部に隙間があり、絵付がズレている。	瀬戸美濃 近代	墓室
94		皿 ほぼ完形	12.9 2.65 6.3	混入物無し・白灰	透明釉 コバルト?	透明釉を量付を除き施釉。内面はコバルト?で文様を描く。	無	花卉が3重に重なりその周りに麦を配する。見込に二重圈線を描き、中に幾何学文様を描く。幾何学文の始終点、中心に浅孔がある。	本土産近 現代磁器	墓室
95		皿 口縁～底部全体の3/4	13.1 2.5 7.35	混入物無し・白灰	透明釉 赤系	透明釉を量付を除き施釉。内面は赤系の釉で文様を描く。吹き付け文か。	無	見込に格子と牡丹を描く。	本土産近 現代磁器	墓室
96	第20図 図版16	皿 口縁～底部全体の2/3	12.9 2.8 7.9	混入物無し・白灰	透明釉 赤系	透明釉を量付を除き施釉。内面は赤系の釉で文様を描く。吹き付け文か。	無	内面に花、花びらの中に波文や吉祥文等が描かれる。	瀬戸美濃 近代	墓室
97		皿 全体の2/3 残存	11.3 2.3 7.3	混入物無し・白灰	透明釉 赤系	透明釉を量付以外総釉。内面は赤系の釉で文様を描く。吹き付け文か。	無	内面に梅花や鳥を描き、見込中央には福の文字、花文を配する。	本土産近 現代磁器	墓室
98	図版16	皿 ほぼ完形	18.4 2.3 11.1	混入物無し・白灰	透明釉 コバルト? 茶系	透明釉を量付を除き施釉。内面にコバルト?と茶系の圈線。	無	圈線は、口縁直下と胴内下部にコバルト?。口縁直下の圈線の内側に茶系の圈線が廻る。	本土産近 現代磁器	墓室
99	第20図 図版16	皿 ほぼ完形	12.5 4.3 5.5	混入物無し・白	薄い青系	量付を除き施釉。	無	内面胴部に桜木を象嵌。見込に、「最上醤油味噌」、「能島屋醤油店」の文字と星マーク・六角形の中に「サ」文字のスタンプ。	瀬戸美濃 近代	墓室



第 18 図 6 号墓 出土遺物 (1)



第19図 6号墓出土遺物(2)



第20图 6号墓出土遗物(3)



图版 15 6号墓出土遺物（1）



85



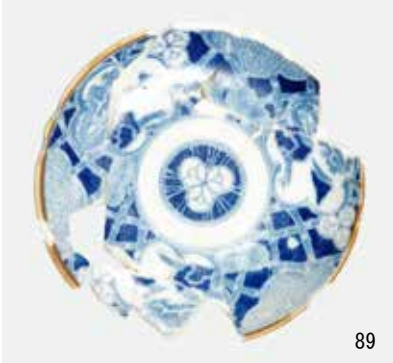
86



87



88



89



90



91



92



93



94



95



96



97



98



99

图版 16 6 号墓 出土遺物 (2)

第4節 7号墓

墓は、調査区中央付近の丘陵下段に位置し、東隣に6号墓、西隣に8号墓が所在している。調査前の状況は、墓口付近の崩落によって2 m程の土砂で覆われていた。墓口は開いていて、汁ヒラシには厚さ1 m程の流入した土砂が堆積していたが、内部に蔵骨器が確認できた。この埋土からは、近代磁器や戦争関連の遺物も出土している。

墓口の寸法は、幅0.55 m、高さ0.9 m、羨道の長さは1.4 mで、方位は北(N1° E)を向く。調査時には開口していたため、閉塞方法は不明であった。

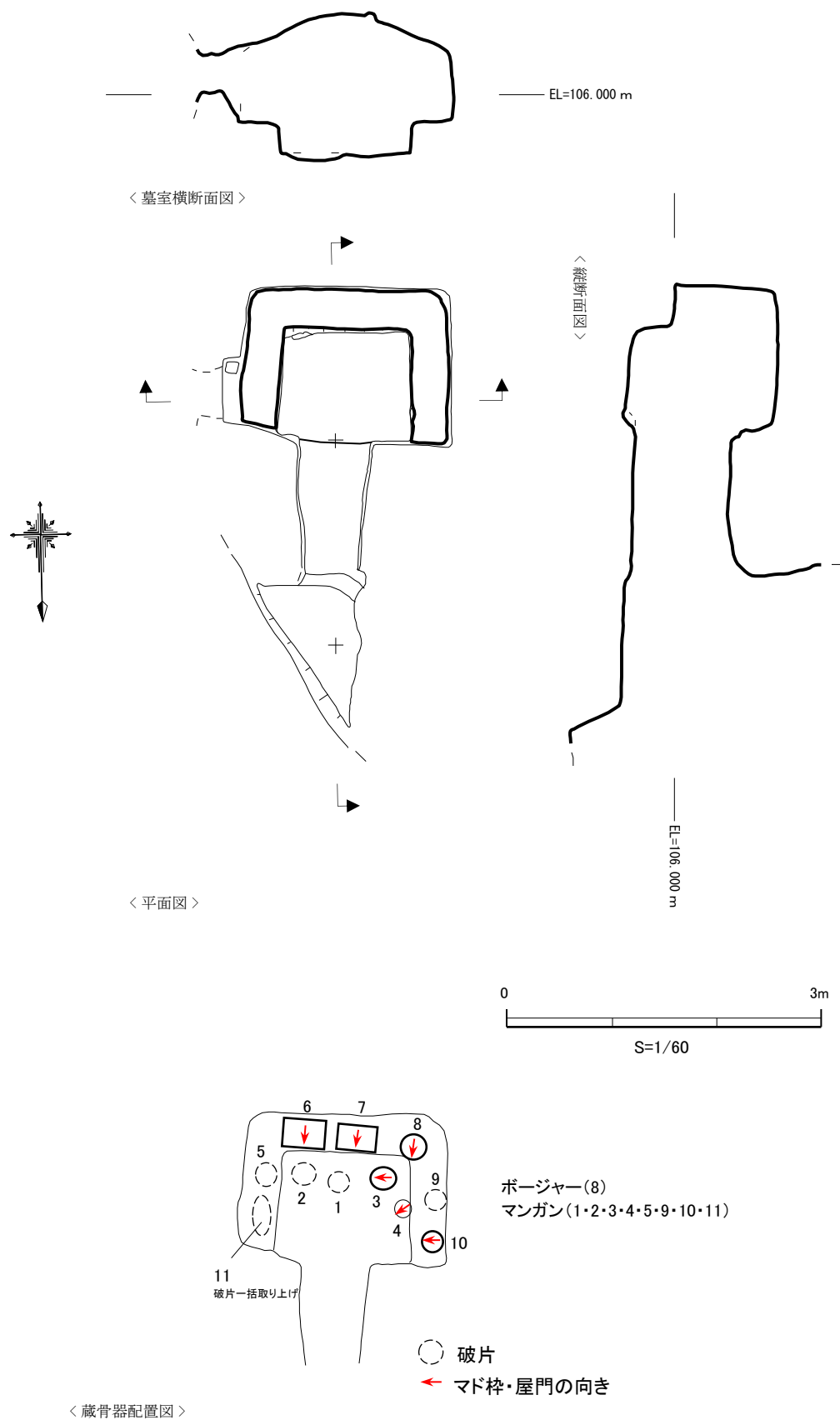
墓室は、棚(コ字状)と汁ヒラシからなり、類型の3類aに分類される。墓室平面形は横長の方形で、幅2.0 m、奥行き1.5 m、高さ1.4 mを測る。棚や汁ヒラシには12点の蔵骨器が安置されていて、割れているものや蓋が落下しているものもみられたが、蔵骨器の正面を示すマド枠や屋門が墓口に向けられていたことから、概ね原位置を保持しているものと判断された。なお、墓口の閉塞石が無いのは、戦時中に開口したものの何らかの理由で使用されず、その後爆撃等によって埋没したことが考えられた。

墓庭についてみると、左右非対称で非常に狭小な庭となっていて、平面形は三角形を呈している。その原因は、前節で述べたように6号墓と8号墓の隙間に造られたことによるものと推察している。一方、6号墓と墓庭を共有していた可能性があることから親縁関係等も想像されたが、それを証明する手掛かりは得られなかった。

墓の造営年代についても明らかにすることはできなかったが、蔵骨器の銘書の古い年代は「乾隆22年(1757年)」で、新しいのは「同治12年(1873年)」が確認され、少なくとも19世紀後半頃までは墓が機能していたことが窺える。



図版 17 7号墓の位置



第 21 図 7 号墓 平・断面、蔵骨器配置



図版 18 7号墓

- 1 段目左：掘削前の状況 右：墓口検出後
 2 段目左：掘削前の状況 右：墓室埋土除去後
 3 段目左：蔵骨器の安置状況（正面棚） 右：蔵骨器の安置状況（左棚）
 4 段目左：蔵骨器の安置状況（右棚） 右：完掘後

第 11 表 - 1 7 号墓蔵骨器の観察一覧表

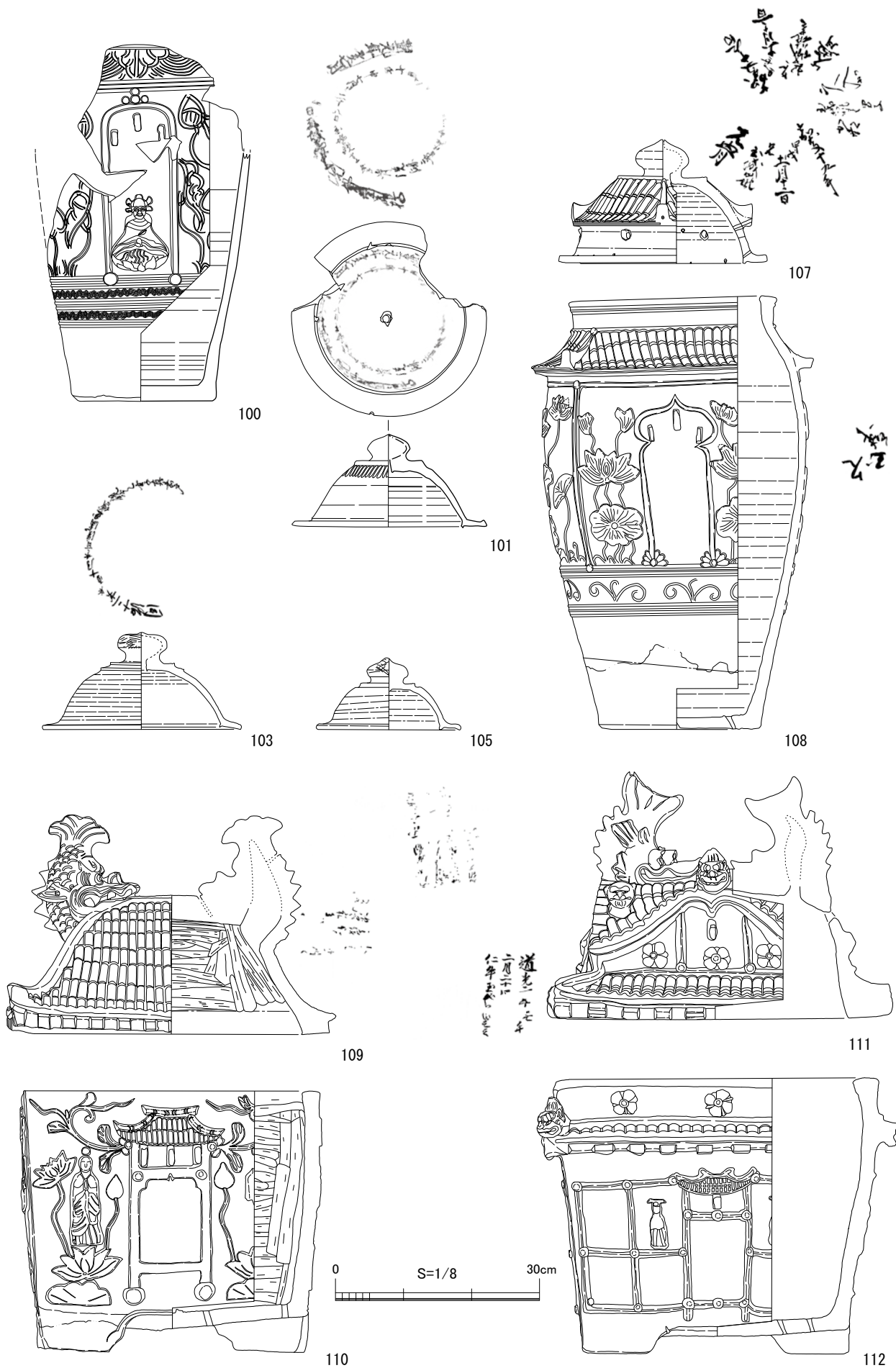
連番	挿図番号 図版番号	名称	型式	寸法 (cm)	観察所見 (蓋)①つまみ ②文様等 ③調整痕他 (身)①正面示形 ②文様等 ③調整痕他	銘書	銘書年代	被葬者			出土 地点
								人数	性別	年齢	
100	第22図 図版19	マンガン釉 甕形(身)		- 32.4 21.3 -	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯1・2不明、帯3凸3、帯4凹3、胴部:沈線蓮文、屋門内貼付仏。胴下部:沈線波状文2段、底面孔:三日月形13個。 ③外面:器面全体にナデ、底部付近～腰部は横位のヘラ調整痕、内面:水挽き。						墓室 No.1
101		マンガン釉 甕形(蓋)		28.6 22.2 13.7 9.8	①有孔宝珠、つまみ台1段。 ②鐫3.1cm、かえり3mm、外面体部からつまみ台にかけて、飛鉋。 ③外面:水挽き後、横位の調整痕、内面:体部ほぼ全面に水挽き、その後横位の刷毛調整、天井部ヘラ削り、つまみ:ヘラと刷毛調整痕。	咸豊元年亥七月… 日玉城筑親雲上洗 骨童名樽/咸豊十年 申七月二十八日玉 城筑親雲上女子骨 洗済童名うし	洗骨:1860				墓室 No.2
102	図版19	マンガン釉 甕形(身)	Ⅲ D	24.2 - 20.1 47.2	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凸3・凹2。肩部:沈線波状文2段。胴部:貼付蓮華文(茎は沈線)。腰部:波状沈線。底面孔:半月形5個。 ③外面:器面全体にナデ、腰部下ヘラ削り。内面:水挽き。			1	女性	青年	墓室 No.2
103	第22図 図版19	マンガン釉 甕形(蓋)		29.5 22.8 14.3 9.9	①有孔宝珠、つまみ台2段。 ②鐫2.8cm、かえり2mm。 ③外面:水挽き後、上部回転ヘラ削り、下部回転横ナデ、内面:水挽き。	同治十二年癸酉十 月十二日洗骨玉城 親雲上女子真嘉戸	洗骨:1873				墓室 No.3
104	図版19	マンガン釉 甕形(身)	Ⅳ D	30.1 36.9 21.5 52.9	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凹3・凹2。肩部:沈線蓮葉文。胴部:貼付蓮華文。腰部:沈線波状文2段。底面孔:半月形11個。 ③外面:器面全体にナデ、腰部下回転ヘラ削り。内面:水挽き。			1 1	不明 不明	成年 成人	墓室 No.3
105	第22図 図版19	マンガン釉 甕形(蓋)		21.3 15.0 10.6 6.9	①有孔宝珠。つまみ台1段。 ②鐫2.4cm、かえり3mm。 ③外面:水挽き後、体上部回転ヘラ削り、体下部回転横ナデ。内面:水挽き。体部の亀裂箇所を漆喰補修。						墓室 No.4
106	図版19	マンガン釉 甕形(身)	Ⅳ D	21.7 27.4 18.8 38.8	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凸3・凹2。肩部:沈線葉文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線波状文。底面孔:円形6個。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部回転ヘラ削り、底部糸切痕。内面:水挽き。						墓室 No.4
107	第22図 図版19	マンガン釉 底付甕形 (蓋)		30.8 23.9 18.3 12.9	①有孔宝珠。つまみ台1段。 ②鐫3.1cm、かえり2.5mm。つまみ台下貼付降り棟4、降り棟先端隅頭状突起、瓦屋根。底下円形孔6個。 ③外面:器面全体にナデ、底貼付、瓦屋根を貼付と削りで成形。内面:水挽き、回転横ナデ。	嘉慶十九年/甲戌十 一月十二日/兄玉城 筑登之/洗骨/二人 入加/玉城筑登之男 子/加那	洗骨:1814				墓室 No.5
108		マンガン釉 底付甕形 (身)	Ⅲ C	30.5 38.6 24.2 62.8	①屋門:位牌形貼付。 ②横帯凸1・凸1・凸2・凸3。肩部:瓦屋根、軒、降り棟4。胴部:貼付蓮華文、玉飾付の区画突帯文。腰部:沈線葉文。底面孔:円形10個。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部回転ヘラ削り、斜位ヘラ削り。内面:水挽き、回転横ナデ。	兄玉城■		1 1	不明 不明	成人 胎児～ 乳児	墓室 No.5
109		上焼本御 殿形(蓋)		47.0 × 39.2 32.0	②寄棟屋根の頂部両端に対面する鯨、降り棟、瓦屋根垂木を成形。 ③内面:縦位のヘラ削り、鯨接合部ナデ。口唇に砂付着。釉薬:鉛釉を内外面に施す。内外面に白色系の筋状の線(1～3cm)が多く見られる。	道光二年壬午/二月 二十四日…/仁牛玉 城筑登之	1822年				墓室 No.6

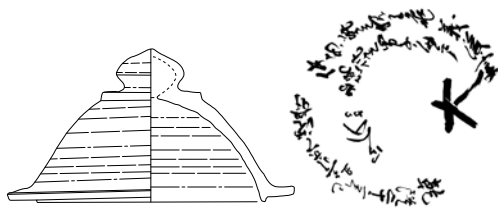
寸法は、ボージャー形・甕形は、蓋が上から直径/内径/器高/体部高、身が上から口径/胴径/底径/器高の数値を記している。
家形・御殿形は、蓋が上から縁部(長辺×短辺)/器高、身が上から口縁部(長辺×短辺)/底部(長辺×短辺)/器高の計測値を記している。

第11表-2 7号墓蔵骨器の観察一覧表

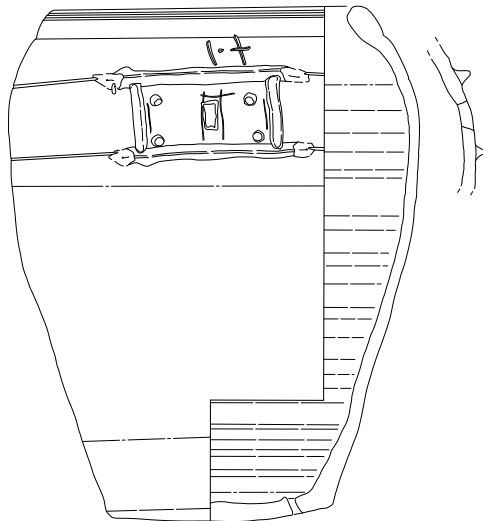
連番	挿図番号 図版番号	名称	型式	寸法 (cm)	観察所見 (蓋)①つまみ ②文様等 ③調整痕他 (身)①正面示形 ②文様等 ③調整痕他	銘書	銘書年代	被葬者			出土 地点
								人数	性別	年齢	
110	第22図 図版19	上焼本御 殿形(身)		44.1 × 34.8 37.6 × 29.8 38.4	①屋門:瓦屋形貼付。 ②屋門両側に貼付の法師像と蓮華文。 両側面に貼付蓮華文。底面孔:円形16 個。脚付4個。 ③外面:器面全体にナデ。口唇部露 胎。亀裂箇所を漆喰で補修。内面:横 位と斜位のへら削り。釉薬:飴釉を口唇 部を除く全面に施釉。内外面に白色系 の筋状の線(1~3cm)が多く見られる。			1	男性	成人	墓室 No.6
111		上焼本御 殿形(蓋)		48.0 × 37.1 36.1	②入母屋屋根の頂部両端に直面する 鯨、正面中央に獅子頭付唐破風、唐破 風屋根両端に獅子頭、唐破風内は区 画文、花文、穿孔1個。③内面:横位、 斜位のへら削り、ナデ。亀裂箇所を漆 喰補修。釉薬:外面緑釉と飴釉、透明 釉。内面飴釉。唐破風内白化粧。						墓室 No.7
112		上焼本御 殿形(身)		37.9 × 34.5 37.6 × 28.3 40.4	①屋門:瓦屋形貼付。 ②屋門両側に格子状の貼付区画、区 画内に貼付法師像1対、口縁下に貼付 花文、その下に垂木付の軒貼付、軒四 隅に獅子頭貼付。底面孔:小円39個。 脚付4個。 ③外面:器面全体をナデ後、貼付文を 多用。内面:横位、斜位のへら削り。釉 薬:外面緑釉と飴釉、透明釉。内面飴 釉。屋門内白化粧。						墓室 No.7
113	第23図 図版19	マンガン釉 甕形(蓋)		30.5 24.2 16.3 11.8	①有孔宝珠。つまみ台1段。②鐔 2.8cm。かえり5mm。③内外面:水挽き 後、回転横ナデ。	銘書:乾隆二十二年 己丑三月廿一日洗 骨/仲西筑登之親雲 上亀義後妻/玉城筑 登之男子かま戸/四 人入加/大	洗骨:1757				墓室 No.8
114		ボージャー 形(身)	Ⅲ a	35.3 43.7 24.2 54.6	①マド枠:平葺形貼付・1方5円。 ②横帯凹1。判有り。底面孔:円形7個。 ③外面:器面全体にナデ。胴下部斜位 へら削り。内面:水挽き、回転横ナデ。			1	不明	成人	墓室 No.8
115	第23図 図版20	マンガン釉 甕形(身)	Ⅳ B	29.6 38.6 24.3 63.0	①屋門:唐破風形貼付。②横帯凹2・凸 1・凸3・凹3。肩部:沈線葉文。胴部:沈 線蓮華文。腰部:沈線波状文2段。底面 孔:円形6個。③外面:器面全体にナ デ。内面:水挽き。						墓室 No.9
116		マンガン釉 甕形(蓋)		28.8 22.0 16.4 12.1	①有孔宝珠。つまみ台2段。②鐔 3.0cm。かえり4mm。 ③外面:水挽き後、回転横ナデ、へら削 り。内面:水挽き。	道光貳拾/四年甲辰 /六月廿七日/玉城 筑親雲上/洗骨	洗骨:1844				墓室 No.10
117		マンガン釉 甕形(身)	Ⅲ B	27.8 34.0 23.0 51.4	①屋門:唐破風形貼付。②横帯凹2・凸 1・凸3・凸3。肩部:沈線波状文4段と圈 線3条。胴部:貼付蓮華文(茎は沈線)。 腰部:沈線波状文。底面孔:円形7個。 ③外面:器面全体にナデ。胴下部回転 横へら削り、斜位へら削り。内面:水挽 き、回転横ナデ。			1	不明	成人	墓室 No.10
118		マンガン釉 甕形(蓋)		28.0 22.3 - 12.3	①有孔宝珠。つまみ台2段。②鐔 2.4cm。かえり2mm。③外面:水挽き後、 回転横ナデ。内面:水挽き。						墓室 No.11
119		マンガン釉 甕形(身)	Ⅳ D	27.3 34.4 21.7 51.2	①屋門:アーチ形貼付。②横帯凹2・凸 1・凸3・凹3。肩部:沈線波状文3段と圈 線2条。胴部:沈線蓮華文。腰部:波状 文2条。底面孔:三日月形9個。③外面: 器面全体にナデ、胴下部へら削り。内 面:水挽き。						墓室 No.11
120		転用 (壺・身)		12.3 18.8 10.0 18.1	①正面(屋門)を意識した打割あり。 ②肩部に沈線2条2箇所。 ③外面:回転横ナデ後に回転へらケズ リ。内面:水挽き後、回転横ナデ。軟質 陶器壺を蔵骨器に転用か。						墓室 埋土

寸法は、ボージャー形・甕形は、蓋が上から直径/内径/器高/体部高、身が上から口径/胴径/底径/器高の数値を記している。
家形・御殿形は、蓋が上から縁部(長辺×短辺)/器高、身が上から口縁部(長辺×短辺)/底部(長辺×短辺)/器高の計測値を記している。

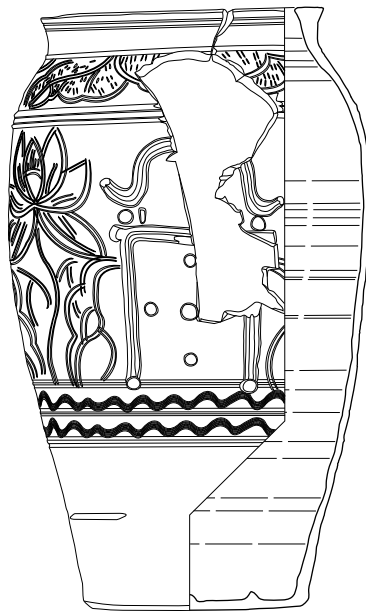




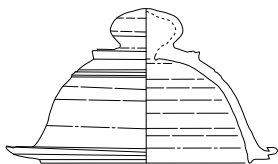
113



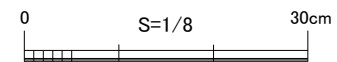
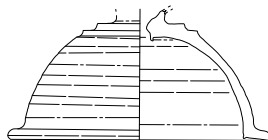
114



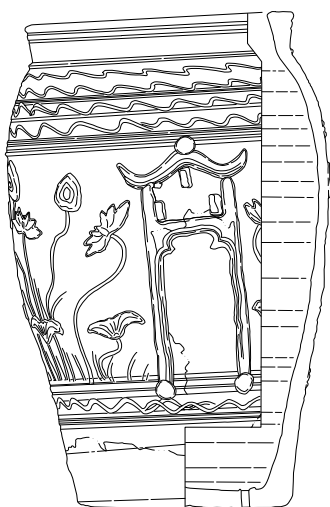
115



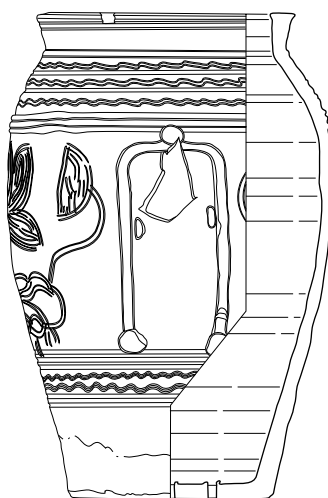
116



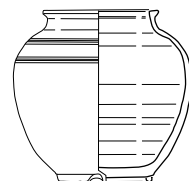
118



117

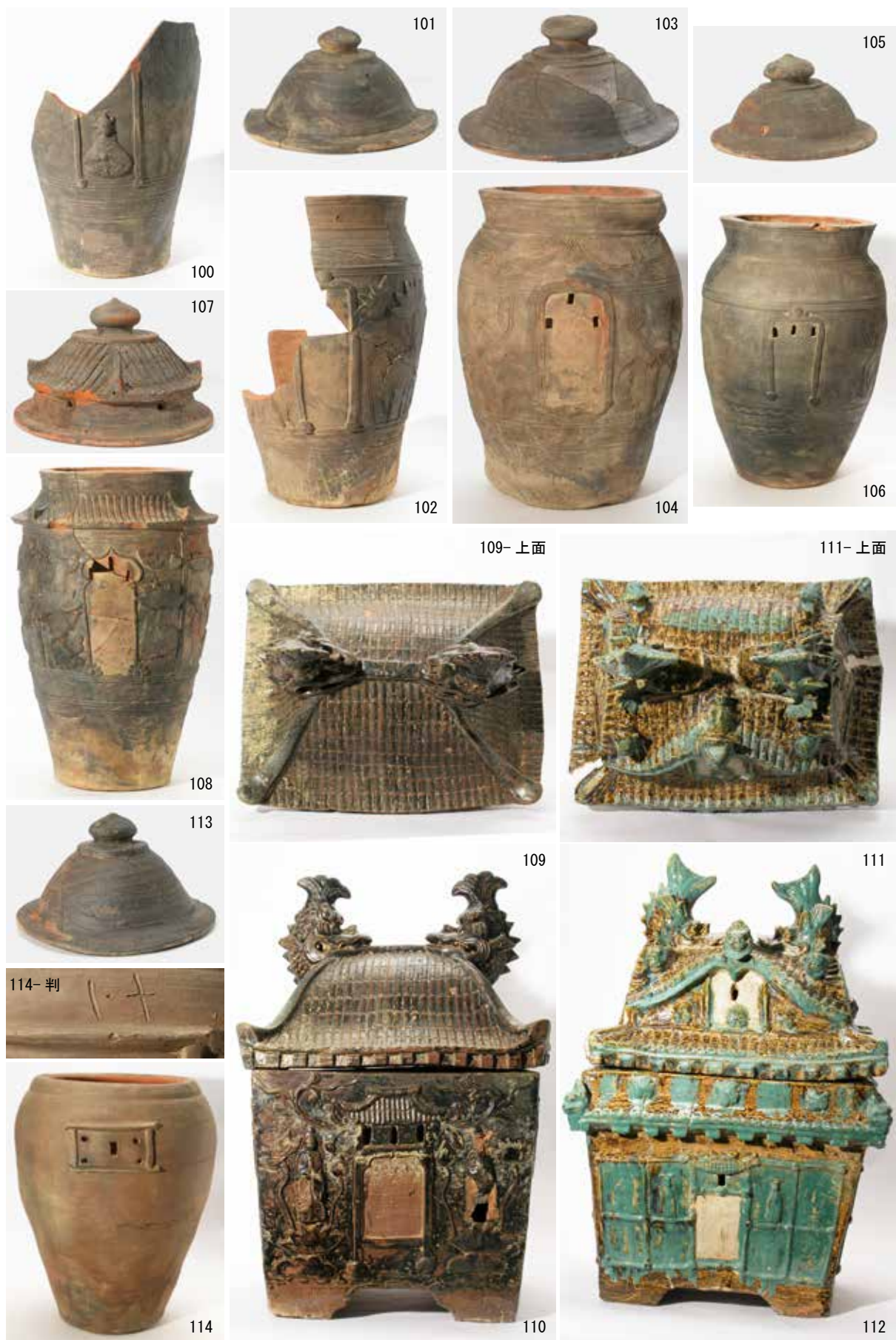


119



120

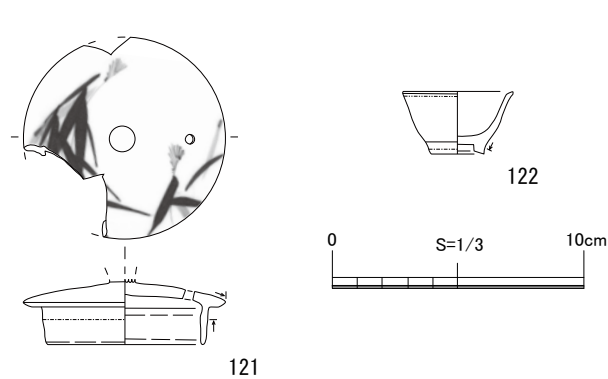
第 23 图 7 号墓 藏骨器 (2)



图版 19 7号墓 藏骨器 (1)



図版 20 7号墓 蔵骨器（2）



第 24 図 7号墓 出土遺物



図版 21 7号墓 出土遺物

第 12 表 7号墓出土遺物の観察一覧表

単位:cm
括弧内は残存の寸法

連番	挿図番号 図版番号	器種 残存状況	口径 器高 底径	胎土・露胎 部の色調	釉種	施釉 (範囲、方法)	貫入	観察所見 (成形・調整・施文他)	産地 年代	出土地点
121	第24図 図版21	蓋 一部欠損	8.05 (2.5) 6.2	混入物無し・白	透明釉 藍系	底とかかりの接合部 以外を施釉。	無	笠外面にすきと思 われる文様を描く。	瀬戸美濃系	墓室
122		小杯 ほぼ完形	4.4 2.5 2.1	不明・灰色	瑠璃釉 透明釉	瑠璃釉は外面の口縁 部下から高台際まで。 内面は透明釉。	無	高台の量付はハ字状 に傾く。外面胴部の2 箇所に丸い窪み(気 泡痕か?)	景德鎮 17c後	墓室

第5節 9号墓

墓は、調査区中央付近の丘陵下段に位置し、東隣に8号墓、西隣に10号墓が所在している。墓は、墓室天井の崩落により内部が埋没した状態で発見された。

墓口の寸法は、幅0.7 m、高さは不明、羨道の長さは0.7 mで、墓口の方位は北北東(N25° E)を向く。羨道には拳～頭大の石灰岩や砂岩の礫石が2、3段積まれた状態で残存しており、これらは閉塞石の一部と判断された。

墓室は、平面形がやや横長の歪な隅丸方形で柵は造られておらず、類型の1類aに分類できる。寸法は幅1.8 m、奥行き0.9 m、残存部の高さは1.4 mを測る。蔵骨器は奥壁側で2点検出されたが、いずれも身の胴部から底部が残存していた。また、身の口縁部から胴部の破片も1点得られている。第25図の蔵骨器配置図No.1は、マンガン釉甕形である。僅かに確認できる屋門の残存部は墓口を向いている。No.2は、ボージャー形で、底部の周りに砂岩石を据えている。このような状況から、いずれも原位置を保持していると考えられ、戦時中またはそれ以前の埋没が推測された。

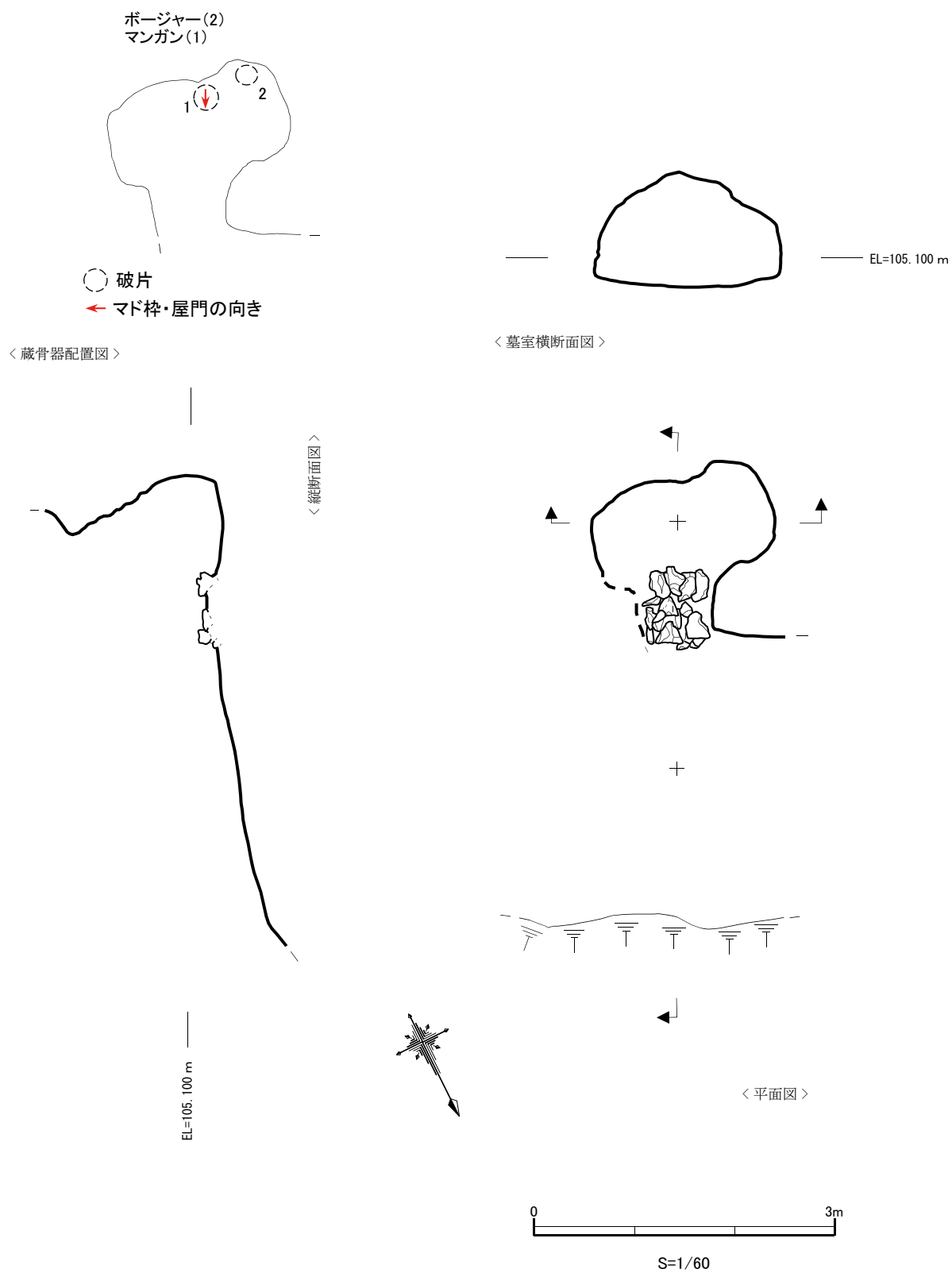
墓庭は、墓口から外に向かってゆるやかに低くなり、庭囲いも無く明確な範囲については不明である。墓の造営年代についても不明と言わざるをえないが、蔵骨器の年代観からすると、近世(乾隆～道光年間)の造墓と判断される。



図版 22 9号墓

1 段目左：墓の位置 右：墓室検出後

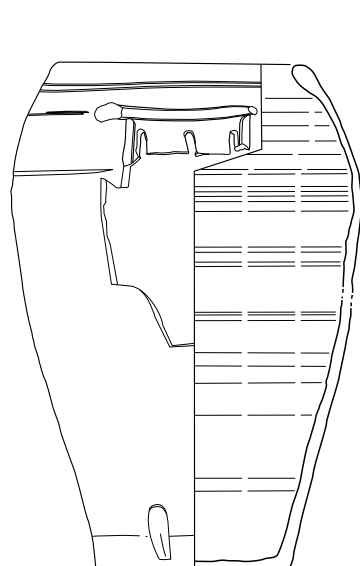
2 段目左：閉塞石の検出状況 右：蔵骨器の安置状況



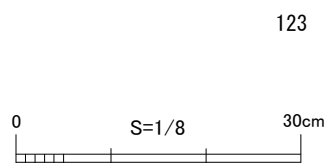
第 25 図 9 号墓 平・断面、蔵骨器配置

第 13 表 9 号墓蔵骨器の観察一覧表

連番	挿図番号 図版番号	名称	型式	寸法 (cm)	観察所見 (蓋)①つまみ ②文様等 ③調整痕他 (身)①正面示形 ②文様等 ③調整痕他	銘書	銘書年	被葬者			出土 地点
								人数	性別	年齢	
123	第26図 図版23	ボージャー 形(身)	Ⅲ a	26.4 36.9 20.6 53.2	①マド枠:平葎形貼付・1方2方。 ②横帯凹2。判有り。底面孔:円形5個。 ③外面:回転横ナデ。内面:水挽き、口 縁部回転横ナデ。			1	女性	成年	墓室 No.2
124	図版23	マンガン釉 甕形(蓋)		33.6 25.4 17.9 12.0	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②鐔3.4cm。かえり8mm。 ③外面:水挽き後、回転へら削り、斜位 のへら削り。内面:水挽き、天井部へら 削り、つまみ:へらと刷毛調整。						墓室 埋土
125		マンガン釉 甕形(身)	Ⅲ B?	- - 23.8 -	①屋門:不明貼付。屋門内露胎。 ②横帯3・4凸3。胴部:法師像と蓮華文 貼付。胴部背面:沈線蓮華文。底面孔: 半月形9個。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部回転 へら削り。部内面:水挽き。			2 1	不明 不明	成人 小児	墓室 No.1
126		マンガン釉 甕形(身)	Ⅲ B	- -	①屋門:唐破風形貼付。 ②横帯凹3・凸1・凸3・凸3。胴部蓮華文 貼付(茎は沈線)。						墓室 埋土



図版 23 9 号墓 蔵骨器



第 26 図 9 号墓 蔵骨器

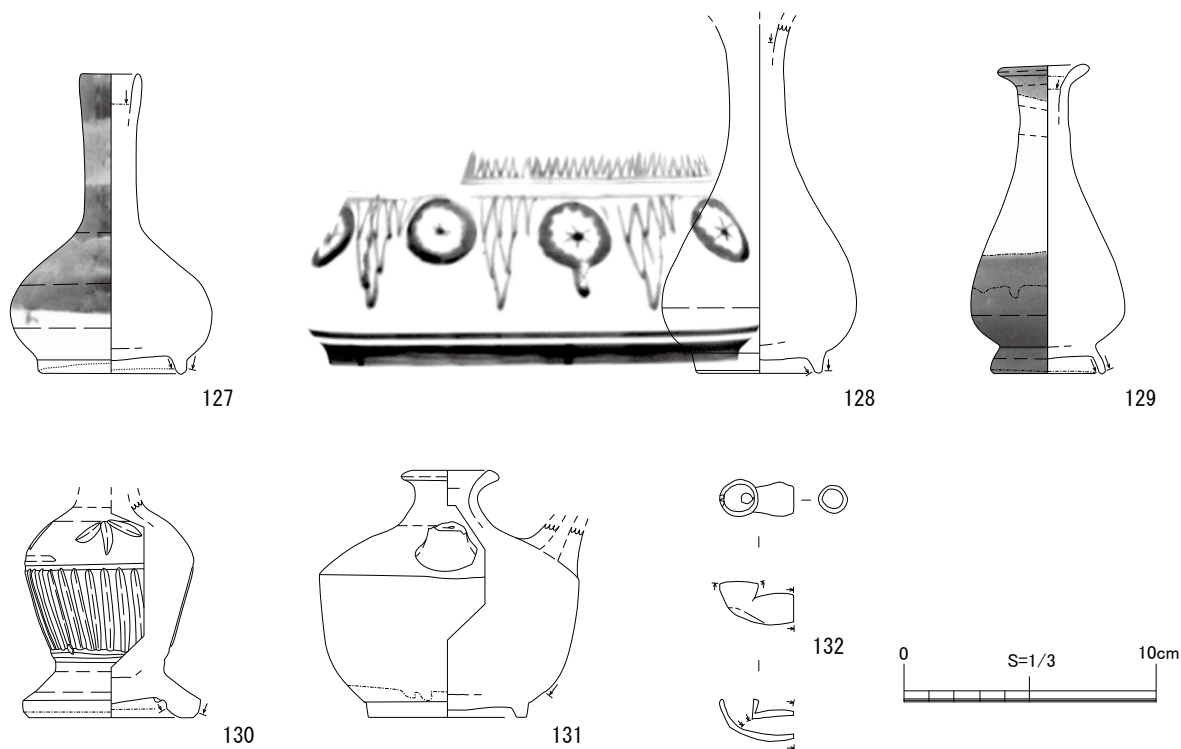


図版 24 9 号墓 出土遺物

第 14 表 9 号墓出土遺物の観察一覧表

単位:cm
括弧内は残存の寸法

連番	挿図番号 図版番号	器種 残存状況	口径 器高 底径	胎土・露胎 部の色調	釉種	施釉 (範囲、方法)	貫入	観察所見 (成形・調整・施文他)	産地 年代	出土地点
127	第27図 図版24	瓶 完形	2.3 11.9 5.6	不明	白化粧? 透明釉 呉須 褐釉・鉛 釉系	透明釉は内面頸部 途中まで、外面は置 付を除き総釉。外面 は口縁から胴最大幅 部まで呉須と褐釉を 交互に施釉する。	有	置付にアルミナ?が残 る。高台内中央はゆる やかに盛り上がる。外 面付着物点在。	沖縄産施 釉陶器	墓庭
128		瓶 頸～底部	— (13.8) 5.0	混入物無 し・白	透明釉 呉須	透明釉は、内面が頸 部途中まで、外面は 置付を除く。呉須で 文様を描く。	無	頸下部に鋸歯文、二重 圈線。同上部に一条の 堺線、その下に鋸歯文 と丸(アサガオ?)を3箇 所に描く。胴下部に一 条の堺線、高台際に二 条の圈線。高台に砂? 付着。	肥前産 17c後	墓室
129		瓶 ほぼ完形	3.6 12.3 4.3	不明・浅黄 橙	白化粧? 透明釉 褐釉・鉛 釉系 緑系	内面は頸部途中ま で。外面は緑系(口 縁)、透明(頸～胴 部)、褐(胴～底 部)、置付釉剥ぎ。	有	釉の浸し掛けで、三層 の釉色を形成。胴部に 工具による凹みあり。	沖縄産施 釉陶器	墓室
130		瓶 頸～底部	— — 6.4	黒色微粒 子・浅黄橙	褐釉	置付を除き施釉。高 台内薄釉。	無	胴上部に圈線1条と下 部に圈線2条を廻らす。 圈線の間には縦位の沈 線文を隙間無く廻らす。 肩部に三つ葉の草文を 沈線で3箇所に描く。	沖縄産施 釉陶器	墓室
131		酒器 注口、口縁 部一部欠損	3.9 9.8 6.3	白色微粒 子・灰白	褐釉	内面は頸部まで、外 面は高台脇まで。高 台をつまんで浸し 掛。	無	外面に溶着物3箇所。置 付と高台内外に砂が付 着。ケズリ高台。	沖縄産施 釉陶器	墓室
132		煙管(雁首) 完形	火皿1.2 羅宇1.1 全長2.9	不明・淡橙	緑系	火皿内から外面羅宇 端部近くまで。	有	水挽きや工具痕が無い ため手ひねりによる成 形か。	沖縄産施 釉陶器	墓室



第 27 図 9 号墓 出土遺物

第6節 10号墓

墓は、調査区中央付近の丘陵下段に位置し、東隣に9号墓、西隣に11号墓が所在している。墓は、墓口付近の崩落により墓口上部がわずかに開いた状態で発見された。隙間から内部の様子を見ると、流入した土砂の奥に割れた蔵骨器が数点確認できた。

墓口の寸法は、幅0.6 m、高さ0.9 mで、方位は北東（N50° E）を向いている。墓口の閉塞は積石によるもので墓口下部に0.3～0.4 m大の石灰岩や砂岩の石が残存していた。

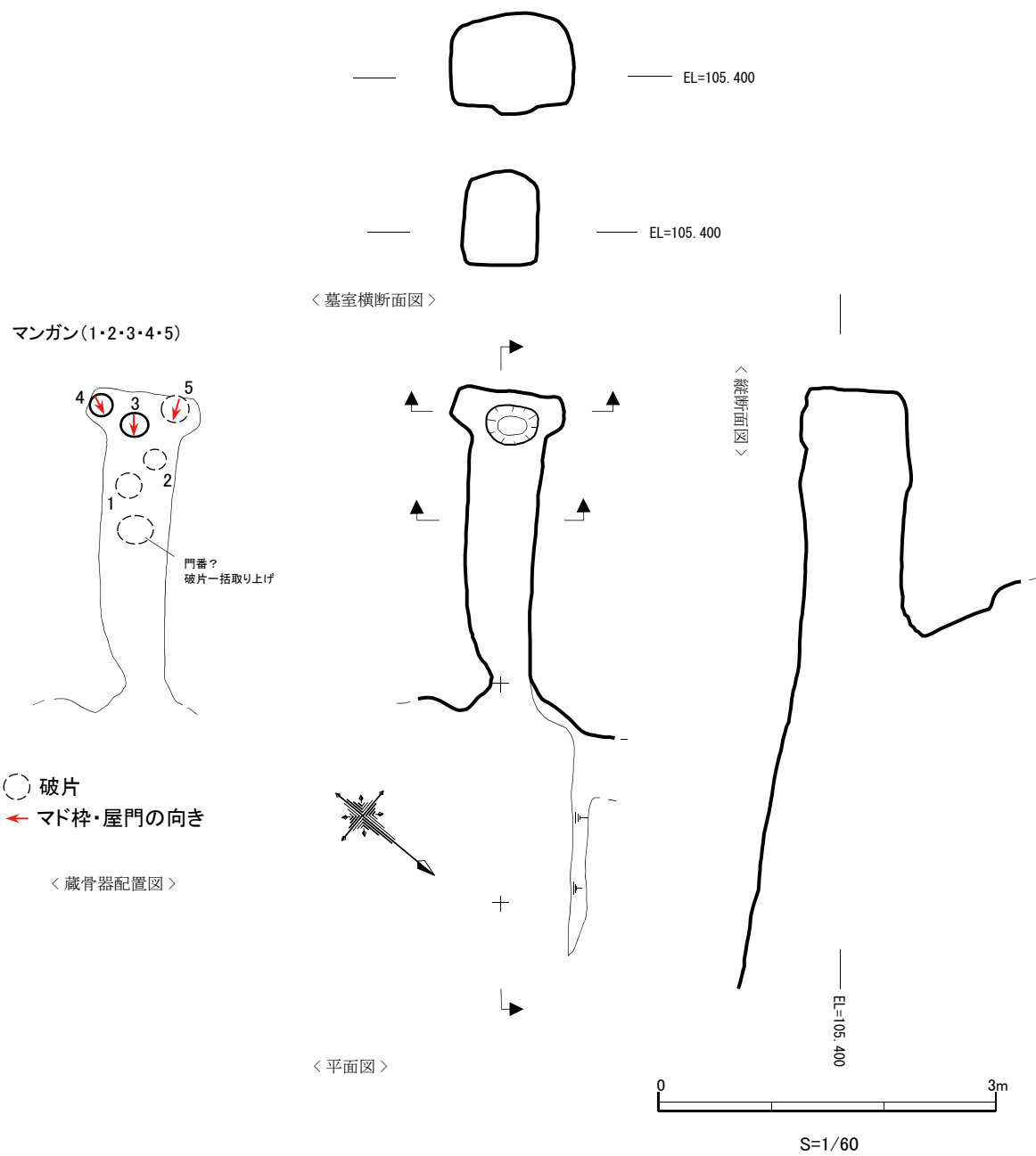
墓室は、墓口から奥壁までほぼ直線的に2.5 m掘り込み、奥壁両側を幅0.45 m、奥行き0.15 mで拡張しており、柵は造られていない。墓室の平面形はT字状となるが、類型の1類cを拡張したものと考えられる。墓室内に蔵骨器を6点安置していて、内訳はマンガン釉甕形が4点、マンガン釉底付甕形が2点であった。出土状況を第28図の蔵骨器配置図でみると、門番と思われる蔵骨器と蔵骨器No.1・2・5は、口縁部から胴部にかけて破損し、埋土中から人骨と蔵骨器の破片が混在して検出された。蔵骨器No.3・4は、屋門を墓口に向けた状態で検出され、状況からすると蔵骨器はほぼ原位置を保持しているとみられ、特に墓室内の攪乱も認められないことから、戦時中またはそれ以前の埋没が考えられた。

墓庭は、東隣の9号墓と同様の状況であるが、西隣の11号墓の墓庭とは高低差が認められ、10号墓がやや高くなっている。先後関係は不明だが、11号墓では庭囲いの掘形が確認できることや、両墓の蔵骨器の構成内容や銘書で確認できる年代等からすると、ボージャー形を含む11号墓が先に存在していた可能性が高い。

墓の造営年代を明らかにすることはできなかったが、蔵骨器の銘書の古い年代は「咸豊6年（1856年）」で、新しいものは「大正13年」が確認されており、少なくとも1924年までは墓が機能していたことが窺える。



図版 25 10号墓
1 段目左：墓の位置
1 段目右：着手前
2 段目右：墓口検出後
3 段目右：閉塞石除去後の墓室内状況



第 28 図 10 号墓 平・断面、蔵骨器配置



図版 26 10 号墓 左・中央：蔵骨器の安置状況 右：墓室の検出後

第 15 表 - 1 10 号墓蔵骨器の観察一覧表

連番	挿図番号 図版番号	名称	型式	寸法 (cm)	観察所見 (蓋)①つまみ ②文様等 ③調整痕他 (身)①正面示形 ②文様等 ③調整痕他	銘書	銘書年	被葬者			出土 地点
								人数	性別	年齢	
134	図版28	マンガン釉 底付甕形 (蓋)		29.5 22.8 14.3 10.1	①有孔宝珠。つまみ台3段。 ②鐫2.3cm。かえり2mm。正面に閉口龍 頭胴付、左右後ろに閉口獅子頭。つまみ 台下沈線花文、屋根瓦。 ③外面：器面全体にナデ。内面：水挽き。	五代大城加那次 男■[大城カ] 太■[郎カ](タ ラー)…/蓋縁 明治十…					墓室 門番?
135	第30図 図版28	マンガン釉 底付甕形 (身)		27.6 33.5 21.5 60.6	①屋門：唐破風形貼付。 ②横帯凸1・凸2・凸3・凸2。肩部：正面龍 頭、瓦屋根、軒、降り棟先端獅子頭4。胴 部：屋門内及び左右貼付仏、沈線蓮華 文、獅子頭付の区画突帯文。腰部：貼付 花文、全体に魚子。底面孔：月形5個。 ③外面：器面全体にナデ。胴下部ヘラ削 り。内面：水挽き、回転横ナデ。			1 1	男性 女性	成年 成年～ 熟年	墓室 門番?
136	図版28	マンガン釉 甕形(蓋)		32.0 25.1 15.8 11.3	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②鐫3.4cm。かえり1mm。 ③外面：水挽き後、回転ヘラ削り。内面： 水挽き。	大正七年…三■ 旧六月二十七日 死亡/四男大城 松行年六十五才 /大正十三年旧 七月死亡/妻カミ 行年七十才	死去：1918 死去：1924				墓室 No.1
137	第30図 図版28	マンガン釉 甕形(身)	V C	33.9 39.2 22.8 69.5	①屋門：位牌変形貼付。 ②横帯凹3・凹1・凹3・凹3。肩部：沈線波 状文、葉文。胴部：沈線蓮華文。腰部：沈 線波状文2段。底面孔：半月形12個。胴 下部穿孔6個。脚付3個。 ③外面：器面全体に回転横ナデ。内面： 水挽き、口縁部回転横ナデ。			1 1 1	不明 熟年 熟年	成人 女性 男性	墓室 No.1
138		マンガン釉 甕形(蓋)		30.4 24.0 14.7 11.2	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②鐫3.0cm。かえり1mm。 ③外面：水挽き後、回転ヘラ削り。内面： 水挽き。	明治四拾年旧六 月七日死亡大正 八年旧六月二十 七日洗骨(大城 松長女)大城カミ	死去：1907 洗骨：1919				墓室 No.2
139		マンガン釉 甕形(身)	V D	29.6 30.7 19.0 56.8	①屋門：アーチ形貼付。 ②横帯凹2・凹2・凹3・凹3。肩部：沈線葉 文。胴部：沈線蓮華文。腰部：沈線波状 文2段。底面孔：三日月形11個。脚付3 個。 ③外面：器面全体にナデ、回転横ナデ。 内面：水挽き。						墓室 No.2
140		マンガン釉 底付甕形 (蓋)		31.7 24.8 21.3	②鐫3.2cm。かえり2mm。瓦屋根頂部に 対面する胴付龍頭、下り棟隅頭に花文、 底下円形孔20以上。径1～2mm孔点在。 ③外面：鐫の周縁部～底に刷毛調整、内 面：水引き。	咸豊六年卯八月 十七日大城親雲 上洗骨/同治拾 年未七月七日洗 骨大城親雲上■ ■…	洗骨：1856 洗骨：1871				墓室 No.3
141		マンガン釉 底付甕形 (身)		30.5 38.6 24.2 62.8	①屋門：唐破風形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凸2・凸1。肩部：貼付+ 沈線、龍頭1、降り棟先端獅子頭3、雲、 龍体。胴部：貼付+沈線、蓮文様・円形 文。腰部：貼付+沈線、花文、円形文。底 面孔：三日月形6個。 ③外面：器面全体にナデ、底部付近ヘラ 削り。内面：水挽き。						墓室 No.3
142	図版28	マンガン釉 甕形(蓋)		25.4 19.5 12.4 8.9	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②体部に沈線1条。 ③外面：水挽き、回転ヘラ削り。内面：水 挽き。	光緒十六年卯五 月廿四日松大城 ■長男松当蔵同 二十一年乙未十 二月十九日洗骨 /光緒十七年卯 九月二日死同人 次男蒲大城同二 十一年十二月十 九日洗骨/カマ当 蔵三才	死去：1890 洗骨：1895 死去：1891 洗骨：1895				墓室 No.4

寸法は、ボージャー形・甕形の蓋が上から外径/内径/器高/体部高、身が上から口径/胴径/底径/器高の計測値である。
家形・御殿形は、蓋が上から縁部(長辺×短辺)/器高、身が上から口縁部(長辺×短辺)/底部(長辺×短辺)/器高の計測値である。

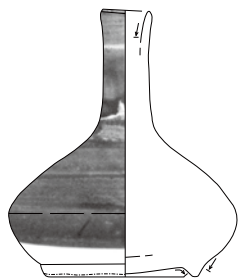
第 15 表 - 2 10 号墓蔵骨器の観察一覧表

連番	挿図番号 図版番号	名称	型式	寸法 (cm)	観察所見 (蓋)①つまみ ②文様等 ③調整痕他 (身)①正面示形 ②文様等 ③調整痕他	銘書	銘書年	被葬者			出土 地点
								人数	性別	年齢	
143	図版28	マンガン釉 甕形(身)	V D	25.6 30.1 18.3 43.1	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹2・凹2・凹2・凹2。肩部:沈線葉 文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線波 文。底面孔:円形14個。 ③外面:器面全体にナデ、所々斜位のナ デ。内面:水挽き。			2	不明	幼児	墓室 No.4
144	第30図 図版28	マンガン釉 甕形(蓋)		22.7 18.0 11.8 7.7	①有孔宝珠。つまみ台1段。 ②鏝2.4cm。かえり1mm。つまみ台下に 象嵌風の縦位のヘラ削りを廻らす。 ③外面:水挽き、ヘラ削り。内面:水挽 き。	光緒己■年九月 十七日カマ三男 ■■■/弟■■■					墓室 No.5
145		マンガン釉 甕形(身)	V D	21.5 23.8 15.7 35.6	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹2・凹1・凹2・凹2。肩部:沈線鋸 齒文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線波 状文。底面孔:円形9個。 ③外面:全体に回転横ナデ、胴下部回転 ヘラ削り。内面:水挽き、胴部中央付近に 継ぎ目痕有り。						墓室 No.5

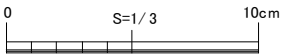
寸法は、ボージャー形・甕形の蓋が上から外径/内径/器高/体部高、身が上から口径/胴径/底径/器高の計測値である。
家形・御殿形は、蓋が上から縁部(長辺×短辺)/器高、身が上から口縁部(長辺×短辺)/底部(長辺×短辺)/器高の計測値である。

第 16 表 10 号墓出土遺物の観察一覧表

連番	挿図番号 図版番号	器種 残存状況	口径 器高 底径	胎土・露胎 部の色調	釉種	施釉 (範囲、方法)	貫 入	観察所見 (成形・調整・施文他)	産地 年代	出土地点
133	第29図 図版27	瓶 ほぼ完形	2.0 10.6 6.1	混入物無 し・にぶい橙	白化粧 透明釉 褐釉・鉛 釉系 呉須	白化粧後、透明釉を 口縁内頸部途中から 畳付を除き施釉。口 縁内から外面腰部に 呉須と褐釉を交互に 施釉。	有	釉の互層で文様風に する。丁寧さに欠け、 釉にムラがみられる。 畳付は釉剥ぎ。	沖縄産 施釉陶 器	墓庭



133

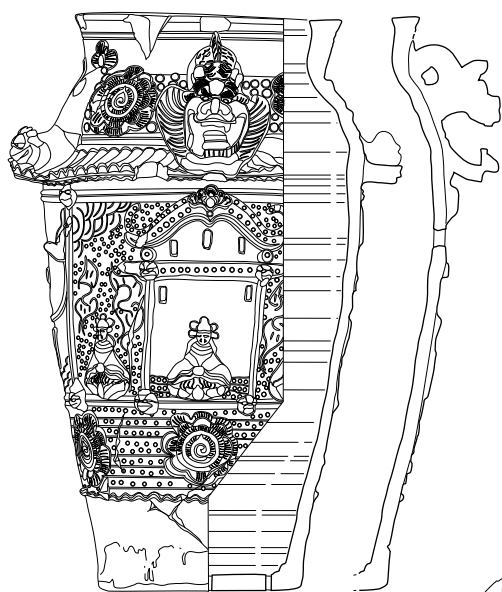


第 29 図 10 号墓 出土遺物

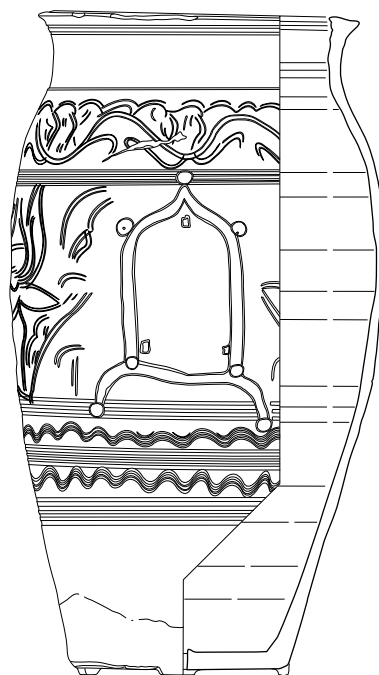


133

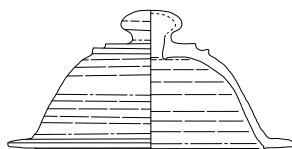
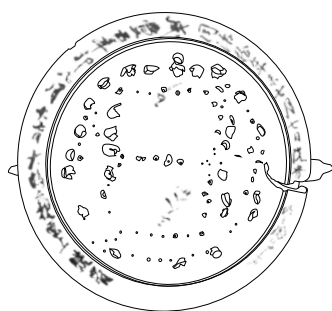
図版 27 10 号墓 出土遺物



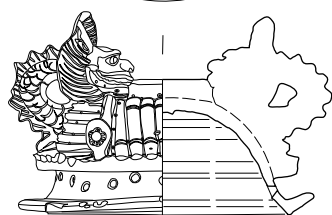
135



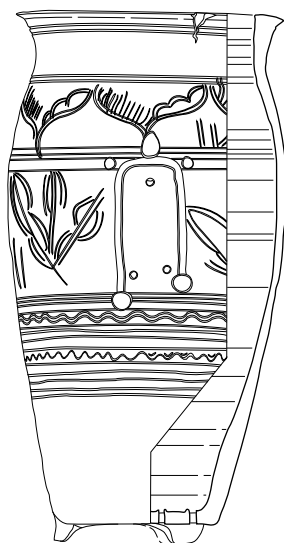
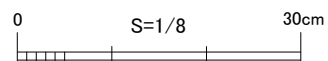
137



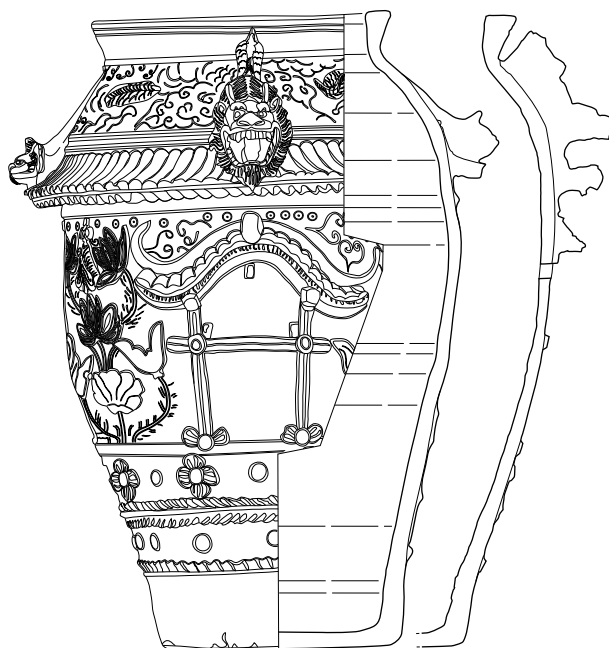
138



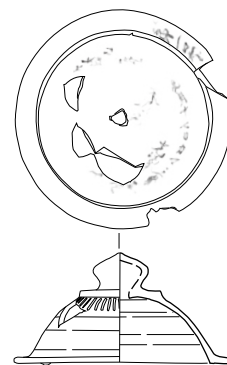
140



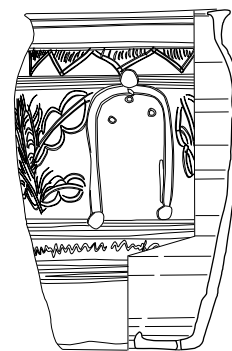
139



141



144



145

第 30 图 10 号墓藏骨器



图版 28 10 号墓 藏骨器

第7節 11号墓

墓は調査区中央付近の丘陵下段に位置し、東隣に10号墓、西隣に12号墓(空き墓)が所在している。墓は墓室天井と墓口上部の部分的な崩落により、墓口上部がわずかに開いた状態で発見された。

墓口の寸法は、幅0.55 m、高さは崩落により不明。羨道の長さは1.2 mで、墓口方位は北東(N40° E)を向いている。閉塞は積石によるもので、墓口に頭大の石灰岩や砂岩の礫石が3～4段残存していた。

墓室は、類型の1類aに分類される。平面形は歪な横長の形状で、寸法は幅2.2 m、奥行き1.0 m、残存部の高さ1.1 mを測る。蔵骨器を13点安置しており、その内訳はボージャー形5点、マンガン釉甕形7点、転用蔵骨器(油甕)1点であった。埋没に起因する蓋の落下(第31図の蔵骨器配置図No.1・3・5)や横転した蔵骨器(No.5)もみられたが、多数の蔵骨器が直立状態であったため概ね原位置を保持しているものと考えられた。

蔵骨器の安置状況についてみると、正面を示すマド枠や屋門の向きで、正面奥壁側を向くもの(No.3・4・5・11・13)、墓口を向くもの(No.1・6・7・8)、右壁を向くもの(No.9・10・12)が確認され、墓口から離れた蔵骨器を正面奥壁に、近いものを墓口側に向ける傾向が窺えた。一方、これらを銘書の被葬者別でみると、西平(No.3)、宮里(No.6・8)、仲村渠(No.9)の姓で分類できることから、近縁関係等で整理された可能性も考えられたが現段階では不明な点が多く、今後の検討課題として留意したい事例である。

墓庭は、庭囲いの痕跡が僅かに認められ、残存部の推計は最大2.7 m×2.1 mを測る。

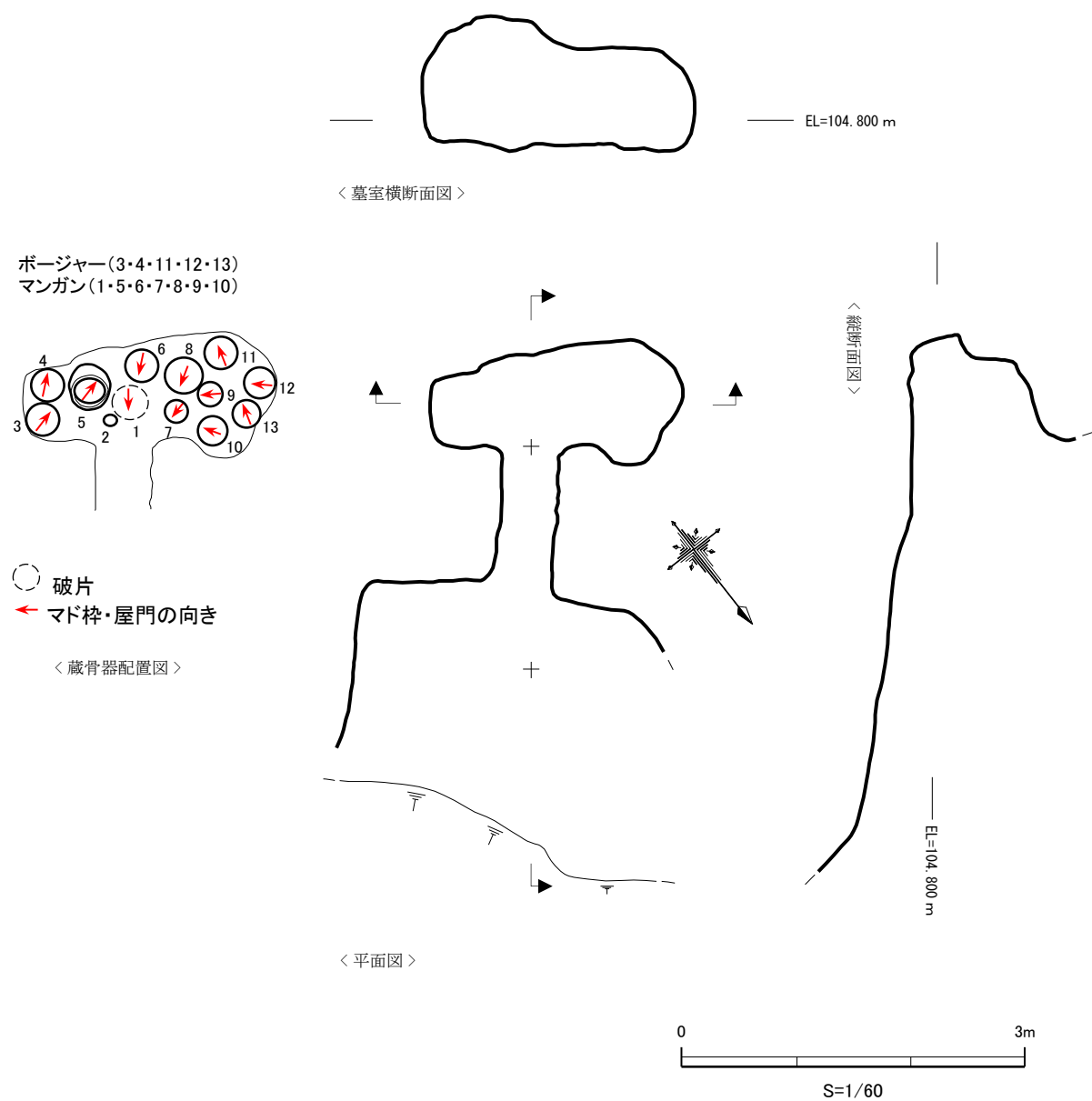
墓の造営年代を明らかにすることはできなかったが、蔵骨器の銘書の古い年代は、「乾隆7年(1742年)」で、新しいものは「光緒15年」が確認されており、少なくとも1889年までは墓が機能していたことが窺える。



図版 29 11号墓

1段目左：墓の位置 右：着手前

2段目左：墓室内の埋土堆積状況 右：墓口閉塞石の検出後



第31図 11号墓 平・断面、蔵骨器配置



図版 30 11号墓 蔵骨器検出状況

第 17 表 - 1 11 号墓蔵骨器の観察一覧表

連番	挿図番号 図版番号	名称	型式	寸法 (cm)	観察所見 (蓋)①つまみ ②文様等 ③調整痕他 (身)①正面示形 ②文様等 ③調整痕他	銘書	銘書年	被葬者			出土 地点
								人数	性別	年齢	
148	第33図 図版32	マンガン釉 甕形(蓋)		30.0 25.0 16.7 12.4	①有孔宝珠。つまみ台2段。各段上に 凹線1条。つまみ頂部穿孔・孔径2mm。 ②鏝2.2cm。かえり1.5mm。内面に判の ような墨書有り。 ③外面:水挽き、回転横ナデ。内面:水 挽き。						墓室 No.1?
149	図版32	マンガン釉 甕形(身)	IV D	31.4 35.5 20.3 57.0	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凸3・凹3。肩部:沈線 蓮華文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線 波状文2段。底面孔:円形10個。 ③外面:器面全体にナデ。胴下部へう 削り。内面:水挽き、回転横ナデ。			1 1	不明 不明	乳児 胎児~ 乳児	墓室 No.1
150	第33図	転用・壺 (油壺 蓋)		13.9 8.2 4.4	②かえり1.9cm。 ③外面:つまみ内一部を除き総釉後体 部途中を蛇の目釉剥ぎ。内面は露胎。						墓室 No.2
151		転用・壺 (油壺 身)		12.1 15.5 11.2 20.2	②胴上部に縦耳4。 ③外面:水挽き、回転横ナデ。内面:水 挽き。内外面に褐色の釉を施す。口唇 部は無釉で、白化粧が残る。高台量付 と高台脇は露胎。			1 1	不明 不明	小児 幼児	墓室 No.2
152	第33図 図版32	ボージャー 形(蓋)	V a	28.7 27.8 11.8 9.6	①無孔宝珠。つまみ台1段。 ③外面:水挽き後、体部回転へう削り、 胎土に石灰粒を含む。内面:水挽き。色 調:外面2.5YR6/8(橙)。内面2.5YR6/6 (橙)。	乾隆七年戌九月 十四日去三男西 平里之子親雲上 康就/同十年丑七 月七日洗骨	死去:1742 洗骨:1745				墓室 No.3
153		ボージャー 形(身)	III a	29.3 35.5 22.4 49.3	①マド枠:平葺形貼付・1方2円。 ②横帯凹2。判有り。底面孔:円形10 個。 ③外面:器面全体ナデ、胴下部回転へ う削り、斜位へう削り。内面:水挽き。	■■■■・■■■■ /■■■■		1	男性	成人	墓室 No.3
154		ボージャー 形(蓋)	VII	28.3 26.6 9.4	③外面:水挽き後、上部へう削り、下部 回転横ナデ。内面:水挽き、上部ナデ。 色調:外面2.5YR5/6(橙)。内面5YR4/1 (褐灰)。体部外面縁部に重ね焼き痕と みられる色調変化が認められる。						墓室 No.4
155		ボージャー 形(身)	III a	25.5 31.8 20.5 46.5	①マド枠:唐破風形貼付・1方2円。 ②横帯凹1。底面孔:5個。	乾隆二十七年壬午/ 十月二十一日洗 骨也/儀間筑登之	洗骨:1762	1	男性	成人	墓室 No.4
156	図版32	マンガン釉 甕形(蓋)		34.3 28.0 18.1 13.0	①有孔宝珠。つまみ台3段。 ②鏝2.9cm。かえり5.5mm。 ③外面:水挽き後、ナデ。内面:水挽 き。	咸豊拾一年辛酉 六月五日卒榑宮 里妻同人洗骨同 治十年七月七日	死去:1861 洗骨:1871				墓室 No.5
157		マンガン釉 甕形(身)	IV B	33.6 42.1 22.8 64.3	①屋門:唐破風形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凸3・凹4。肩部:沈線 波状文、圈線、沈線蓮葉文。胴部:沈線 蓮華文。腰部:沈線波状文2段。底面 孔:円形9個。③外面:器面全体にナ デ、胴下部へう削り。内面:水挽き。			1 1	不明 不明	成人 成人	墓室 No.5
158	第33図 図版32	マンガン釉 甕形(蓋)		28.2 20.4 17.1 12.7	①有孔宝珠。つまみ台1段。 ②鏝3.5cm。かえり3mm。 ③外面:水挽き後、上部回転へう削り。 内面:水挽き。	咸豊九(欠)/十月 廿九日洗(欠)/仕 置申候嫡子太 (欠)/宮里	洗骨:1859				墓室 No.6

寸法は、ボージャー形・甕形の蓋が上から外径/内径/器高/体部高、身が上から口径/胴径/底径/器高の計測値である。
家形・御殿形は、蓋が上から縁部(長辺×短辺)/器高、身が上から口縁部(長辺×短辺)/底部(長辺×短辺)/器高の計測値である。

第 17 表 - 2 11 号墓蔵骨器の観察一覧表

連番	挿図番号 図版番号	名称	型式	寸法 (cm)	観察所見 (蓋)①つまみ ②文様等 ③調整痕他 (身)①正面示形 ②文様等 ③調整痕他	銘書	銘書年	被葬者			出土 地点
								人数	性別	年齢	
159	第33図 図版32	マンガン釉 甕形(身)	IV D	30.3 34.4 20.5 48.4	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凸3・凹3。肩部:沈線 葉文・蔓草文。胴部:沈線蓮華文。腰 部:沈線波状文。底面孔:円形7個。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部回転 ヘラ削り、縦位の粗雑な削り。内面:水 挽き、胴上部斜位ナデ。			1	不明	成人	墓室 No.6
160		マンガン釉 甕形(蓋)		24.0 17.4 12.1 7.3	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②鐏3.1cm。かえり無し。 ③外面:水挽き、回転ヘラ削り。内面: 水挽き。						墓室 No.7
161	図版32	マンガン釉 甕形(身)	V D	22.2 27.4 18.2 42.1	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凹3・凹4。肩部:長短 の縦位の沈線を廻らし、鋸歯状の文様 を表現。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線 波状文。底面孔:方形16個。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部ヘラ 削り。内面:水挽き。			1	不明	小児	墓室 No.7
162	第33図 図版32	マンガン釉 甕形(蓋)		32.7 26.3 15.4 12.2	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②鐏3.1cm。かえり1.8mm。 ③外面:水挽き、回転ヘラ削り。内面: 水挽き。斜位のヘラ削り。	同治八年七月十 日卒同治十年 未七月七日洗骨 宮里筑登之妻同 人夫樽次男宮里 筑登之/光緒十五 年庚丑十二月二 日洗骨	死去:1869 洗骨:1871 洗骨:1889				墓室 No.8
163		マンガン釉 甕形(身)	V B	33.2 42.5 24.3 64.0	①屋門:唐破風形貼付。 ②横帯凹3・凸1・凸3・凹4。肩部:沈線 蓮華文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線 波状文2段。底面孔:円形6個。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部回転 ヘラ削り。内面:水挽き、回転ヘラ削り。	同治八年七月十 日卒同治十年 未七月七日洗骨 宮里筑登之妻	死去:1869 洗骨:1871	2 2 1	女性 男性 不明	成人 成人 老年	墓室 No.8
164	第34図 図版32	マンガン釉 甕形(蓋)		27.2 19.4 15.0 11.1	①有孔宝珠。つまみ台1段。 ②鐏3.4cm。かえり3mm。 ③外面:水挽き、斜位ヘラ削り、胎土に 石灰粒含む。内面:水挽き。	咸豊九年己未/十 月式九日洗骨/仕 三男之小仲村渠 筑登之/女子那べ	洗骨:1889				墓室 No.9
165		マンガン釉 甕形(身)	V D	27.9 34.3 21.2 52.3	①屋門:アーチ形貼付。②横帯凹2・凸 1・凸2・凹3。肩部:沈線葉文。胴部:沈 線蓮華文。腰部:沈線波状文3段。底面 孔:半月形13個。 ③外面:器面全体にナデ、胴部で縦位 ナデ、胴下部回転ヘラ削り。内面:水挽 き。			1	不明	成人	墓室 No.9
166		ボージャー 形(蓋)		29.2 27.9 11.5	③外面:水挽き後、上部ヘラ削り、下部 回転横ナデ。内面:水挽き、上部ナデ。 色調:外面2.5YR6/4(にぶい橙)・ 10YR5/3(黄褐)。内面2.5YR5/4(にぶ い橙)。体部外面中央部に重ね焼き痕 とみられる色調変化が認められる。						墓室 No.10
167		マンガン釉 甕形(身)	III B	28.1 34.0 21.0 52.2	①屋門:唐破風形貼付。 ②横帯凹2・凹1・凸3・凸3。肩部:沈線 波状文2段。胴部:貼付蓮華文(茎は沈 線)。腰部:沈線波状文。底面孔:円形 12個。 ③外面:器面全体にナデ、胴部で斜位 ヘラ削り、胴下部回転ヘラ削り。内面: 水挽き、回転ヘラ削り。			1	男性	成人	墓室 No.10
168		ボージャー 形(蓋)	V b	32.5 31.4 12.6 10.7	①無孔宝珠。つまみ台1段。つまみ台下 に凹線2。 ③内外面:水挽き、回転ヘラ削り。色 調:外面2.5YR5/3(にぶい橙)・5YR5/2 (灰褐)。内面5YR5/4(にぶい黄褐)。体 部外面縁部に重ね焼きとみられる変色 箇所有り。	■■■■乙■月■ ■■洗骨/■■■■■ ■■					墓室 No.11

寸法は、ボージャー形・甕形の蓋が上から外径/内径/器高/体部高、身が上から口径/胴径/底径/器高の計測値である。

家形・御殿形は、蓋が上から縁部(長辺×短辺)/器高、身が上から口縁部(長辺×短辺)/底部(長辺×短辺)/器高の計測値である。

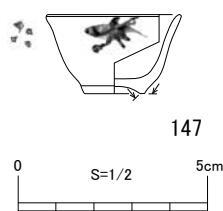
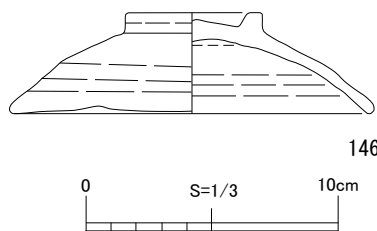
第 17 表 - 3 11 号墓蔵骨器の観察一覧表

連番	挿図番号 図版番号	名称	型式	寸法 (cm)	観察所見 (蓋)①つまみ ②文様等 ③調整痕他 (身)①正面示形 ②文様等 ③調整痕他	銘書	銘書年	被葬者			出土 地点
								人数	性別	年齢	
169	第34図 図版32	ボージャー 形(身)	IV	31.0 40.2 22.3 50.3	①マド枠:平葺形貼付・1方2方。 ②横帯凹3。判有り。底面孔:蒲鉾形5 個。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部回転 ヘラ削り、斜位のナデ。内面:水挽き、 回転ヘラ削り、斜位のヘラ削り。	乾隆十年乙丑七 月七日洗骨/三男 西平里之子親雲 上乳母/久場阿む しれ/大城阿むし られ女子/うし/同 人女子満可■あ むしれ三女/真加 戸/仲村渠筑登之 女子/萬加戸/同 人三女/なべ	洗骨:1745	1	不明	幼児	墓室 No.11
170		ボージャー 形(蓋)		31.6 25.2 15.3 10.3	①有孔宝珠。つまみ台1段。段凹線2 条。つまみ先端部穿孔・孔径3.4mm。 ②鍔2.6cm。かえり9.6mm。内面に判の ような墨書有り。 ③外面:水挽き、回転ヘラ削り。内面: 水挽き。色調:外面7.5YR8/3(浅黄 橙)。内面2.5YR5/6(明赤褐)。外面に マンガン釉を刷毛で薄く施す。						墓室 No.12
171		ボージャー 形(身)	V	34.8 41.6 25.1 56.0	①マド枠:唐破風形形貼付・1方4円。 ②横帯凹3。判有り。底面孔:6個。	大清乾隆四十二 年十月十八日洗 骨也/[]	洗骨:1777	1 1 1	女性 不明	成人 小児 乳児	墓室 No.12
172		マンガン釉 甕形(蓋)		30.0 25.8 14.3 11.5	①有孔宝珠。つまみ台1段。 ②鍔2.7cm。かえり3mm。 ③外面:水挽き、回転ヘラ削り。内面: 水挽き。						墓室 No.13
173		ボージャー 形(身)	IV	28.0 34.1 22.4 51.5	①マド枠:平葺形貼付・1方2方。 ②横帯凹3。判有り。底面孔:円形9個。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部回転 ヘラ削り、斜位と縦位の雑削り。内 面:水挽き、胴上部回転ヘラ削り。			1	男性	成人	墓室 No.13

第 18 表 11 号墓出土遺物の観察一覧表

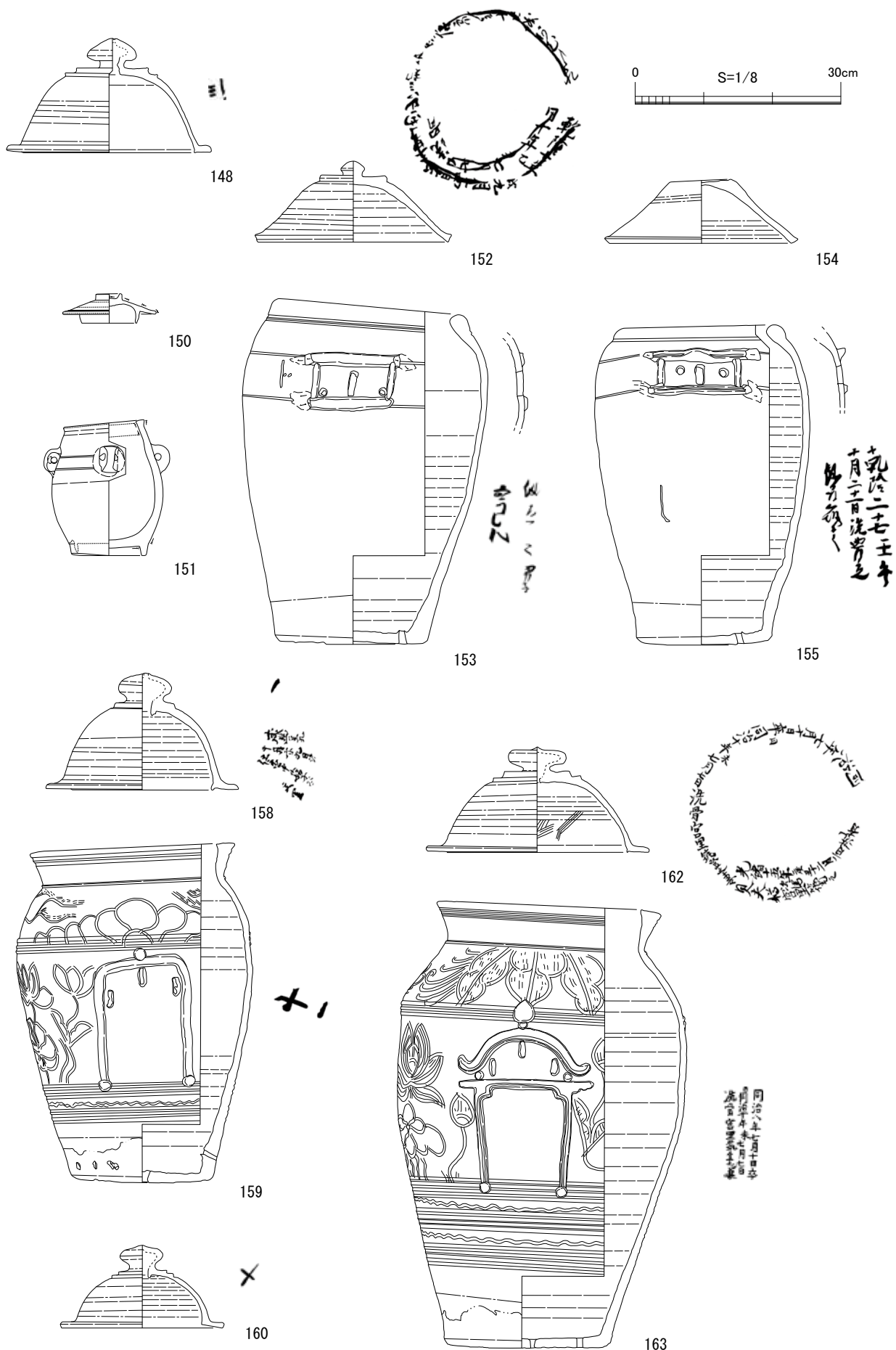
単位:cm
括弧内は残存の寸法

連番	挿図番号 図版番号	器種 残存状況	口径 器高 底径	胎土・露胎 部の色調	釉種	施釉 (範囲、方法)	貫 入	観察所見 (成形・調整・施文他)	産地 年代	出土 地点
146	第32図 図版31	蓋 全体の1/2 残存	つまみ 5.45 器高4.0 口径14.5	白色微粒 子、雲母・橙	無	無	無	アカムヌーと称される もの。	沖縄産陶質 土器	墓室
147		小杯 完形	3.6 2.1 1.6	不明	透明釉 呉須?	透明釉を量付を除き 施釉。呉須で外面口 縁下に文様を描く。	無	外面の文様は2対を 対極に配する。文様 が雑なため判然とし ないが、魚文と七曜 文か。	徳化窯 18c後~19c	蔵骨器 No.11内

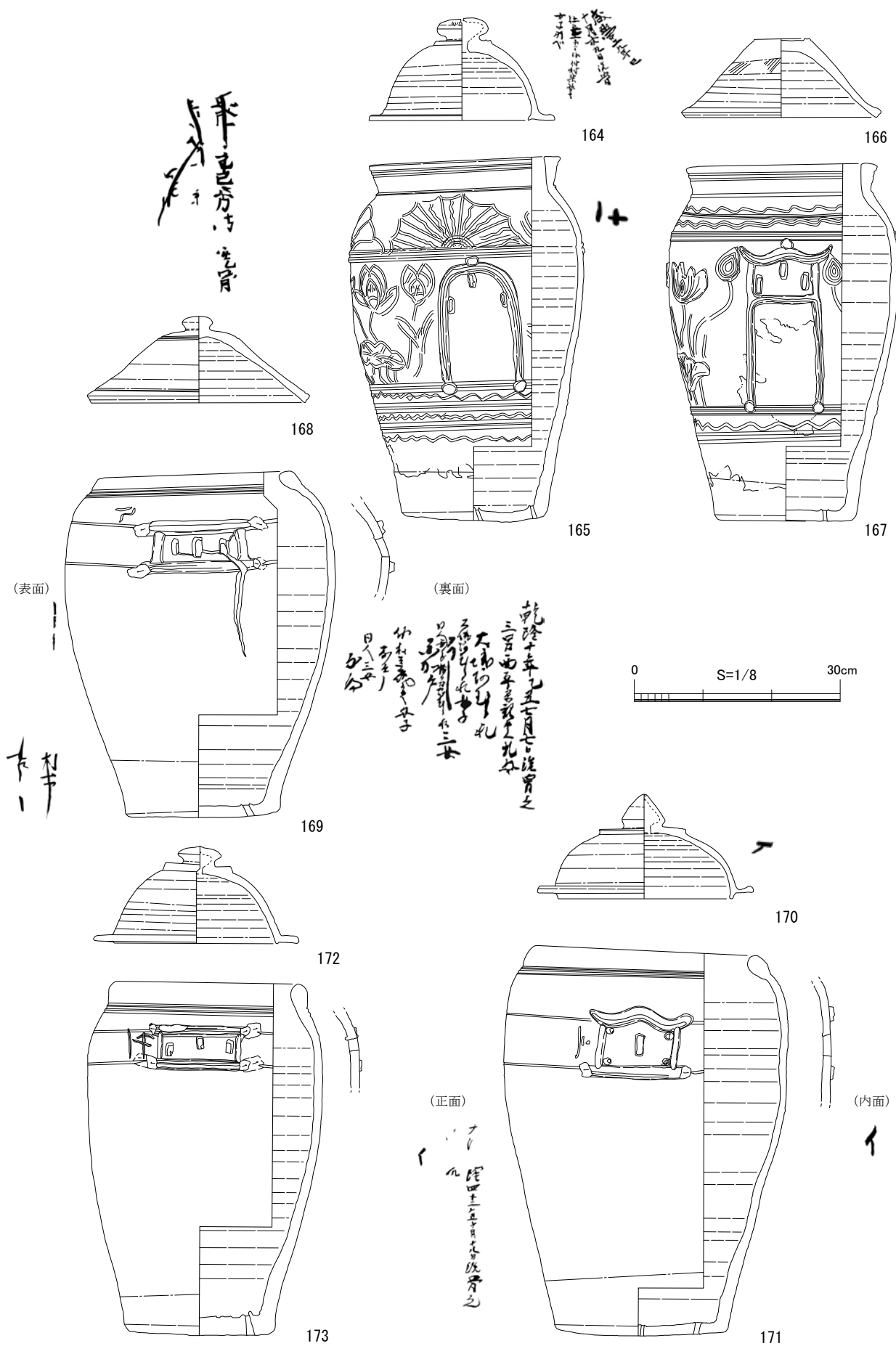


第 32 図 11 号墓 出土遺物

図版 31 11 号墓 出土遺物



第33图 11号墓藏骨器(1)



第 34 图 11 号墓 藏骨器 (2)



图版 32 11 号墓 藏骨器

第8節 53号墓

墓は調査区西側の丘陵下段に位置し、東隣に12号墓、西隣に13号墓が所在している。墓口前には崩落土が堆積しており、墓口上部が開いた状態で発見された。

墓口の寸法は、幅0.6 m、高さ0.9 m、羨道は1.0 mで、墓口の方位は北東（N40° E）を向いている。墓口の閉塞は積石によるもので、頭大の石灰岩や砂岩の礫石が残存したほか、周辺からも積石の一部と考えられる礫石が確認された。

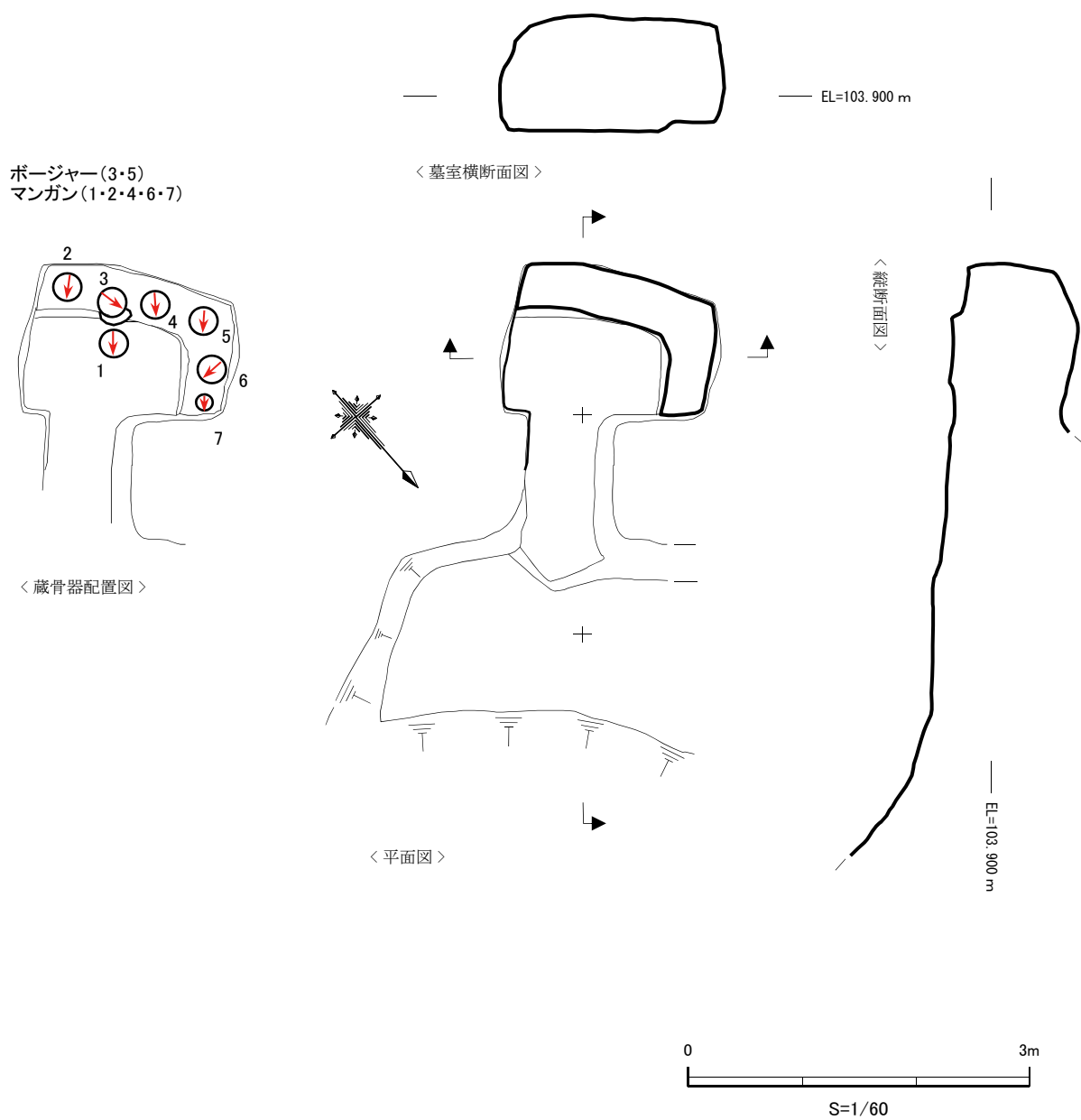
墓室は、棚（L字状）と汁ヒラシで構成する。類型の3類cに分類されるが、棚の高さは10～15cmと低い。墓室の平面形は横長の略方形で、幅1.9 m、奥行き1.3 m、高さ1.1 mを測る。汁ヒラシの面積は1.17㎡、墓室の面積は2.47㎡で、調査した3類型に属する墓の中では最小規模となる。壁面には刃幅約4cmのノミ痕が明瞭に残る。蔵骨器数は7点で、棚上に6点、汁ヒラシに1点安置していた。蔵骨器の種別は、ボージャー形2点、マンガン釉甕形5点であった。汁ヒラシの1点は、マンガン釉甕形（第35図の蔵骨器配置図No.1）で、位置的に門番と判断された。蔵骨器の身は、No.3を除いて直立しており、蓋と身もセットで揃っていることから、原位置を保持しているものと考えられた。No.3は、ボージャー形の身と蓋のセットであるが、蓋を裏返して棚に置き、その蓋の上に身を重ねていた。配石や棚を掘り込んで蔵骨器を据える事例が類推されたが、蔵骨器の蓋を用いる事例を知りえないため、判然としない。マド枠や屋門の向きについてみると、北東向きで墓口と平行するもの（No.1・2・4・5・7）、東向きで墓口を向くもの（No.6）、北向きで左壁を向くもの（No.3）が確認された。No.3は、蔵骨器の安定化に起因することも考えられるため、方位については除外できる可能性を含んでいる。

墓庭は、庭囲いの痕跡が僅かに認められ、残存部の寸法は最大2.3 m×1.4 mを測る。

墓の造営年代を明らかにすることはできなかったが、蔵骨器の銘書の古い年代は、「乾隆22年（1757年）」で、新しいものは「道光21年（1841年）」が確認されている。また、門番と考えられる蔵骨器No.1の型式（安里編年のマンガン釉甕形Ⅳ式：1850～1890年）を考慮すると、少なくとも19世紀後半頃までは墓が機能していたことが窺える。



図版 33 53号墓 左：墓の位置 右：墓口の閉塞石検出後



第 35 図 53 号墓 平・断面、蔵骨器配置



図版 34 53 号墓 蔵骨器安置状況

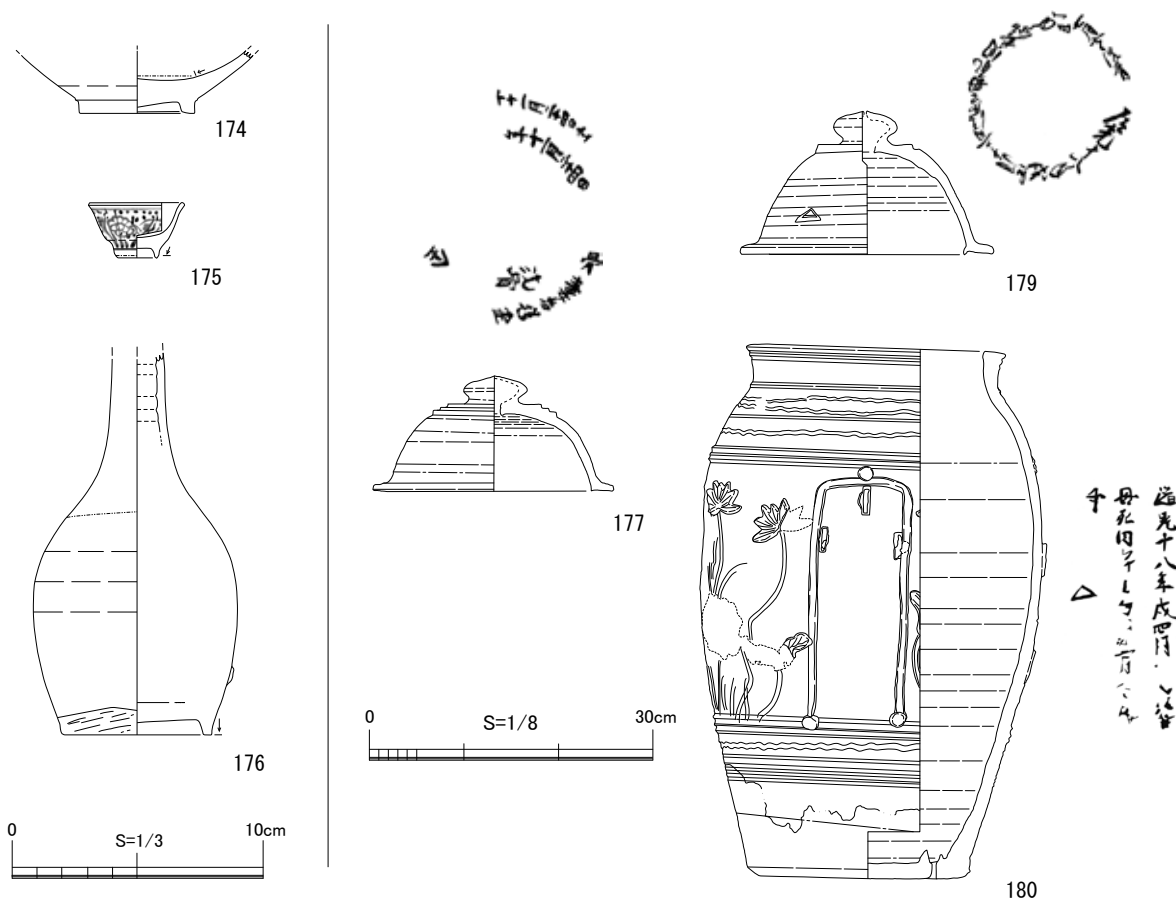
第 19 表 - 1 53 号墓蔵骨器の観察一覧表

連番	挿図番号 図版番号	名称	型式	寸法 (cm)	観察所見 (蓋)①つまみ ②文様等 ③調整痕他 (身)①正面示形 ②文様等 ③調整痕他	銘書	銘書年	被葬者			出土 地点
								人数	性別	年齢	
177	第36図 図版35	マンガン釉 甕形(蓋)		25.6 20.8 12.3 9.3	①有孔宝珠。つまみ台3段。 ②鍔2.3cm。かえり無し。 ③外面:水挽き後、体上部回転ヘラ削り、体下部回転横ナデ。内面:水挽き。台接合部ナデ、内外面に焼成時の降灰と白色砂粒が認められる。	明治三十九年十二月二十四日十一世花城清行洗骨■樽金/明治三十九年十二月二十四日…童名樽金	洗骨:1906				墓室 No.1
178	図版35	マンガン釉 甕形(身)	V D	25.9 31.0 19.5 48.7	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹3・凹1・凹3・凹4。肩部:沈線蓮葉文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線波状文2段。底面孔:8個。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部ヘラ削り、内面:水挽き。			1	男性	成年	墓室 No.1
179	第36図 図版35	マンガン釉 甕形(蓋)		26.8 20.7 15.3 11.8	①有孔宝珠。つまみ台1段。つまみ頂部穿孔・孔径2mm。 ②鍔2.7cm。かえり4mm。外面体部途中に三角の朱書き。 ③外面:水挽き後、体上部回転ヘラ削り、体下部回転横ナデ。内面:水挽き、台接合部ナデ。	道光十八年戊四月十二日清■〔堅カ〕母死同式拾壹年辛丑七月七日洗骨	死去:1838 洗骨:1841				墓室 No.2
180		マンガン釉 甕形(身)	III D	27.7 36.4 23.8 56.1	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凸3・凸3。肩部:沈線波状文2段。胴部:貼付蓮華文(茎は沈線)。腰部:沈線波状文。底面孔:三日月形5個。背面に朱書きの銘書有り。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部斜位のヘラ削り。内面:水挽き、回転ヘラ削り。	道光十八年戊四月■■■■/母死同■■■■■■■■洗骨■■/■■/△	死去:1838	1	不明	成人	墓室 No.2
181	第37図 図版35	ボージャー 形(蓋)	V a	30.1 29.3 10.7 9.1	①無効宝珠。つまみ台1段。段上凹1。 ③外面:水挽き後、体上部回転ヘラ削り、つまみ台・つまみ回転横ナデ。内面:水挽き、台接合部ナデ。外面色調2.5YR4/6(赤褐)。内面色調2.5YR5/4(にぶい赤褐)。	■■■■・■■ 乾隆■■・丁/…… ■■■■乾隆/毛氏次■■・清■■ 乾隆/■■■■洗骨/辰十月十日洗骨					墓室 No.3
182		ボージャー 形(身)	III c	27.3 37.7 20.6 50.6	①マド枠:唐破風形貼付・1方2方。 ②横帯凹2、底面孔:5個。 ③外面:器面全体にナデ、内面:水挽き、回転ヘラ削り。口唇部に多数の目痕、高温焼成のためか、外面は器面全体が暗褐色を呈する。	■■■■■■乾隆廿二■■己/…月十日/…武富親…高/…■■■■	1757	1	不明	成人	墓室 No.3
183		マンガン釉 甕形(蓋)		34.1 26.2 16.0 10.4	①有孔宝珠。つまみ台2段。上段凹2・下段凹1。つまみ頂部穿孔・孔径5mm。 ②鍔3.6cm。かえり9mm。 ③外面:体部～つまみ台まで回転ヘラ削り、体下部・つまみ回転横ナデ。内面:水挽き、台接合部ナデ。	清保祖父母与存申者兼而銘書無之候					墓室 No.4
184		マンガン釉 甕形(身)	II A	33.5 41.1 25.8 57.2	①屋門:瓦屋形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凸3・凸3。肩部:沈線蓮葉文。胴部:貼付蓮華文(茎は沈線)。背面に沈線蓮華文。底面孔:円形5個。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部斜位のヘラ削り。内面:水挽き、回転ヘラ削り。			1 1	女性 不明	成人 幼児	墓室 No.4
185		ボージャー 形(蓋)	VI	29.4 28.4 8.1	①つまみ無し。つまみ台1段。 ③外面:水挽き後、体上部回転ヘラ削り、体下部回転横ナデ。内面:水挽き。外面色調2.5YR4/4(にぶい赤褐)。内面色調5YR3/1(黒褐)。	乾隆四拾貳年丁酉八月拾九日/勢理客筑登之/妻	洗骨:1777				墓室 No.5
186		ボージャー 形(身)	IV	30.2 36.0 24.9 51.6	①マド枠:平葺形貼付・1方2方。 ②横帯凹3。底面孔:4個。 ③外面:器面全体にナデ、内面:水挽き、回転ヘラ削り。	乾隆四十二年八月十九日納骨■■■■/嫡子[]/[]		1 1 1	不明 女性 不明	成人 成年 小児	墓室 No.5

寸法は、ボージャー形・甕形の蓋が上から外径/内径/器高/体部高、身が上から口径/胴径/底径/器高の計測値である。
家形・御殿形は、蓋が上から縁部(長辺×短辺)/器高、身が上から口縁部(長辺×短辺)/底部(長辺×短辺)/器高の計測値である。

第 19 表 - 2 53 号墓蔵骨器の観察一覧表

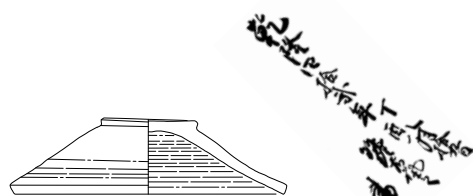
連番	挿図番号 図版番号	名称	型式	寸法 (cm)	観察所見 (蓋)①つまみ ②文様等 ③調整痕他 (身)①正面示形 ②文様等 ③調整痕他	銘書	銘書年	被葬者			出土 地点
								人数	性別	年齢	
187	図版35	マンガン釉 甕形(蓋)		30.8 23.5 17.9 13.4	①有孔宝珠。つまみ台1段。段上凹1。 ②鐫3.2cm。かえり6mm。 ③外面:水挽き、回転ヘラ削り。内面: 水挽き、回転横ナデ。	道光十七年酉十一 月廿二日死同 人妻同年廿拾壹 年丁丑七月七日 洗骨/道光十五 年己未正月九日 死同廿拾壹年丁 丑七月七日洗肉 骨清■〔堅カ〕花 城里之子親雲上	死去:1837 洗骨:1841 死去:1835 洗骨:1841				墓室 No.6
188	第37図 図版35	マンガン釉 甕形(身)	Ⅲ B	31.1 40.8 25.4 62.9	①屋門:唐破風形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凸3・凸3。肩部:沈線 波状文3段。胴部:貼付蓮華文(茎は沈 線)。腰部:沈線波状文2段。底面孔:円 形6個。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部ヘラ 削り。内面:水挽き、回転ヘラ削り。			1 1	男性 不明	成人 成人	墓室 No.6
189		マンガン釉 甕形(蓋)		21.4 15.7 11.0 6.7	①有孔宝珠。つまみ台1段。 ③外面:水挽き、体上部回転ヘラ削り、 体下部回転横ナデ。内面:水挽き。						墓室 No.7
190	図版35	マンガン釉 甕形(身)	Ⅵ E	19.1 23.1 16.0 35.3	①屋門:唐破風形線彫り。 ②横帯凹2・凸1・凹1・凹1。肩部:沈線 波状文。腰部:沈線波状文。底面孔:円 形6個。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部回転 ヘラ削り、内面:水挽き。回転ヘラ削り。 外面の亀裂箇所を漆喰で補修。			1 1	不明 不明	小児 幼児	墓室 No.7



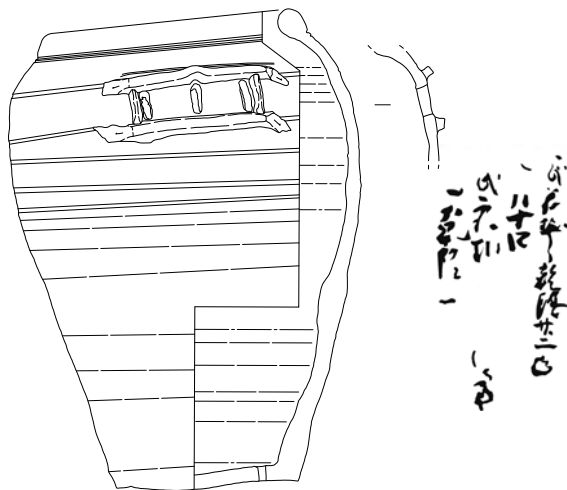
第 36 図 53 号墓 出土遺物・蔵骨器 (1)



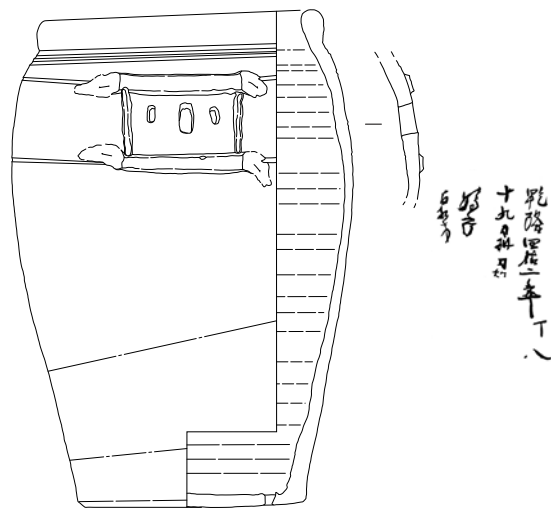
181



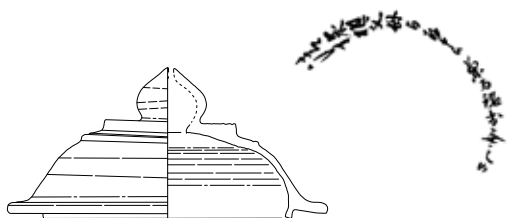
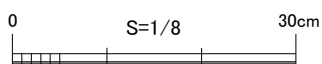
185



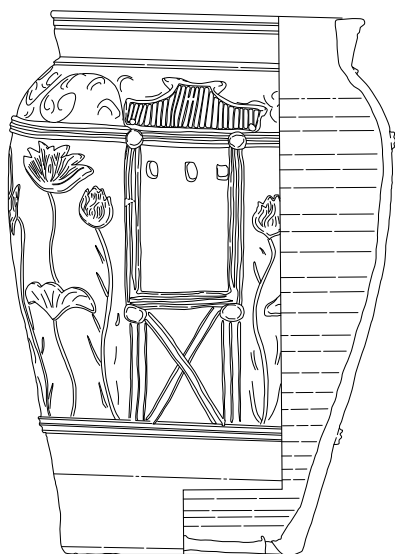
182



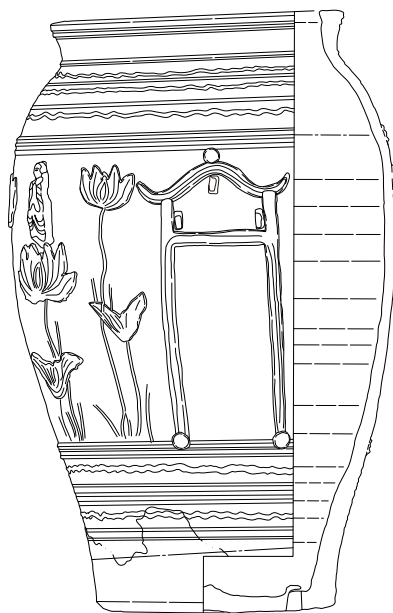
186



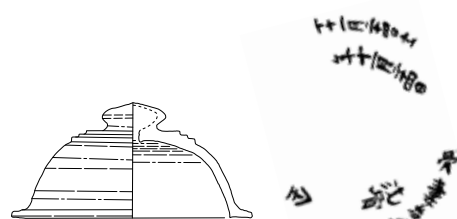
183



184



188



189

第 37 图 53 号墓 藏骨器 (2)

第 20 表 53 号墓出土遺物の観察一覧表

単位:cm
括弧内は残存の寸法

連番	挿図番号 図版番号	器種 残存状況	口径 器高 底径	胎土・露胎 部の色調	釉種	施釉 (範囲、方法)	貫入	観察所見 (成形・調整・施文他)	産地 年代	出土 地点
174	第36図 図版35	皿 胴下～底部 の1/2以下	— — 4.6	混入物無し・ にぶい橙	灰釉	内面は見込を蛇の目 釉剥ぎ。外面無釉。	無	ケズリ高台。高台内 は端から中央に緩や かに盛り上がる。	沖縄産施釉 陶器	墓庭
175		小杯 完形	3.8 2.2 1.7	不明	透明釉 呉須	透明釉は量付を除き 施釉。呉須で外面の 口縁下部から高台際 の間に文様を施す。	無	外面文様は草花文と 連点文で密に廻らす。 型成形。	徳化窯 18c後～19c	墓庭
176		瓶 頸～底部	— — 6.0	混入物無し・ 橙	灰釉 緑灰系	高台内露胎。首上部 は緑灰系の釉、首下 部は灰釉を施す。	無	高台内に付着物。蛇 の目状の浅い削りで 生じた削りカスと思わ れる。	沖縄産施釉 陶器	墓庭



図版 35 53 号墓 出土遺物・蔵骨器

第9節 13号墓

墓は調査区西側の丘陵下段に位置し、東隣に53号墓、西隣に14号墓が所在している。墓口前には崩落土が堆積していて、墓口上部が開いた状態で発見された。

墓口の寸法は、幅0.8 m、高さ1.05 m、羨道の長さは0.45 mを測り、墓口の方位は北北東（N33° E）を向いている。墓口閉塞は積石によるもので、墓口に拳～頭大の石灰岩や砂岩の礫石が半分程残存していた。

墓室は、棚（コ字状）と汁ヒラシからなり、類型の3類aに分類される。墓室の平面形は横長の略方形で、幅2.35 m、奥行き1.95 m、高さ1.15 mを測る。蔵骨器は9点で、棚に6点、汁ヒラシに2点安置していた。1点は墓口近くで横転していたため、蔵骨器の配置図に含めずに取り上げた。蔵骨器は割れているものや蓋が落下しているものもみられたが、身の多くは直立状態を保ち、マド枠や屋門も墓口に向けられていた。また、汁ヒラシのほぼ中央付近に安置されたマンガン釉甕形（第38図の蔵骨器配置図No.1）は、身の底部の周りに配石して蔵骨器を据えており、位置的に門番と判断できる状況からも、特に攪乱された状況はみられなかった。

墓庭は、庭囲いが確認できないため範囲は不明であった。出土遺物は、西隣の14号墓庭との間で検出された土坑内から瓶子（第41図210・211）2点と小杯（212）1点が得られている。

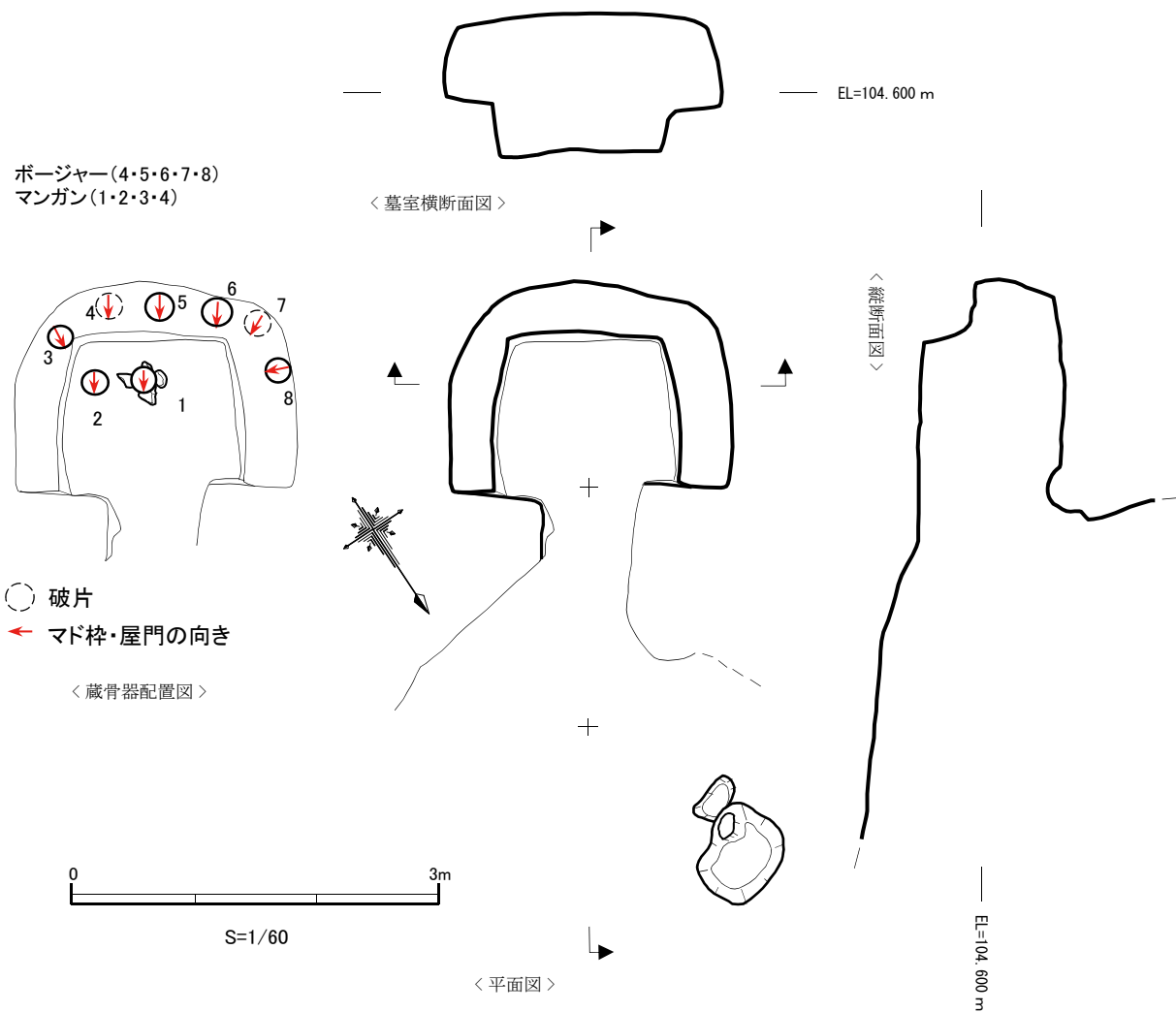
墓の造営年代を明らかにすることはできなかったが、蔵骨器の銘書の古い年代は「乾隆33年（1768年）」で、新しいものは「嘉慶4年（1799年）」が確認されている。また、門番と考えられる蔵骨器No.1の型式（安里編年のマンガン釉甕形Ⅲ式：1810～1850年）を考慮すると、少なくとも19世紀中頃までは墓が機能していたことが窺える。



図版 36 13号墓

1 段目：墓の位置

2 段目左：着手前の墓室 右：墓口の閉塞石検出後



第38図 13号墓 平・断面、蔵骨器配置



図版 37 13号墓

1 段目左：蔵骨器の安置状況 右：墓庭の廃棄土坑
2 段目左：墓室完掘後

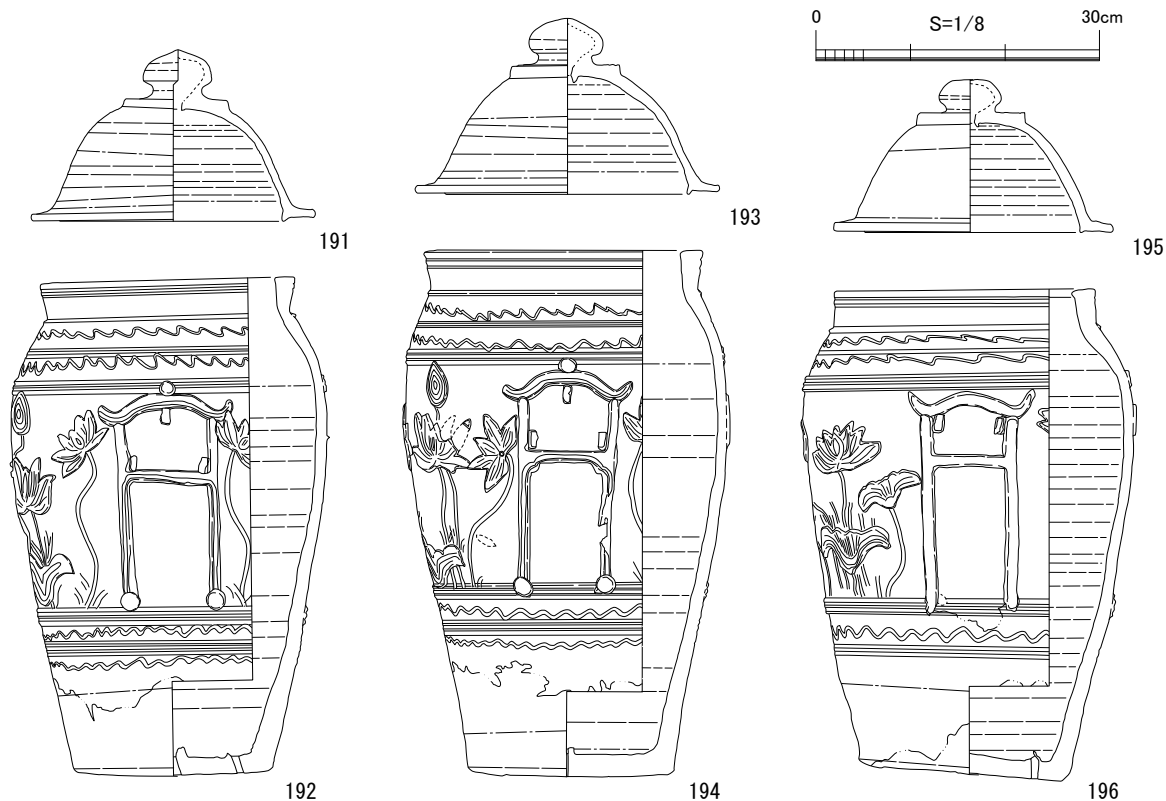
第 21 表 - 1 13 号墓蔵骨器の観察一覧表

連番	挿図番号 図版番号	名称	型式	寸法 (cm)	観察所見 (蓋)①つまみ ②文様・部位等 ③調整痕他 (身)①正面示形 ②文様等 ③調整痕他	銘書	銘書年	被葬者			出土 地点
								人数	性別	年齢	
191	第39図 図版38	マンガン釉 甕形(蓋)		30.2 23.6 18.2 13.0	①有孔宝珠。つまみ台1段。 ②鍔2.8cm。かえり2.8mm。 ③外面:水挽き、回転ヘラ削り。内面: 水挽き。						墓室 入口付近
192		マンガン釉 甕形(身)	Ⅲ B	27.6 33.8 21.9 52.4	①屋門:唐破風形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凸3・凸3。肩部:沈線 波状文2段。胴部:貼付蓮華文(茎は沈 線)。腰部:沈線波状文2段。底面孔:半 月形7個。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部回転 横ナデ。内面:水挽き、肩部に指押さ え痕。外面にマンガン釉を施すが背面は ムラが多く、布状のもので施釉したと推 察される。屋門内は露胎。			1	女性	成年	墓室 入口付近
193		マンガン釉 甕形(蓋)		32.3 25.6 18.7 13.8	①有孔宝珠、つまみ台1段。段上凹2。 ②鍔2.8cm。かえり4mm。 ③外面:水挽き、斜位のヘラ削り。内 面:水挽き。						墓室 No.1
194		マンガン釉 甕形(身)	Ⅲ B	29.5 34.4 22.5 55.8	①屋門:唐破風形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凸3・凸3。肩部:沈線 波状文2段。胴部:貼付蓮華文(茎は沈 線)。腰部:沈線波状文2段。底面孔:三 日月形6個。 ③外面:器面全体に丁寧なナデ、胴下 部ヘラ削り。内面:水挽き。屋門内は露 胎。			1 1	女性 不明	成人 幼児	墓室 No.1
195		マンガン釉 甕形(蓋)		29.7 22.9 16.3 12.8	①有孔宝珠、つまみ台1段。段上凹1。 ②鍔3.0cm。かえり2mm。 ③外面:水挽き、斜位のナデ。内面:水 挽き、台接合部ヘラ削り、ナデ。						墓室 No.2
196		マンガン釉 甕形(身)	Ⅲ B	27.7 35.4 22.4 51.4	①屋門:唐破風形貼付(玉飾り無し)。 ②横帯凹2・凸1・凸3・凸3。肩部:沈線 波状文2段。胴部:貼付蓮華文(茎は沈 線)。腰部:沈線波状文。底面孔:半月形6 個。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部ヘラ 削り、胴部斜位と縦位のナデ。内面:水 挽き、縦位のナデ、屋門内露胎。			1	男性	成人	墓室 No.2
197	第40図 図版38	マンガン釉 甕形(蓋)		28.8 22.2 14.9 9.7	①有効宝珠。つまみ台3段。2・3段目凹 1。 ②鍔2.8cm。かえり6mm。体部:沈線蓮 葉文。 ③外面:水挽き後、体部回転ヘラ削り。 内面:水挽き、台接合部ナデ。	嘉慶四年申十 月十二日玉那 波にや妻	1799				墓室 No.3
198		マンガン釉 甕形(身)	Ⅲ B	27.8 35.2 21.9 53.2	①屋門:唐破風形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凸3・凸3。肩部:沈線 葉文。胴部:貼付蓮華文(茎は沈線)・ 貼付法師像。底面孔:円形6個。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部ヘラ 削り、斜位のナデ。内面:水挽き、縦位 のナデ。口縁内に櫛描状の削り。			1 1	不明 不明	成人 幼児	墓室 No.3
199		ボージャー 形(蓋)		30.8 30.1 9.4 7.0	①無孔宝珠。つまみ台1段。段上凹1。 ③外面:水挽き後、上部ヘラ削り、下部 回転横ナデ。内面:水挽き、上部ナデ。 色調:内外面2.5YR5/8(明赤褐)。	乾隆三拾三丁 亥八月八日洗 骨仲村渠妻真 加戸	洗骨:1768				墓室 No.4
200		ボージャー 形(身)	Ⅲ a	29.0 35.9 21.5 49.1	①マド枠:平葺形貼付・1方2円。 ②横帯凹2。底面孔:円形6個。 ③外面:器面全体にナデ、胴上部回転 横ナデ、胴下部静止ナデ。内面:水挽 き、口縁部回転ナデ。			1	不明	成年	墓室 No.4
201		マンガン釉 甕形(蓋)		28.8 21.7 13.5 9.1	①有孔宝珠。つまみ台1段。 ②鍔3.2cm。かえり6mm。 ③内外面:水挽き、回転ヘラ削り。	咸豊拾一年辛 酉六月五日卒 樽宮里妻同人 洗骨同治十年 七月七日	死去:1861 洗骨:1871				墓室 No.5

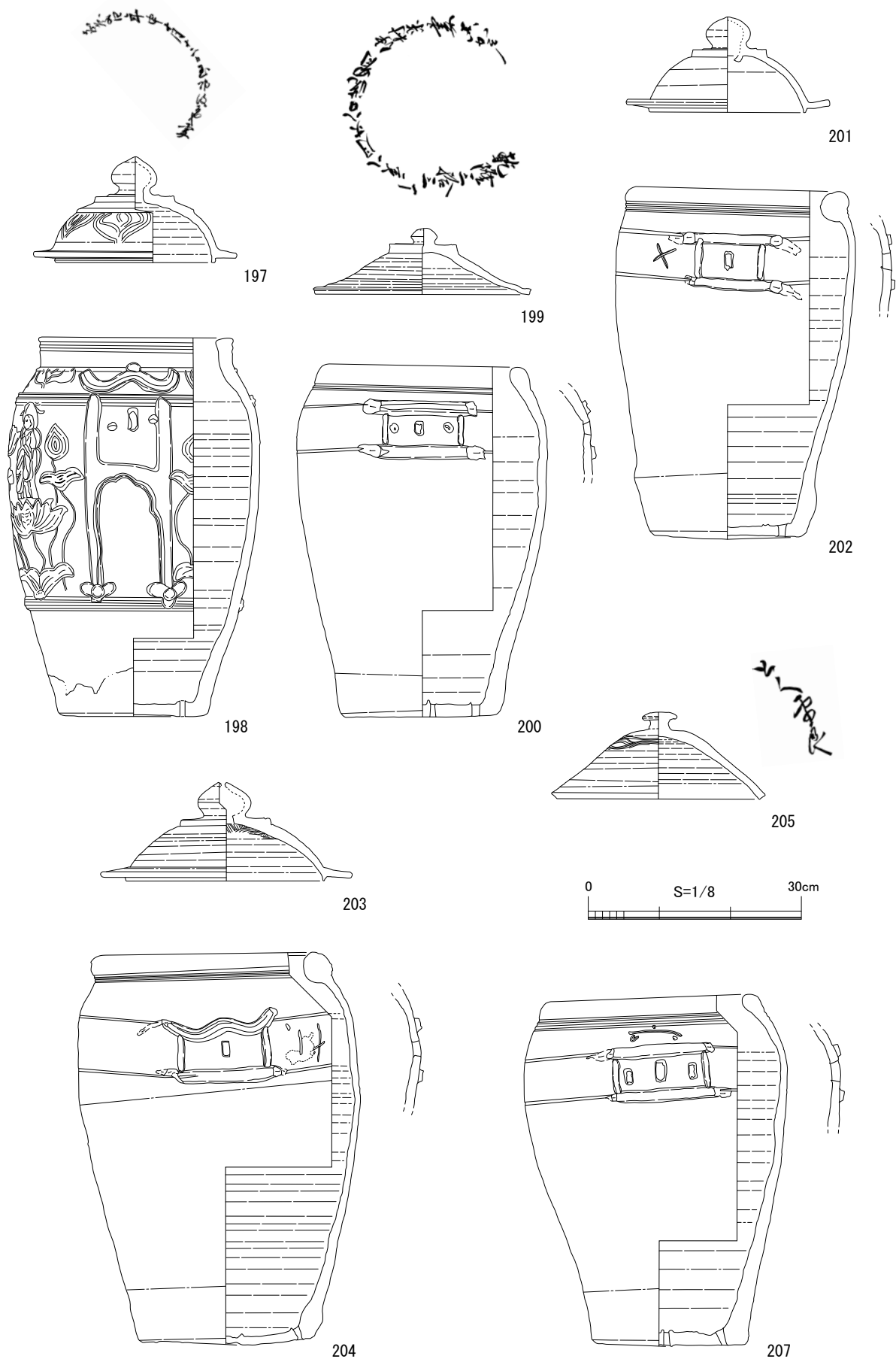
寸法は、ボージャー形・甕形は、蓋が上から外径/内径/器高/体部高、身が上から口径/胴径/底径/器高の数値を記している。
家形・御殿形は、蓋が上から縁部(長辺×短辺)/器高、身が上から口縁部(長辺×短辺)/底部(長辺×短辺)/器高の計測値を記している。

第 21 表 - 2 13 号墓蔵骨器の観察一覧表

連番	挿図番号 図版番号	名称	型式	寸法 (cm)	観察所見 (蓋)①つまみ ②文様・部位等 ③調整痕他 (身)①正面示形 ②文様等 ③調整痕他	銘書	銘書年	被葬者			出土 地点
								人数	性別	年齢	
202	第40図 図版38	ボージャー 形(身)	IV	31.2 34.2 22.4 48.9	①マド枠:平葺形貼付・1方。 ②横帯凹3。判有り。底面孔:三日月形 3個。 ③外面:器面全体にナデ、胴部回転ヘ ラ削り、胴下部ヘラ削り。内面:水挽き、 回転ヘラ削り。			1	不明	成人	墓室 No.5
203		ボージャー 形(蓋)		35.6 27.8 13.9 8.8	①有孔宝珠。つまみ台1段。段上凹1。 つまみ先端部穿孔・孔径6.8mm。 ②鐙3.3cm。かえり7.7mm。 ③外面:水挽き、回転ヘラ削り。内面: 水挽き、台接合部ナデ。色調:外面 2.5YR6/6(橙)。内面2.5YR5/6(明赤 褐)。						墓室 No.6?
204		ボージャー 形(身)	V	34.3 40.4 25.0 54.8	①マド枠:唐破風形貼付・1方。 ②横帯凹3。判有り。底面孔:半月形5 個。 ③外面:器面全体にナデ、胴上部斜位 と横位のヘラ削り、胴下部回転ヘラ削 り。内面:水挽き、回転ヘラ削り。			1	不明	成人	墓室 No.6
205		ボージャー 形(蓋)		30.2 28.6 12.2 9.8	①無孔宝珠。 ②体上部に3~5条の沈線波状文。 ③外面:水挽き、回転ヘラ削り。内面: 水挽き。色調:外面2.5YR5/6(明赤 褐)。内面10YR4/1(褐灰)。	とく■良					墓室 No.7?
206	図版38	ボージャー 形(身)	IV	30.0 35.4 22.0 50.9	①マド枠:平葺形貼付・1方2円。 ②横帯凹3。底面孔:円形6個。 ③外面:器面全体にナデ、回転横ナデ、 底部付近ヘラ削り。内面:水挽き、斜位 のナデ。口縁外面で重ね焼きと推察さ れる色調変化が認められる。						墓室 No.7
207	第40図 図版38	ボージャー 形(身)	IV	31.2 37.8 22.2 49.5	①マド枠:平葺形貼付・1方2方。 ②横帯凹3。判有り。底面孔:円形6個。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部斜位 のヘラ削り、内面:水挽き、回転ヘラ削 り。外面胴部マド枠下の貫入部分が石 灰化する。			1	不明	成年	墓室 No.8



第 39 図 13 号墓蔵骨器 (1)



第40图 13号墓藏骨器(2)

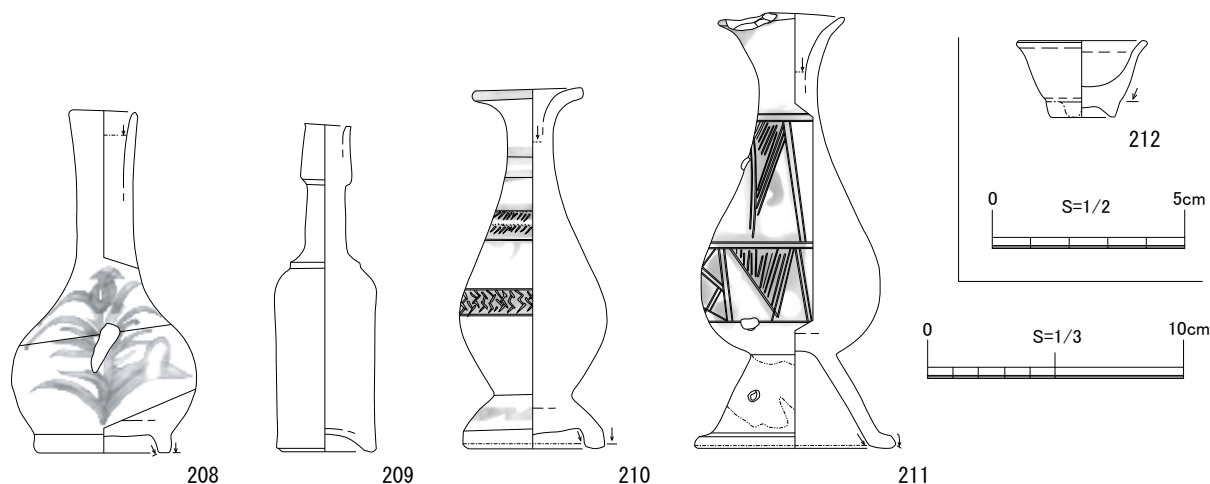


图版 38 13 号墓 藏骨器

第 22 表 13 号墓出土遺物の観察一覧表

単位:cm
括弧内は残存の寸法

連番	挿図番号 図版番号	器種 残存状況	口径 器高 底径	胎土・露胎 部の色調	釉種	施釉 (範囲、方法)	貫入	観察所見 (成形・調整・施文他)	産地 年代	出土 地点
208	第41図 図版39	瓶 完形	2.4 13.4 5.2	不明・浅黄橙	白化粧 透明釉 呉須	白化粧後、透明釉を口 縁内頸部途中から畳 付を除き施釉。外面腰 部に呉須で草花文。	有	外面に溶着物が点在。 畳付にアルミナ？がわ ずかに残る。胴最大幅 の上部を境界に釉厚が 異なる。低高台。	沖縄産施 釉陶器	墓室
209		ガラス瓶 完形	1.8 12.5 3.5	透明				型合わせ成形。		
210		瓶子 完形	4.4 14.1 5.5	不明・浅黄橙	透明釉 呉須	外面は畳付を除き、内 面は口縁内頸部途中 まで施釉。横帯内の飛 鉋には厚透明釉を施 す。	有	飛鉋技法で3本の横帯 文が描かれる。高台内 外に砂付着。高台内中 央は突起する。畳付に アルミナ？がわずかに 残る。	沖縄産施 釉陶器	13号墓～ 14号墓間 土坑内
211		瓶子 ほぼ完形	4.9 17.0 7.8	混入物無し・ 浅黄橙	白化粧 透明釉 呉須 褐釉・鉛 釉系	白化粧後、透明釉を口 縁内頸部途中と畳付を 除き施釉。呉須や褐釉 で文様等を施す。	有	袴状高台。外面頸部か ら腰部に線彫りで幾何 学文様を描き、呉須や 褐釉を施す。外面に陶 器片が溶着。	沖縄産施 釉陶器	
212		小杯 ほぼ完形	3.4 2.0 1.7	混入物無し・ 灰白	透明釉	高台際から高台内を除 き施釉。高台をつま んで浸し掛け。	有	ケズリ高台。高台内中 央はゆるやかに盛り上 がる。	沖縄産施 釉陶器	



第 41 図 13 号墓 出土遺物



図版 39 13 号墓 出土遺物

第 10 節 14 号墓

墓は調査区西側の丘陵下段に位置し、東隣に 13 号墓、西隣に 15 号墓が所在している。該墓は墓口前に崩落土が 1 m 程堆積していて、墓口上部がわずかに開いた状態で発見された。

墓口の寸法は、幅 0.6 m、高さと羨道の長さは 1.2 m で、墓口の方位は北東(N36° E)に開口している。閉塞方法は、墓庭に廃棄された石灰岩や砂岩の礫石の状況から加工及び非加工の積石によるものと推察された。石灰岩を加工した石は墓口幅とほぼ一致する比較的大きな方形状で、砂岩は拳～頭大の自然石であった。

墓室には柵は無く、平面形は台形状で 1 類 b に分類される。墓室の寸法は幅 1.8 m、奥行き 1.4 m、高さ 1.15 m で、蔵骨器を 10 点安置していた。蔵骨器の種別は全てマンガン釉甕形で、破損しているものや蓋が落下しているものもみられたが、ほとんどの身が直立状態を保ち、屋門も概ね墓口に向けられていたため、原位置を保持した状態と判断された。なお、第 42 図の蔵骨器配置図 No.6 ～ 10 は、底部の周りに配石して蔵骨器を据えていた。

墓庭は、庭囲いが確認できないため範囲は不明だが、西側に脇墓(14-2 号墓)が構築されていた。脇墓は天井が崩落していた埋没墓で、内部から一次葬人骨が検出されている。

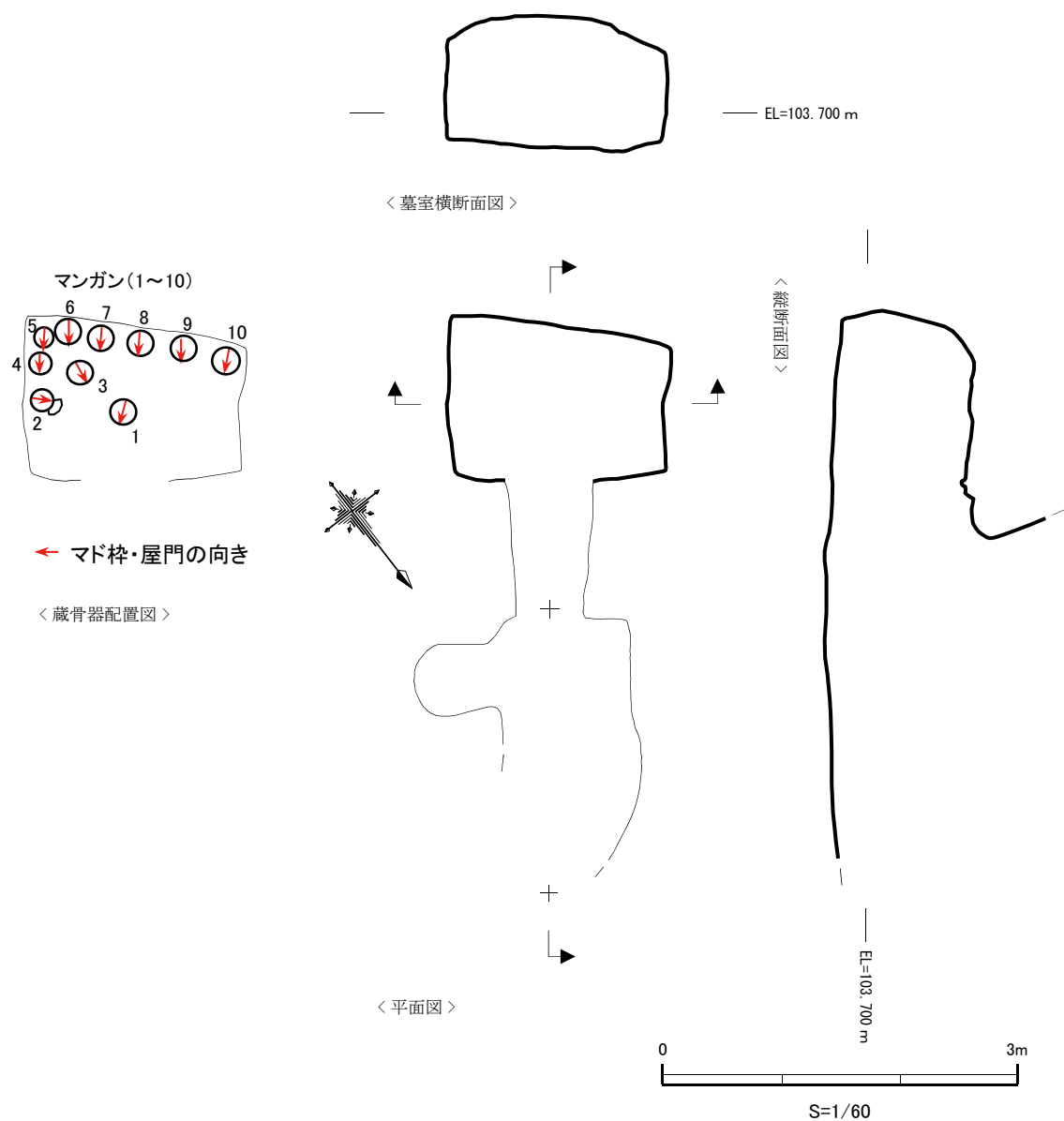
墓の造営年代を明らかにすることはできなかったが、蔵骨器の銘書の古い年代は「光緒 5 年(1879 年)」で、新しい年代は「昭和 19 年」が確認されたことから、少なくとも 1944 年までは墓が機能していたことが窺える。出土遺物は、墓との関連性は断定できないものの墓庭堆積土中から漳州窯産青花皿(16 世紀末～ 17 世紀：第 45 図 233)の底部資料が得られている。



図版 40 14 号墓

1 段目：墓の位置

2 段目左：墓の外観 右：墓室内の蔵骨器安置状況



第 42 図 14 号墓 平・断面、蔵骨器配置



図版 41 14 号墓 墓室内の蔵骨器安置状況

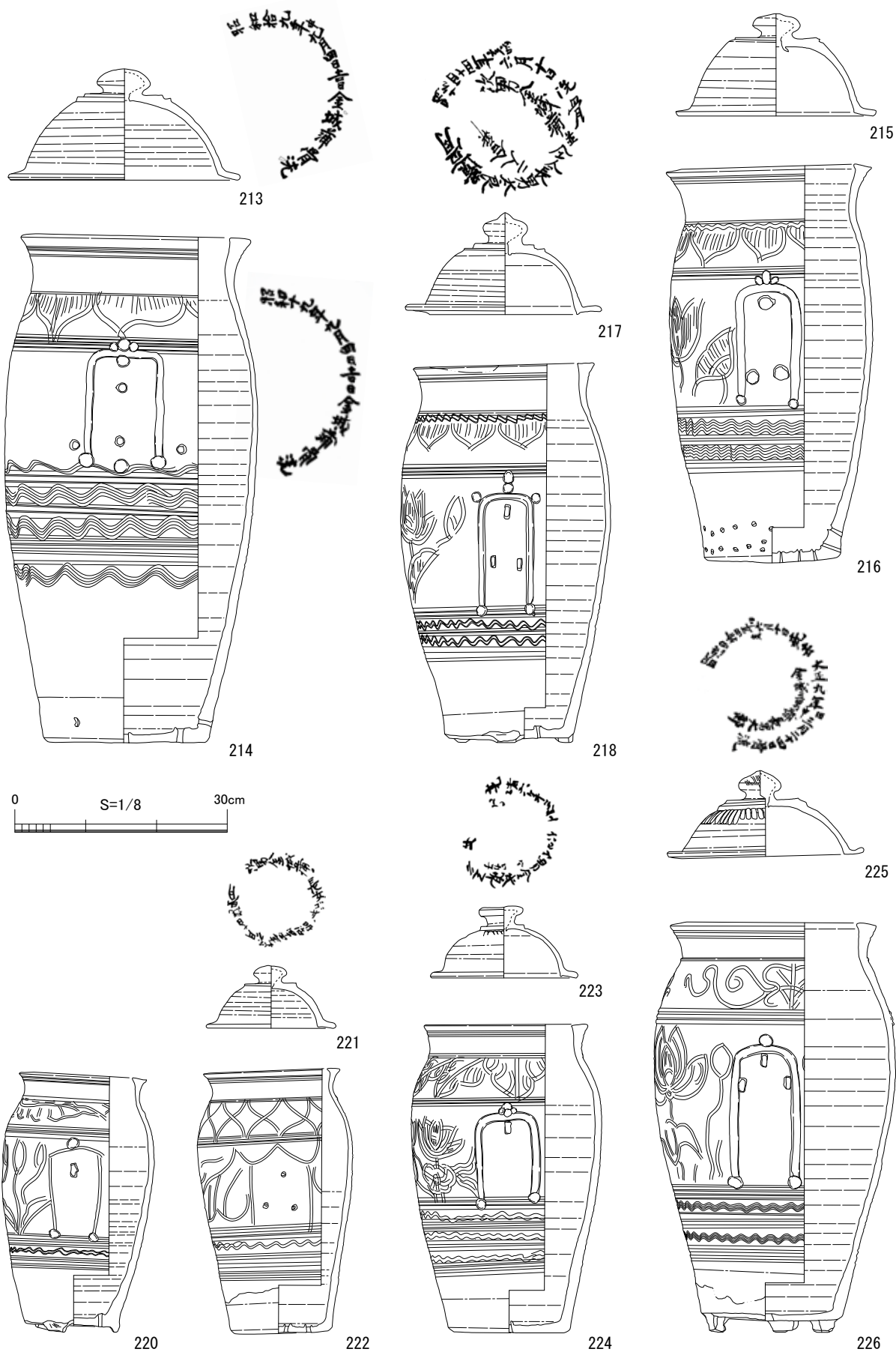
第 23 表 - 1 14 号墓蔵骨器の観察一覧表

連番	挿図番号 図版番号	名称	型式	寸法 (cm)	観察所見 (蓋)①つまみ ②文様・部位等 ③調整痕他 (身)①正面示形 ②文様等 ③調整痕他	銘書	銘書年代	被葬者			出土 地点
								人数	性別	年齢	
213	第43図 図版43	マンガン釉 甕形(蓋)		32.9 26.6 15.8 12.4	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②鏝2.9cm。かえり無し。 ③外面:水挽き、回転ヘラ削り。内面: 水挽き。内外面とも石灰粒が顕著に認 められる。	昭和拾九年申 九月四日吉日 金城蒲骨洗	洗骨:1944				墓室 No.1
214		マンガン釉 甕形(身)	VI D	32.6 35.6 23.6 71.6	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹3・凹1・凹3・凹4。肩部:沈線 蓮葉文。腰部:沈線波状文4段。底面 孔:三日月形12個。底部立ち上がりに 三日月形の穿孔4個。口縁内面に銘書 有り。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部ヘラ 削り。内面:水挽き。	昭和十九年九 月四日吉日金 城蒲骨洗	洗骨:1944	1	男性	成人	墓室 No.1
215		マンガン釉 甕形(蓋)		28.4 22.1 14.5 11.1	①有孔宝珠。つまみ台1段。 ②鏝3.0cm。かえり無し。 ③外面:水挽き、回転ナデ。内面:水挽 き。						墓室 No.2
216		マンガン釉 甕形(身)	V D	29.4 29.1 19.2 55.8	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹1・無し・凹3・凹3。肩部:沈線 蓮葉文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線 波状文2段。底面孔:方形36個。底部立 ち上がりに穿孔52個。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部縦位 と斜位のヘラ削り。内面:水挽き、ヘラ 削り。			1 1	不明 不明	成人 胎児~ 乳児	墓室 No.2
217		マンガン釉 甕形(蓋)		27.8 20.8 14.4 10.1	①有効宝珠。つまみ台2段。 ②鏝2.9cm。かえり3.5mm。 ③外面:水挽き後、体上部回転ヘラ削 り。内面:水挽き。	明治四十四年 亥旧六月十日 洗骨/次男金城 蒲並全人長男 太良遺骨/二人 合葬	洗骨:1911				墓室 No.3
218		マンガン釉 甕形(身)	V D	25.7 30.2 18.7 53.0	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹2・凹1・凹3・凹3。肩部:沈線 波状文。沈線蓮葉文。胴部:沈線蓮華 文。腰部:沈線波状文2段。底面孔:半 月形11個。脚付3個。 ③外面:器面全体にナデ。内面:水挽 き、回転ヘラ削り。			1	女性	成年	墓室 No.3
219	図版43	マンガン釉 甕形(蓋)		22.3 17.1 9.8 7.6	①有孔宝珠。つまみ台1段。 ②鏝2.1cm。かえり1.5mm。 ③外面:水挽き後、上部回転ヘラ削り。 内面:水挽き。	光緒二十二年 丙申九月十日 洗骨/次男蒲金 城長男亀	洗骨:1896				墓室 No.4
220	第43図 図版43	マンガン釉 甕形(身)	V E	18.1 21.7 13.8 36.3	①屋門:アーチ形線彫り。 ②横帯凹2・凹1・凹3・凹4。肩部:沈線 葉文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線波 状文、底面孔:円形7個。脚付3個。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部回転 ヘラ削り。内面:水挽き、回転ヘラ削り。			1	不明	胎児~ 乳児	墓室 No.4
221		マンガン釉 甕形(蓋)		18.4 13.8 8.9 6.3	①有孔宝珠。つまみ台1段。 ②鏝2.3cm。かえり無し。 ③外面:水挽き後、体上部回転ヘラ削 り、下部回転横ナデ。内面:水挽き。	次男金城蒲長 女ゴザ明治四 十四年■月六 月七日洗骨	洗骨:1911				墓室 No.5
222		マンガン釉 甕形(身)	V E	19.3 22.0 14.4 37.2	①屋門:唐破風形線彫り。 ②横帯凹2・凹1・凹3・凹3。肩部:沈線 葉文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線波 状文、底面孔:隅丸方形11個。 ③外面:器面全体に丁寧なナデ、胴下 部回転ヘラ削り。内面:水挽き。			1 1	不明 不明	小児 胎児	墓室 No.5

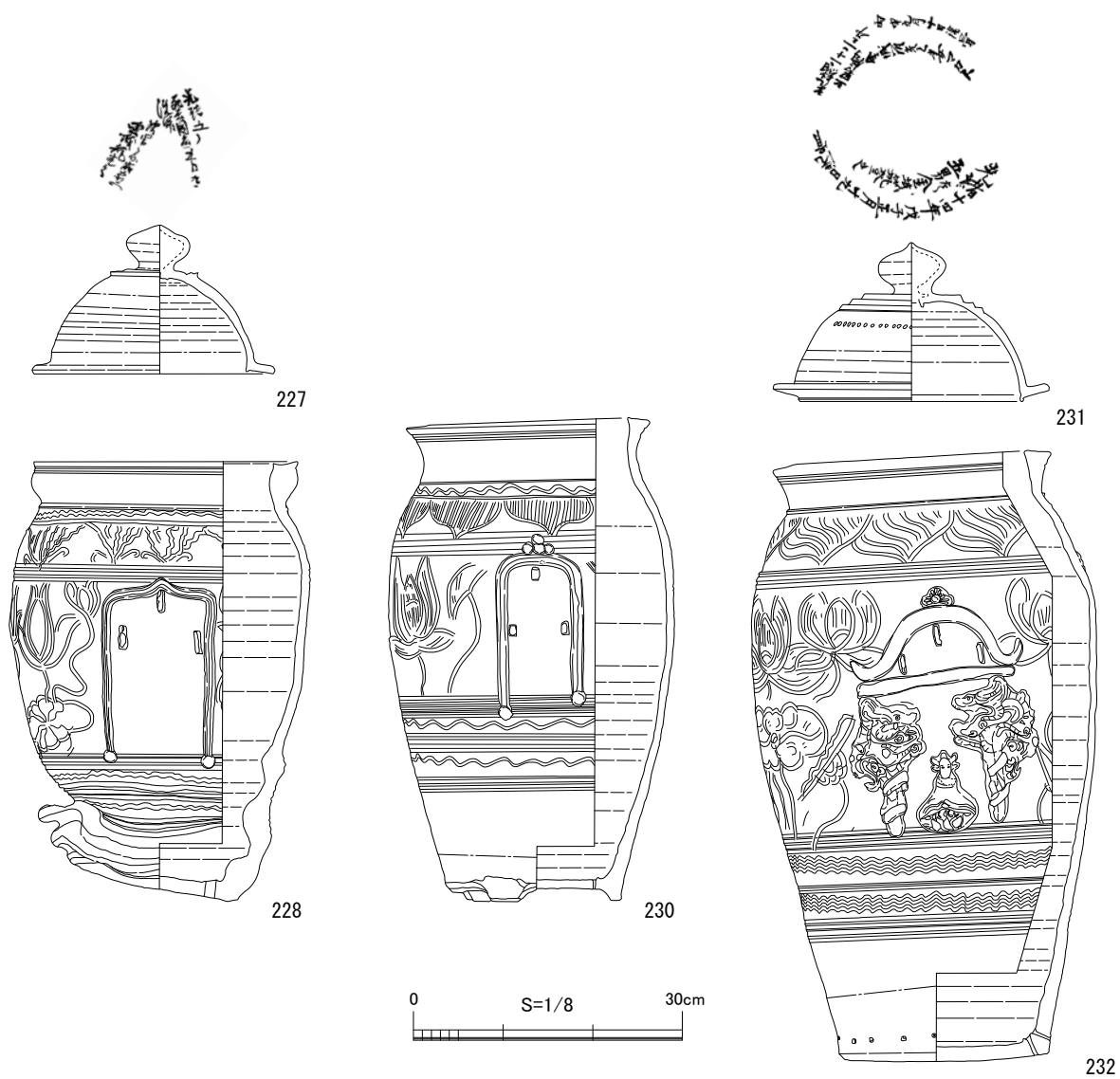
第 23 表 - 2 14 号墓蔵骨器の観察一覧表

連番	挿図番号 図版番号	名称	型式	寸法 (cm)	観察所見 (蓋)①つまみ ②文様・部位等 ③調整痕他 (身)①正面示形 ②文様等 ③調整痕他	銘書	銘書年代	被葬者			出土 地点
								人数	性別	年齢	
223	第43図 図版43	マンガン釉 甕形(蓋)		20.9 16.2 10.2 6.2	①有孔宝珠。つまみ台1段。 ②鏝2.1cm。かえり1.5mm。 ③外面:水挽き、縦位のナデ。内面:水挽き。焼成時の灰かぶりと推察される付着物が多く見られる。	光緒六年辰十 ■[月カ]六日 五男金城筑登 之■■…/女	1880				墓室 No.6
224		マンガン釉 甕形(身)	V D	23.2 27.0 17.4 43.5	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹2・凹1・凹3・凹3。肩部:沈線蓮葉文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線波状文3段。底面孔:円形8個。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部回転ヘラ削り。内面:水挽き、回転ヘラ削り。			1 1	不明 不明	小児 胎児~ 乳児	墓室 No.6
225		マンガン釉 甕形(蓋)		27.9 22.2 12.4 8.3	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②つまみ台下に飛び鉋と推察される縦位のヘラ削りが廻る。鏝2.7cm。かえり無し。 ③外面:水挽き、体上部回転ヘラ削り、体下部回転横ナデ。内面:水挽き。	明治四拾四年 旧亥六月十日 死去大正九年 旧申三月二十 四日骨洗/金城 三男蒲長男太 郎	死去:1911 洗骨:1920				墓室 No.7
226		マンガン釉 甕形(身)	V D	27.8 32.1 19.9 53.5	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹2・凹1・凸3・凹4。肩部:沈線波状文、圈線、沈線蓮葉文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線波状文2段。底面孔:三日月形10個。脚付3個。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部回転ヘラ削り。内面:水挽き、回転ヘラ削り。			1 1	不明 不明	成人 幼児	墓室 No.7
227	第44図 図版43	マンガン釉 甕形(蓋)		29.2 21.0 16.6 11.7	①有孔宝珠。つまみ台1段。段上凹2。 ②鏝2.6cm。かえり2mm。 ③外面:水挽き、体上部回転ヘラ削り、体下部回転横ナデ。内面:水挽き。	光緒五年/死去 同年九月廿二/ 洗骨/次男かな 歳五貳二/金城 筑登之	死去:1879 洗骨: "				墓室 No.8
228		マンガン釉 甕形(身)	IV C	29.5 33.6 18.6 49.1	①屋門:位牌形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凸3・凹3。肩部:沈線波状文、圈線、沈線草文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線波状文2条2段。底面孔:半月形7個。 ③外面:器面全体にナデ、斜位のナデ。内面:水挽き。口唇部と底部で著しい焼き歪みが認められる。			1	男性	成年	墓室 No.8
229	図版43	マンガン釉 甕形(蓋)		30.2 23.2 16.3 11.9	①有孔宝珠。つまみ台1段。 ②鏝3.1cm。かえり2mm。 ③内外面:水挽き。	光緒十年■■■ 十月廿九日加 那金城洗骨	洗骨:1884				墓室 No.9
230	第44図 図版43	マンガン釉 甕形(身)	IV D	29.3 34.2 20.3 57.6	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凸3・凹4。肩部:沈線蓮葉文、胴部:沈線蓮華文、腰部:沈線波状文2段、底面孔:円形6個、脚付3個。 ③外面:器面全体にナデ調整されるが、焼成時の砂等の付着が目立つ、内面:水挽き。			1	不明	成年	墓室 No.9
231		マンガン釉 甕形(蓋)		30.9 24.9 17.8 12.1	①有孔宝珠、つまみ台3段。 ②体上部に長さ4mm×幅3mmの削り(飛び鉋?)を廻らす。鏝3.0cm。かえり4mm。 ③外面:水挽き後、体上部回転ヘラ削り、体下部とつまみ回転横ナデ。内面:水挽き。	光緒十四年戊 子正月十九日 洗骨/五男たら 金城筑登之/光 緒二十二年丙 申九月十四日 洗骨/五男樽金 城筑登之妻マ カト	洗骨:1888 洗骨:1896				墓室 No.10
232		マンガン釉 甕形(身)	V B	31.5 36.5 23.5 67.0	①屋門:唐破風変形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凸3・凹3。肩部:沈線蓮葉文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線波状文2段。底面孔:方形24個。底部立ち上がりに小円の穿孔19個。屋門の門部分を貼付龍柱1対で、屋門内には貼付仏。 ③外面:器面全体にナデ。内面:水挽き。			1	不明	成人	墓室 No.10

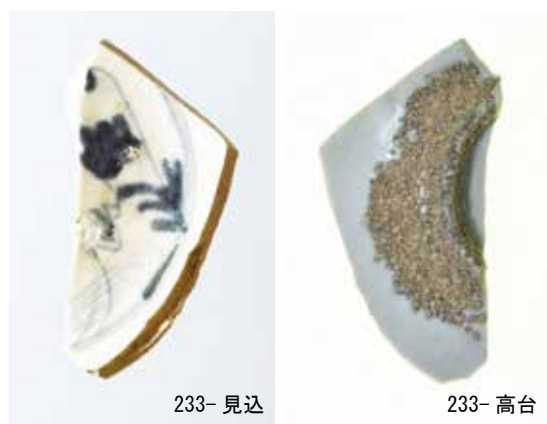
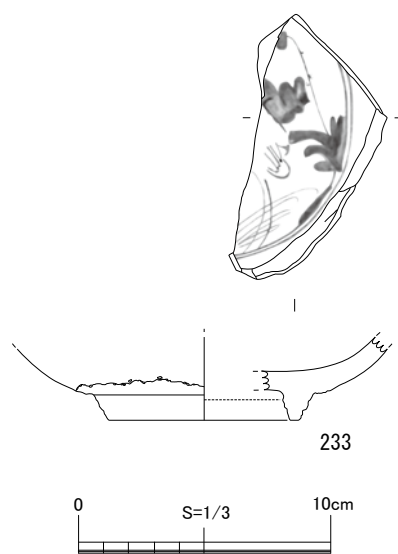
寸法は、ボージャー形・甕形は、蓋が上から外径/内径/器高/体部高、身が上から口径/胴径/底径/器高の数値を記している。
家形・御殿形は、蓋が上から縁部(長辺×短辺)/器高、身が上から口縁部(長辺×短辺)/底部(長辺×短辺)/器高の計測値を記している。



第43图 14号墓藏骨器(1)



第44図 14号墓 藏骨器(2)



図版 42 14号墓 出土遺物

第45図 14号墓 出土遺物



图版 43 14 号墓 藏骨器

第 11 節 17 号墓

墓は、調査区中央付近の丘陵尾根が西側に向かって扇状に広がる緩斜面の途中に所在しており、該墓の庭囲いと 12～14 号墓は同一斜面の南北に造られていた。墓の規模や構築方法は 1・2 号墓とほぼ同じだが、墓庭へ至る参道が長く造られている。調査時には、墓口の半分位まで埋土堆積していたが、墓口は開いており、参道入口側に遺骨の入っていない 11 点の蔵骨器が置かれていた。状況から、遺骨のみを移転して廃棄された墓と判断された。

墓口の寸法は、幅 0.6 m、高さ 0.9 m、羨道の長さは 1.1 m で、墓口の方位は北西（N34° W）を向く。墓口の造り方が特徴的で、羨道の上部及び両側壁の途中を断面 L 字形に成形している。類例からすると板石による墓口閉塞となる事例であるが、周辺からは香炉石も含め未発見で、且つ、墓口下部に石灰岩の積石が 2 段残る状況からすると、積石閉塞の可能性が高いものと考えられた。

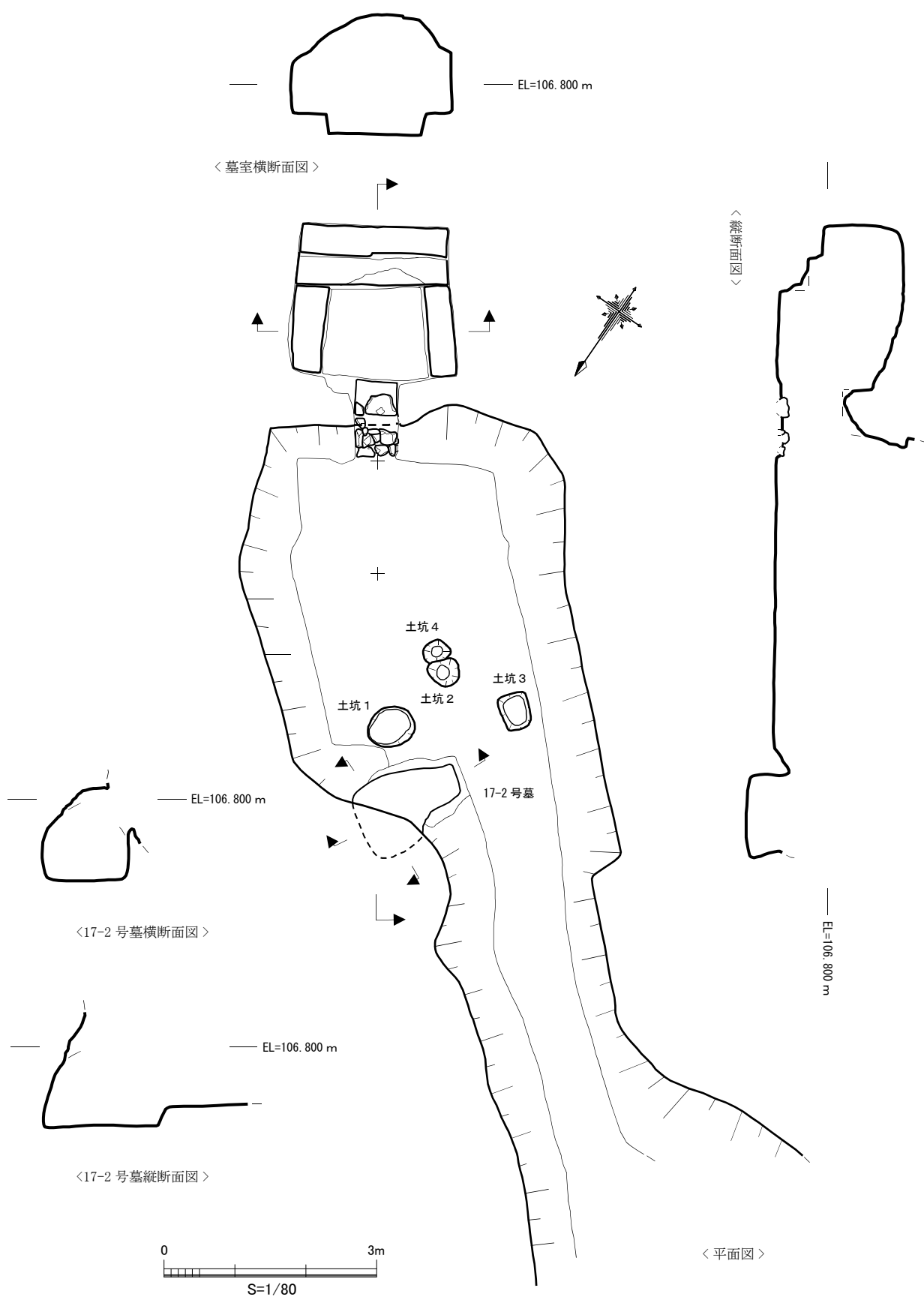
墓室は、棚（コ字状＋1 段）と汁ヒラシからなり、類型の 6 類 b に分類される。平面形は正方形で、幅と奥行きは 2.2 m、高さは 1.8 m を測る。汁ヒラシにやや埋土が堆積している。正面 1 番棚と 2 番棚の縁部が崩れている。特に 1 番棚の縁部は大きく崩れており、修復に使用したとみられる二一石が汁ヒラシで確認された。

次に、墓庭についてみると、基盤砂岩層を成形して構築した土手状の庭囲いがあり、東側の庭囲いの途中には脇墓（17-2 号墓）が造られている。墓庭入口は北東側に造られ、東側の庭囲いと参道は一連のものとして成形されている。墓庭の寸法は 4.4 m × 3.0 m で、参道は長さ 6.0 m、幅 1.0 m を測る。脇墓の寸法は幅 0.6 m、奥行き 1.6 m、残存部の高さ 1.0 m を測る。楕円状の平面形から類型の 1 類 d が想定される。油甕を転用した蔵骨器が 1 点検出されたが、骨の残存状態は不良で判然としない。また、墓庭入口近くでは土坑が 4 基確認されており、2 基の土坑内で遺物が検出された。土坑 1 で瓶子、小杯、煙管（第 48 図 256・258・265・268・269）が、土坑 3 で水注、小碗、瓶、ガラス瓶（第 48 図 260～264・266・267）が出土した。

墓の造営年代を明らかにすることはできなかったが、蔵骨器の銘書の古い年代は「道光 11 年（1831 年）」で、新しいものは「明治 45 年」が確認されており、1912 年までは墓が機能していたことが窺える。



図版 44 17 号墓の位置



第 46 图 17 号墓 平・断面



図版 45 17号墓

1 段目左：除草後 右：埋土除去後

2 段目左：墓口の検出後 右：墓室内検出後

3 段目左：墓庭土坑検出状況 右：土坑3 遺物出土状況

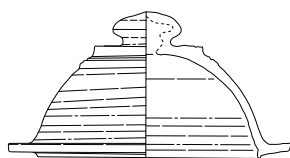
第 24 表 - 1 17 号墓蔵骨器の観察一覧表

連番	挿図番号 図版番号	名称	型式	寸法 (cm)	観察所見 (蓋)①つまみ ②文様等 ③調整痕他 (身)①正面示形 ②文様等 ③調整痕他	銘書	銘書年	被葬者			出土 地点
								人数	性別	年齢	
234	第 47 図 図版 46	マンガン釉 甕形(蓋)		30.0 23.1 15.5 12.0	①有孔宝珠。つまみ台2段。各段凹1。 ②鏝3.0cm。かえり4mm。 ③外面:水挽き、体上部回転ヘラ削り、 体下部回転横ナデ。内面:水挽き。	…向承謙喜納 親雲上朝…/… 年■西九月廿 六月御洗骨/… 向■…納親雲 上朝…					墓庭
235		マンガン釉 甕形(身)	III B	28.2 36.5 23.3 53.2	①屋門:唐破風形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凸3・凸3。肩部:沈線 波状文3段。胴部:貼付蓮華文(茎は沈 線)。腰部:沈線波状文。底面孔:半月 形7個。屋門内に銘書有り。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部回転 ヘラ削り、内面:水挽き。	…承謙喜納親 雲上/…安道光 二十一年/…■ ■廿六日/ 洗骨	洗骨:1841				墓庭
236	図版 46	マンガン釉 甕形(身)	VI	14.6 14.6 11.2 30.0	①屋門:無し。 ②横帯全て無し。胴部:2条1組の沈線 波状文4段。底面孔:円形3個。底部に 重ね焼き痕(トチン痕)。 ③外面:器面全体に回転横ナデ、胴下 部ヘラ削り。内面:水挽き。						墓庭
237		マンガン釉 甕形(身)	VI	21.5 21.9 15.6 38.3	①屋門:無し。 ②横帯凹1・凹1・凹2・凹2。胴部:5条1 組の沈線波状文3段。底面孔:円形9 個。 ③外面:器面全体に回転横ナデ。内面: 水挽き。						墓庭
238		転用・壺 (油甕 身)		11.3 14.5 9.9 16.2	②縦耳4個を肩部に貼付。 ③外面:器面全体にナデ。内面:水挽 き。						墓庭
239		マンガン釉 甕形(身)	IV D	28.3 .35.0 20.7 70.0	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凸3・凹3。肩部:沈線 葉文2段。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈 線波状文2段。底面孔:円形7個。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部回転 横ナデ。内面:水挽き。						墓庭
240		マンガン釉 甕形(身)	IV D	28.0 31.0 17.6 56.1	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹2・凹2・凹3・凹3。肩部:沈線 葉文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線波 状文2条1組2段。底面孔:半月形11個。 脚付3個。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部回転 横ナデ。内面:水挽き。						墓庭
241		マンガン釉 甕形(身)	IV D	32.5 36.0 23.5 70.2	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凹3・凹3。肩部:沈線 葉文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線波 状文3段。底面孔:円形13個。底部立ち 上がり穿孔6個。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部回転 横ナデ。内面:水挽き。						墓庭
242	図版 47	マンガン釉 甕形(身)	V D	27.7 32.6 20.5 55.0	①屋門:アーチ形貼付。 ②横帯凹3・凸1・凹6・凹3。肩部:沈線 葉文。胴部:沈線蓮華文。腰部:沈線波 状文2段。底面孔:円形9個。 ③外面:器面全体にナデ。内面:水挽 き。						墓庭
243		マンガン釉 甕形(身)	III B	29.5 35.8 22.5 53.4	①屋門:唐破風形貼付。 ②横帯凹2・凸1・凸3・凸3。肩部:沈線 波状文2段。胴部:貼付蓮華文(茎は沈 線)。胴部背面:沈線葉文。腰部:沈線 波状文2段。底面孔:円形7個。 ③外面:器面全体にナデ、胴下部回転 ヘラ削り。内面:水挽き。						墓庭
244		マンガン釉 甕形(蓋)		17.2 10.5 6.9 6.3	①つまみ無し。つまみ台1段。 ②鏝2.5cm。かえり無し。 ③外面:水挽き、回転ヘラ削り。内面: 水挽き。						墓庭

第 24 表 - 2 17 号墓蔵骨器の観察一覧表

連番	挿図番号 図版番号	名称	型式	寸法 (cm)	観察所見 (蓋)①つまみ ②文様等 ③調整痕他 (身)①正面示形 ②文様等 ③調整痕他	銘書	銘書年	被葬者			出土 地点
								人数	性別	年齢	
245	図版47	マンガン釉 底付甕形 (蓋)		34.0 26.5 19.0 12.2	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②鏝3.4cm。かえり6mm。つまみ台下貼 付降り棟4、降り棟先端隅頭状突起。屋 根瓦。底下沈線草文。 ③外面:器面全体にナデ。内面:水挽 き。						墓庭
246		マンガン釉 甕形(蓋)		21.5 19.6 8.3 5.5	①有孔宝珠。つまみ台無し。 ②鏝2.9cm。かえり3.5mm。 ③外面:水挽き後、回転横ナデ。内面: 水挽き。						墓庭
247		マンガン釉 甕形(蓋)		33.0 26.0 16.2 12.6	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②鏝4.1cm。かえり無し。 ③外面:水挽き後、回転横ナデ。内面: 水挽き、台接合部ナデ。						墓庭
248		マンガン釉 甕形(蓋)		29.0 22.3 12.7 10.2	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②鏝3.2cm。かえり無し。 ③外面:水挽き後、体上部回転ヘラ削 り、体下部回転横ナデ。内面:水挽き。	…二十三日洗 骨					墓庭
249		マンガン釉 底付甕形 (蓋)		32.5 25.0 19.2 13.7	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②鏝3.4cm。かえり6mm。つまみ台下貼 付降り棟4、降り棟先端隅頭状突起。屋 根瓦。底下沈線草文。 ③外面:器面全体にナデ。内面:水挽 き。	…同人嫡 子…					墓庭
250		転用 (蓋)		15.6 3.8	①無し。 ③外面:水挽き、つまみ接合部ナデ。内 面:水挽き。	光緒十五年■ 丑二月…死去 同貳年癸巳八 月十六日洗骨/ 三男…男子	死去:1889 洗骨:1893 ※癸巳=光 緒19年				墓庭
251		マンガン釉 甕形(蓋)		27.6 21.0 13.4 10.2	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②鏝2.9cm。かえり2.5mm。 ③外面:水挽き、体上部回転ヘラ削り、 体下部回転横ナデ。内面:水挽き、つま み接合部ヘラ削り。	光緒十九年■ ■日死亡… 月廿二…/喜納 朝■光緒十九 年巳正月天■ ■/光緒廿三 年酉九月廿二 日/明治卅年■ 月十七日洗骨	死去:1893 洗骨:1897 ※光緒23= 明治30				墓庭
252		マンガン釉 甕形(蓋)		21.2 17.5 10.0 7.0	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②かえり無し。 ③内外面:水挽き。	■年旧七月 四日天■/昭和 三年八月十日 洗骨	洗骨:1928				墓庭
253		マンガン釉 甕形(蓋)		22.6 16.5 10.7 7.9	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②鏝2.9cm。かえり無し。 ③外面:水挽き、体上部回転ヘラ削り、 体下部回転横ナデ。内面:水挽き、台 接合部ナデ。						墓庭
254		マンガン釉 甕形(蓋)		29.3 22.6 14.3 10.7	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②鏝2.3cm。かえり2mm。 ③外面:水挽き後、体上部回転ヘラ削 り、体下部とつまみ回転横ナデ。内面: 水挽き、台接合部ヘラ削り。	〈欠〉十二世向 承謙喜納親雲 上朝庸繼室真 ■〔鶴カ〕〈欠〉/ 六月二日死同 十三年甲〈欠〉 洗骨	洗骨:1874				墓庭
255		マンガン釉 甕形(蓋)		29.5 23.6 15.9 12.0	①有孔宝珠。つまみ台2段。 ②鏝2.9cm。かえり4mm。 ③外面:水挽き後、体上部斜位のヘラ 削り。内面:水挽き。	向■〈欠〉■納 里之子親雲上 朝武道光十一 年辛卯〈欠〉三 月十三日洗■/ …十年七月七 日死同十〈欠〉 洗骨	洗骨:1831				墓庭

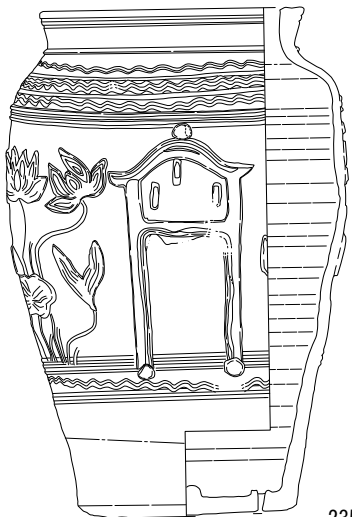
寸法は、ボージャー形・甕形は、蓋が上から外径/内径/器高/体部高、身が上から口径/胴径/底径/器高の数値を記している。
家形・御殿形は、蓋が上から縁部(長辺×短辺)/器高、身が上から口縁部(長辺×短辺)/底部(長辺×短辺)/器高の計測値を記している。



234



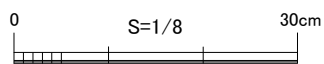
234



235



永祿寺納經堂
壬子年
清齋



235

第 47 图 17 号墓 藏骨器



236



237



238



239



240



241

图版 46 17 号墓 藏骨器 (1)

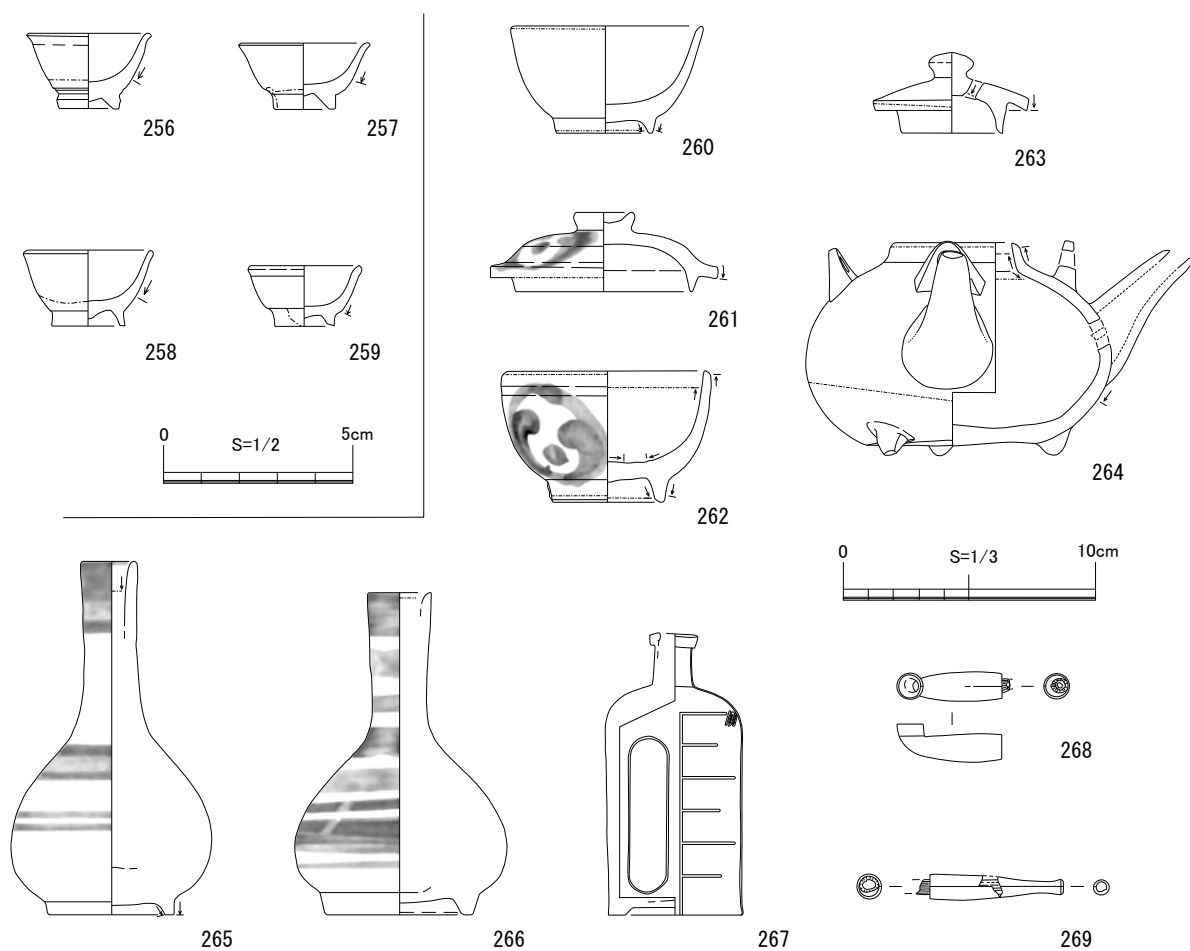


图版 47 17 号墓 藏骨器 (2)

第 25 表 17 号墓出土遺物の観察一覧表

単位:cm
括弧内は残存の寸法

連番	挿図番号 図版番号	器種 残存状況	口径 器高 底径	胎土・露胎 部の色調	釉種	施釉 (範囲、方法)	貫入	観察所見 (成形・調整・施文他)	産地 年代	出土 地点
256	第48図 図版48	小杯 ほぼ完形	3.0 1.6 1.6	混入物無し・灰白	透明釉	高台際まで施釉。高台をつまんで浸し掛。	無	口縁下に沈線1条。ケズリ高台。高台内中央はわずかに盛り上がる。	沖縄産施釉陶器	墓庭土坑1
257		小杯 完形	3.4 2.0 1.9	不明・灰白	透明釉	外面腰部まで。高台をつまんで浸し掛。	無	高台際を削る。高台内中央は突起状に盛り上がる。	沖縄産施釉陶器	脇墓内
258		小杯 完形	3.5 1.75 1.7	不明・灰白	透明釉	外面腰部まで施釉。高台をつまんで浸し掛。	有	ケズリ高台。高台内中央はわずかに盛り上がる。	沖縄産施釉陶器	墓庭土坑1
259		小杯 完形	3.3 2.0 1.6	不明・灰白	透明釉	外面腰部まで施釉。	無	高台際を2mm幅で削る。高台内中央はやや盛り上がる。	沖縄産施釉陶器	脇墓内
260		小碗 ほぼ完形	7.7 4.25 3.9	混入物無し・にぶい橙	白化粧透明釉 灰オリーブ系	白化粧後、内面は透明釉、外面は量付けを除き灰オリーブ系の釉を施す。	有	見込に付着物多数。付着物の中には点状の呉須も見られる。外面に明瞭なケズリ痕が残る。	沖縄産施釉陶器	墓庭土坑3
261		蓋 ほぼ完形	9.0 3.1 6.8	混入物無し・黄灰	白化粧透明釉 呉須	外面は白化粧後、透明釉を施す。呉須で文様を描く。内面は薄い白化粧土を浸し掛か。	有	外面に三つ巴を2対、対極配置する。	沖縄産施釉陶器 262とセット	墓庭土坑3
262		碗 ほぼ完形	7.9 5.2 4.4	混入物無し・浅黄橙	白化粧透明釉 呉須	白化粧後、透明釉、呉須の順で施釉。内面は口縁下と見込を釉剥ぎ。見込は蛇の目。外面は量付けを釉剥ぎ。	有	外面に呉須で三つ巴を2対描くが対極にならない。内面にも呉須が点状に付く箇所がある。高台外面に溶着物。	沖縄産施釉陶器 261とセット	墓庭土坑3
263		急須・蓋 完形	6.1 3.2 4.0	不明・にぶい橙	白化粧瑠璃釉	内面は白化粧。外面は瑠璃釉。鏝の先端部のみ露胎。	無	蓋の空気孔は外側から内側に、施釉前に実施。	沖縄産施釉陶器 264とセット	墓庭土坑3
264		急須・身 ほぼ完形	4.6 8.45 6.7	混入物無し・淡橙	白化粧透明釉 瑠璃釉	内外面に白化粧後、内面は透明釉、外面は腰部まで瑠璃釉を施す。	有	3足のツケ高台で、足の大きさは小指先程。	沖縄産施釉陶器 263とセット	墓庭土坑3
265		瓶 ほぼ完形	2.1 14.05 5.0	混入物無し・浅黄橙微粒子	白化粧透明釉 呉須 褐釉・飴釉系	白化粧後透明釉を、内面が頸部途中まで、外面は量付け除き施釉。量付け除き。口縁から胴部に轆轤で呉須と褐釉を不定間隔で施釉する。	有	口唇部に欠損箇所(打割による可能性あり)。呉須と褐釉で横線文を描く。	沖縄産施釉陶器	墓庭土坑1
266		瓶 ほぼ完形	2.55 12.8 5.8	不明・橙	白化粧 呉須 褐釉・飴釉系	白化粧後、口縁から腰部にかけて呉須、褐釉を不定間隔且つ白化粧を残しながら施釉。轆轤利用の施釉か。	有	15本の帯状の施釉文様となる。胴上部に小指程の楕円文を呉須で施すが、ほぼ上方に呉須の釉垂れがあるため、意図的かどうかは不明。量付けにアルミナが残る。	沖縄産施釉陶器	墓庭土坑3
267		ガラス瓶 完形	2.4 11.2 5.4	透明				薬瓶か。正面に凸帯の目盛とネーム用スペース、側面にも凸帯があり、型製作によるものと思われる。		墓庭土坑3
268		煙管(雁首) 完形	火皿 1.0 羅字 1.0 全長 4.2					火皿に継ぎ目が残る。銅製で重さは5.68g。緑青付着。		墓庭土坑1
269		煙管(吸口) ほぼ完形	吸口 0.4 羅字 1.0 全長 5.3					真ん中に継ぎ目が残る。銅製で重さは4.18g。緑青付着。		墓庭土坑1



第 48 图 17 号墓 出土遺物



図版 48 17 号墓 出土遺物

第 26 表 - 1 前田真知堂B丘陵出土人骨の観察一覧表

墓番号	出土地点	蔵骨器 NO.	報告書 連番	保存状態	残存 状態	釘	老年			老 熟	熟年		熟 成	成年		
							女性	男性	不明		女性	男性		女性	男性	不明
1	墓室	2	1	△	△											
		4	1	△	×							1				
		5	6	△	×											1
	脇墓1	一次葬人骨		×	×	○										
	墓室シルヒラシ			×	×											
1 脇墓2	埋没蔵骨器		5	△	×	○										
	墓室	2	4	△	×	○										
6	墓室	1		×	×											
7	墓室	1		×	×											1
		2	102	○	×									1		
		3	104	○ ×	×											1
		5	108	×	×											
		6	110	×	×											
		8	114	×	×											
		10	117	×	×											
		一括取上げ		×	×											
		堆積土		×	×											
	墓室堆積土			×	×											
8	墓室堆積土	一括取上げ		○	×											
	墓室			○	×											
9	墓室	1	125	○	×											
		2	123	×	△									1		
10	墓室	門番?	135	○	○											1
		門番?	135	○	×								♀1			
		1	137	△	×						1	1				
		4	143	×	×											
				×	×											
				×	×											
11	墓室	2 (油薺)	151	○	○											
		2 (油薺)	151	×	×											
		1	149	○ (乾燥)	○											
		3	153	△	○											
		4	155	○	△											
		5	157	×	×											
		5	157	×	×											
		6	159	×	×											
		7	161	×	×											
		8	163	○	△											

成人			未 成人	若 年	小 児	幼 児	乳 児	誕生 前後	備考
女性	男性	不明							
1									上腕骨に骨折痕。細いが全身の筋肉発達。
									腰椎と仙骨に骨棘。足の基節骨に変形あり。
		1							大腿骨の粗線発達度に差あり。
				1					頭蓋骨：縫合解離。四肢骨：細い。小臼歯：歯根は完全（擦り減り無し）。かんざしの玉か。
		1							詳細不明。
					1	1			未癒合骨端＋小臼歯歯根：15才未満。未萌出I：3才頃。
1	1		1			1			メインは女性骨か。男性の頭蓋骨風化する。
		1						1	どちらも少量。誕生前後：未萌出第1乳旧歯よりたぶん生まれていたと思われる。
									ごく少量の成人骨細片。歯はほとんど磨り減っていない。
									Fe・Hum骨頭に骨端線残る。やや妊娠痕とやや仙骨丸い。
		1							若い印象の四肢、第一肋骨。全く違う乾燥してボロボロの四肢骨→もう1人か。
		1						1	あるいは妊娠後期の女性と胎児か。
	1								Fe・Hum・Tiのサイズから男性か。
		1							少量の骨片のみ。詳細不明。
		1							詳細不明。
	1								Fe(1)のみ：粗線発達。
1									大腿骨のサイズより。
		1							四肢骨片のみ。
1	1					1			寛骨（3体分）、ごく少量の骨片。
1									顔面のみ。十字縫合。上顎第1大臼歯：Broca2度。
		2			1				3体分混在。未癒合骨端からほぼ若年の小児。
									第3大臼歯：歯根不完全。第1中足骨：骨端癒合しかけ。
									推定身長：Ti→159cm、Hum→157cm。
									奥歯抜歯。前歯の擦り減り。
		1							熟年男女の筋肉発達に大きな差なし。
						2			永久歯の未萌出状態に約半年の差があり。
						1			少量の骨片。歯、椎弓、四肢片。
1									ごく少量の成人骨細片。詳細不明。
					1	1			小児の全身2体分：歯より5～6才と11～12才。
						1	1		詳細不明。
							1	1	2体分のほぼ全身あり。梅毒かは不明。
	1								ほぼ全身揃う。距骨と踵骨の間に豆骨。胸椎13個。
	1								下顎第1第2大臼歯の歯槽閉鎖、犬歯はほとんど擦り減り無し。
		1							少量。
		1							詳細不明。
		1							少量の成人骨。
					1				未萌出永久歯：ストレスマーカ－ひどい。四肢骨あり。
1	1								太い方のTi(1・r)に骨膜炎。女性は成年、男性は熟年か。

第 26 表 - 2 前田真知堂 B 丘陵出土人骨の観察一覧表

墓番号	出土地点	蔵骨器 NO.	報告書連番	保存状態	残存状態	釘	老年			老 熟	熟年		熟 成	成年		
							女性	男性	不明		女性	男性		女性	男性	不明
11	墓室	8	163	△	×	○			1							
		9	165	×	×											
		10	167	×	×											
		11	169	×	×											
		12	171	×	×											
		13	173	×	×											
13	墓室	1	194	成人× 幼児△	×											
		2	196	×	×											
		3	198	×	×											
		4	200	× (乾燥)	×											1
		5	202	×	×											
		6	204	×	×											
		8	207	×	×											1
		入口付近	192	△	×									1		
14	墓室	1	214	○	○											
		2	216	成人× 誕生前後○	×											
		3	218	× (乾燥)	×									1		
		4	220	○	○											
		5	222	○	×											
		6	224	○	○											
		7	226	×	×											
		8	228	△	×										1	
		9	230	× (乾燥)	×											1
		10	232	×	×											
35	墓庭堆積土	墓庭10		△	○											
44 (旧279)	墓庭 (外) 堆積土			△	×											
53	墓室	1	178	△	△						1				1	
		2	180	×	×											
		3	182	×	×											
		4	184	×	×											
		5	186	×	×											
		5	186	× (乾燥)	×									1		
		6	188	△	×											
		6	188	○	×											
		7	190	○	○											
		7	190	×	×											
表採	ガジュマル下			○	△											
合計									1		1	2	♀1	5	3	6

成人			未 成 人	若 年	小 児	幼 児	乳 児	誕生 前後	備考
女性	男性	不明							
1	1								下部胸椎3ヶ所：ひしやげと癒合→脊椎カリエスカ。
		1							Fe：細いが発達。上顎歯：ほとんど擦り減り無し。
	1								椎体にやや骨棘。
						1			未萌出歯より5～6才。
1					1		1		踵のサイズより女性。乳児：歯、四肢、椎体。小児：未萌出歯、Fe、寛骨、椎体。
	1								大腿骨と踵：サイズ大。
1						1			幼児は坐骨のみ。
	1								サイズと外後頭隆起より。
		1				1			少量の骨片。成人：虫歯多。
									第3大臼歯：歯根形成途中→20才前後。
		1							ごく少量の成人骨細片。詳細不明。
		1							詳細不明。
									ごく少量の成人骨細片。歯にはストレスマーカー無し。
									少量の成人骨：椎体きれい、縫合解離。
	1								胸に病変？成人だが頭蓋骨薄い。
		1						1	成人：大腿骨片、骨片のみ。誕生前後：ほぼ全身。梅毒か。
									踵骨に足袋の留め具付着。歯はほとんど揃っており、ほとんど擦り減り無し。
								1	ほぼ全身。
					1			1	1才未満のFe・Ti：梅毒か？。小児のTi：病変か。
					1			1	誕生前後は梅毒の可能性あり。10才頃のほぼ全身：鉄欠乏症の痕。歯のストレス痕ひどい。
		1				1			Fe：大きいあまり発達せず。上顎歯：ほとんど擦り減り無しだがストレスマーカーひどい。幼児：未萌出第一大臼歯より1.5～2才。歯のみ。
									Ti：病変か？サイズ大、筋肉発達。
									大臼歯：咬頭間虫歯多。
		1							椎体にやや骨棘。
1									骨は細いが筋肉発達か。
1				1					上腕骨(1)×2：2本とも未成人ぐらい細いが歯の咬耗度に差あり。
									太いが筋肉は普通に発達。腰椎どれも骨棘。
		1							少量の骨片。風化すすむ。
		1							ごく少量の成人骨細片。詳細不明。
1						1			幼児：未萌出上顎小臼歯より3～4才。
		1							細片のみ。詳細不明。
					1				Fe下端Ti上部Hum下端：非常に大きい。椎体：未成人（サイズから男性）。
		1							胸椎に癒合が見られ、脊椎いずれもが荒れがひどい。→病変。
	1								Ti下端：蹲踞あと強い。
					1				永久歯の歯根の形成状態より6～7才。眼窩に鉄欠乏症の痕。
						1			詳細不明。
						1	1		幼児のほぼ全身：3～4才。未萌出乳犬歯・乳旧歯：9ヶ月頃。
13	13	25	1	2	9	15	4	7	108〔成人（女性：20、男性：18、不明32）、未成人38〕→未成人の割合54%

第5章 総括

前田真知堂B丘陵では、今回報告した11基以外に平成15年度に14基を調査し、そのうち6基の墓の調査成果を報告している。第27表は、平成16年度までに調査した墓延べ54基について整理したものである。墓域の形成や各墓の築造年代をはじめ、戦争遺跡としての墓利用を考えるうえで丘陵全体の状況を把握する必要があるため、過年度分の状況も併せて報告し、まとめとしたい。

1. 遺跡の立地

前田真知堂B丘陵は南東―北西を軸とする細長い丘陵であり、平地からの標高差が5m程度の低い小丘で一帯ではよくみられる丘陵の形態である。この丘陵斜面に掘り込まれた墓は、横並びに一段ないし、部分的には二段に渡って造営されている。該地の土質は細粒砂岩が主体であるが、丘陵の中位に斜行する層厚1.5m程の第三紀泥岩層を挟み互層となっている。墓は、泥岩層に直接掘り込むことを避け、下位の細粒砂岩層を選んで造られている。よって、泥岩層に添って墓も高位から低位へ斜め一列に造営されている。また、同様のことは墓の前面にあたる庭の造成にも影響を与えており、特に北側斜面の墓は庭にあたる平場を複数の墓で共有しているが、泥岩層に規制されて庭もゆるやかに傾斜している。そのため、平場の途中ごとに階段状の段差を設けて各墓と平場の共用を維持していたものとみられる。

各墓の立地を墓口方位でみると、北東21基、南西10基、北9基、北西7基、南東4基、南2基、西1基となっていて、東に開口する墓が見られないのは、南東―北西方向に延びる丘陵地形となっているため、実際には丘陵のほぼ全方位に墓が造営されている。方位に規則性が認められないことから、地形的な制約を受けながら墓が造営されたものと推察される。

2. 遺構の特徴と墓域の形成について

該丘陵で本発掘調査した墓39基（脇墓6基含む）と範囲確認調査で確認された遺構15基の特徴についてみると、墓室類型の1類19基、3類13基、4類7基、5類2基、6類5基が確認され、ほかにも壕3基と不明遺構3基、戦後に造られたコンクリート墓2基が確認された。以下で、墓室類型別に整理し、立地状況と併せて検討していくこととする。

1類は、墓室面積が2～4㎡のa・b型と、1㎡程のc・d型に大別できる柵の無い墓である。墓室面積が比較的広く複数の蔵骨器を安置するa・b型が7基（9・11・14・30・34・52・54号墓）、棺箱または蔵骨器を1点のみ安置するc・d型が12基（1脇1・1脇2・10・14－2・17－2・20・24・25・33・40・54－2・55－2号墓）確認された。a～d型は、墓室の平面観で不定形、方形、縦長方形、横長方形と細分しており、特にc・d型の造墓の際には一次葬人骨の頭位が影響しているものと推察している。また、墓を使用形態別でみるとa・b型は家族墓、c・d型は個人墓（20・24・25・33・54－2・55－2号墓）として捉えられる。ただし、c・d型については本墓に付随して造られた脇墓（1脇1・1脇2・14－2・17－2・40号墓）や、個人墓を拡張して家族墓にした10号墓のような墓もみられ、その発生過程や原因等の解明については不明な点が多く、近世の葬墓制を考えるうえで課題が残る。該丘陵での立地場所についてみると、脇墓を除き、北側下段で横並びする墓と墓の間や北西から南西側に点在する状況が確認された。

3類は、墓室面積が2～5㎡程の柵の有る墓で、墓室の平面観でコ字形（a・b型）とL字形（c型）に分類される。コ字形は側柵と正面柵が平坦になるa型と、段差が付くb型がある。該丘陵では

第 27 表 前田真知堂B丘陵 遺構観察一覧表

墓番号	墓室 類型	調査 年度	墓室面 積(m ²)	墓室 (m) 高さ/幅/奥行			墓口 方位	備考
1 号墓	3c	14	6.30	1.9	2.8	2.25	北東	墓室汁ヒラシ埋土中から蔵骨器片（4点分）出土。汁ヒラシで一次葬人骨検出。西側の庭囲い部分に小規模な墓が2基造られている。
1 脇墓1	1c	14	0.74	1.2	0.6	1.24	南東	棺箱台石4個。台石はニービ石、石灰岩塊を使用。一次葬人骨の残存状態が不良のため頭位は不明。閉塞方法も不明。検出時の墓口は埋もれていた。
1 脇墓2	1c	14	0.42	0.9	0.6	0.7	南東	人骨を伴う蔵骨器が破片で出土。墓口は埋もれていて閉塞方法は不明。
2 号墓	6b	14	6.25	1.9	2.5	2.5	北東	墓庭に蔵骨器を19点廃棄。墓庭入口側で副葬品の廃棄土坑を2基検出。
3 号墓	4b	14	3.60	1.6	1.8	2.0	北	羨道に排水溝を構築する。
4 号墓	5b	14	7.00	2.2	2.5	2.8	北	サンミデーを縁石と埋土で構築。サンミデー下部に暗渠を構築。
6 号墓	3a	14	5.04	-	2.8	1.8	北	天井が崩落した埋没墓。7号墓室とつながる。右棚一部を欠失。墓室内で完形の石厨子等を含む蔵骨器片（7点）や戦中避難で持ち込まれた近代磁器皿30点余検出。墓口は石灰岩の積石閉塞。
7 号墓	3a	14	3.00	1.4	2.0	1.5	北	墓室に蔵骨器を12点安置。6号墓室につながる。
8 号墓	3b	14	3.91	1.7	2.3	1.7	北東	露頭した砂岩ノジュールをサンミデーに利用した可能性有り。
9 号墓	1a	14	1.62	(1.4)	1.8	0.9	北東	天井が崩落した埋没墓。墓室に蔵骨器を2点安置。墓口は石灰岩と砂岩の積石閉塞。
10号墓	1c変形	14	1.63	1.0	0.65	2.5	北東	墓室を奥へ拡張し、蔵骨器を6点安置。
11号墓	1a	14	2.20	(1.1)	2.2	1.0	北東	天井が崩落した埋没墓。墓室に蔵骨器を13点安置。石灰岩と砂岩の積石閉塞。
12号墓	不明	14	2.13	(1.1)	1.4	1.52	北東	天井が崩落した埋没墓だが蔵骨器は無い。正面棚を削平し奥へ拡張する。
13号墓	3a	14	4.58	1.15	2.35	1.95	北東	墓室に蔵骨器を10点安置。墓口は石灰岩と砂岩の積石閉塞。
14号墓	1b	14	2.52	1.15	1.8	1.4	北東	墓室に蔵骨器を10点安置。墓口の閉塞は、墓庭にまとまって廃棄された石灰岩と砂岩の状況から積石閉塞が推察される。北西側に脇墓(14-2号墓)構築、一次葬人骨検出。
14-2号墓	1d	14	1.10	-	1.1	1.0	南東	天井が崩落した埋没墓。一次葬人骨を検出。
15号墓	4b	14	3.06	-	1.7	1.8	北東	天井が崩落した埋没墓だが、蔵骨器は無い。
16号墓	4b変形	14	2.43	-	0.9	2.7	北東	天井が崩落した埋没墓。正面棚で蔵骨器の蓋を2点検出。
17号墓	6b	14	4.84	1.8	2.2	2.2	北西	墓庭入口側に蔵骨器を11点廃棄。墓庭で土坑を4基検出し、うち2基の土坑内で副葬品出土。
17-2号墓	1d	14	0.96	1.0	0.6	1.6	南東	墓口が埋没した脇墓。横転した小型転用蔵骨器（油甕）が1点検出されたが、人骨の残存状態は悪く判然としない。
18号墓	5b	16	6.48	(2.0)	2.4	2.7	北西	墓正面と庭囲い、サンミデー、羨道床面を石灰岩の切石（相方積み）で構築。墓室右棚の縁部を石灰岩で補修。
19号墓	-	16	7.20	-	1.5	(4.8)	北	墓を壕に改築か。奥側で二つに分かれる。崩落の危険性から調査は断念。
20号墓	1c	16	0.42	0.9	0.6	0.7	北	空き墓。石灰岩の切石とコンクリートブロックで墓口を構築。
21号墓	6b	16	5.50	1.4	2.5	2.2	北	屋嘉比家の墓（「屋嘉比朝儀（朝寄）」銘入蔵骨器有り）。墓口を石灰岩の切石組で構築し、切石5個（布積み）で閉塞する。
22号墓	6b	16	4.60	1.6	2.3	2.0	北	空き墓。墓口の上部と下部を石灰岩の切石組で構築。
23号墓	3a変形	14	3.57	(1.6)	2.1	1.7	北	墓室内に蔵骨器が打ち割られた状態で出土（5点分）。
24号墓	1d	15	1.30	-	1.3	1.0	北西	天井が崩落した埋没墓。蔵骨器を1点安置。
25号墓	1c	15	0.80	-	0.5	1.6	北東	天井が崩落した埋没墓。蔵骨器を2点安置。
26号墓	4b	15	2.72	1.3	1.6	1.7	北東	空き墓。サンミデーの縁を切石で並べる。
27号墓	4b	15	2.89	1.3	1.7	1.7	北東	墓室に蔵骨器を6点安置。汁ヒラシで一次葬人骨を検出。墓口は石灰岩の積石閉塞。
28号墓	4a	15	3.06	-	1.7	1.8	北東	天井が崩落した埋没墓。蔵骨器を1点安置。墓口は石灰岩と砂岩の積石閉塞。
29号墓	6a	15	4.60	1.6	2.3	2.0	北東	墓室に蔵骨器を12点安置。墓口は石灰岩と砂岩の積石閉塞。蔵骨器12点中3点に木製誌板を納める。
30号墓	1a	15	3.00	-	2.5	1.2	北東	天井が崩落した埋没墓。墓室で蔵骨器6点出土。墓口は砂岩の積石閉塞。
31号墓	3a (5a?)	15	2.89	1.3	1.7	1.7	北東	墓室内の蔵骨器は全て打ち割られており、内部に投棄された状況。墓口は石灰岩と砂岩の積石閉塞。
33号墓	1c	15	1.05	-	0.7	1.5	北西	天井が崩落した埋没墓。墓室内に石を4個配置。大型の縁石でサンミデー状に造る。蔵骨器が墓の前方に散乱する。
34号墓	1b	14	3.15	1.4	1.8	1.75	西	空き墓。外観をコンクリートブロック積みで補修する。
35号墓	-	-	-	-	-	-	南西	タンク墓。調査対象外。
37号墓	3a	15	4.16	-	2.6	1.6	南	天井が崩落した埋没墓。墓室に蔵骨器を7点安置。墓口は石灰岩と砂岩の積石閉塞。
38号墓	3b	14	2.20	1.1	1.8	1.22	南	空き墓。外観をコンクリートや御影石で補修し、庭と参道をコンクリート舗装、庭囲いはコンクリートブロック積みで構築。
39号墓	-	14	2.70	(1.2)	2.25	(1.2)	南西	墓を壕に改築か。墓庭で戦争遺骨、銃剣、ボタン、銭貨、印鑑等が出土。
40号墓	1c	14	0.85	0.9	0.65	1.3	北西	39号墓の脇墓。
41号墓	-	-	-	-	-	-	南西	墓を壕に改築か。
42号墓	-	-	-	-	-	-	南西	未調査。
43号墓	-	-	-	-	-	-	北西	コンクリート家形墓。
44号墓	-	15	-	-	-	-	南西	天井が崩落した埋没墓。墓室の壁面の一部と床面を検出。小型蔵骨器2点出土。
48号墓	3c	15	2.28	-	1.9	1.2	北東	天井が崩落した埋没墓。墓室に蔵骨器を1点安置。墓口は石灰岩の積石閉塞。
49号墓	4a	15	5.04	-	2.8	1.8	北東	天井が崩落した埋没墓。墓室内から米軍のTNT火薬片が検出された。爆破により蔵骨器多数が倒壊している。墓口は石灰岩の切石で閉塞。
51号墓	3b	15	-	-	-	-	南西	墓室奥壁のみ残存する埋没墓。蔵骨器3点残存。
52号墓	1b	15	1.65	-	1.5	1.1	北西	天井が崩落した埋没墓。蔵骨器片1点分出土。
53号墓	3c	14	2.47	1.1	1.9	1.3	北東	墓室に蔵骨器を7点安置。
54号墓	1b	16	3.60	(1.5)	1.8	2.0	南西	天井が崩落した埋没墓。墓室に蔵骨器を10点安置。墓口は石灰岩と砂岩の積石閉塞。棺箱の台石にニービ石を4個使用。
54-2号墓	1c	16	0.50	-	0.45	1.1	南西	天井が崩落した埋没墓。蔵骨器を1点安置。
55号墓	3a	16	3.00	-	1.5	2.0	南西	天井が崩落した埋没墓。墓室に蔵骨器を8点安置。墓口は石灰岩と砂岩の積石閉塞。棺箱の台石（ニービ石）2個出土。
55-2号墓	1d	16	0.24	0.9	0.4	0.6	南西	空き墓。蔵骨器は無いが配石があり、配石内から銭貨出土。

※ 括弧内の数値は残存部の最大値を計測。

※ 5・32・36・45～47・50号墓は、確認調査で遺構無しと判断した。

a 型 7 基 (6・7・13・23・31・37・55 号墓)、b 型 3 基 (8・38・51 号墓)、c 型 3 基 (1・48・53 号墓) が確認された。立地状況は、北東側上段に 23 号墓、下段に 6～8・13・53 号墓が、南西側に 37・38・51・55 号墓がまとまって所在した。

4 類は、墓室面積が 2～5㎡程で 3 類とほぼ同規模であるが、柵は正面にのみ造られている。墓室の平面観が不定形の a 型 2 基 (28・49 号墓) と、方形の b 型 5 基 (3・15・16・26・27 号墓) が確認された。立地場所は、3 号墓のみ北東側に所在する以外は、北西側に 15・16・26～28・49 号墓がまとまって所在した。

5 類は、墓室面積が 6㎡を超え、墓室の平面観が 3b 型に正面柵を 2 段加える形状の b 型 2 基 (4・18 号墓) が確認された。立地場所は北東側 (4 号墓) と、丘陵のほぼ中央部 (18 号墓) で、位置的な近接関係は認められない。また、墓の外観の構築方法で石材を多用する点や庭の造り方が異なる点で、身分や財力の違いが推察された。

6 類は、墓室面積が 4～7㎡程で、墓室の平面観が 3a・b 型に正面柵を 1 段加える形状となる。a 型 1 基 (29 号墓)、b 型 4 基 (2・17・21・22 号墓) が確認され、3a・b 型と同様に正面柵が平坦となるか段差が付くかで分類している。立地場所は北側上段に 2 基 (21・22 号墓) 並び、北東側に 1 基 (2 号墓)、丘陵のほぼ中央部に 1 基 (17 号墓)、北西側に 1 基 (29 号墓) が所在した。

類型別に墓の立地をみると、北東側下段に 3 類 (6～8・13・53 号墓) が、北西側に 4 類 (15・16・27・28・49 号墓) に近接して所在し、6 類を主とする庭囲いを有する比較的大型の墓が北東側に 2 基 (1・2 号墓)、中央部に 3 基 (17・18・43 号墓) 横並びして所在したほか、最も高位置となる北側上段に 2 基 (21・22 号墓) 所在した。1 類は脇墓を除き、北側で横並びする墓と墓の間や、北西から南西側でみられた。

以上のことを整理すると、該丘陵では同じ墓室構造の墓が概ね近接している状況が窺える。このことは、墓の造営時期が近いことを示唆しているのか、あるいは同じ墓大工の関与によるものかは断定し難いものの、類型毎で計画的に造墓していた可能性が推察される。また、造墓の際には墓所有者の身分や財力も関与していたものとみられ、士族身分の墓とみられる庭囲いを有する大型の墓 (1・2・17・18 号墓) は、墓域の形成過程や立地等を考えるうえで重要な墓と思われる。墓地確保の観点からすると大型の墓の造営は比較的最早い時期に造られた可能性が高いものと考えられ、墓の増加に伴って墓地の確保が容易でなくなると、僅かな隙間も逃さずに造墓されていたことが推察された。

3. 遺物の特徴と年代観について

調査した墓の主要な遺物は蔵骨器で、家形、ボージャー形、マンガン釉甕形、転用等がみられ、全体的な数量をみると、マンガン釉甕形で多く占められている。蔵骨器の安置状況を墓別にみると、ボージャー形のみ墓は (24・25・28 号墓)、家形とボージャー形、マンガン釉甕形が共伴する墓 (6・7 号墓)、ボージャー形とマンガン釉甕形が共伴する墓 (1・9・11・13・21・30・31・33・49・53～55 号墓)、マンガン釉甕形のみ墓 (2・10・14・17・23・27・29・37・48・51・54～2 号墓) がみられた。概ねボージャー形を伴う墓は、蔵骨器の製作年代から 18 世紀代に、マンガン釉甕形を伴う墓は 19 世紀以降に造墓された可能性が高いものと推察された。

次に蔵骨器の銘書についてみると、最も古い年代は乾隆 7 年 (1742 年) で、嘉慶・道光・咸豊・同治・光緒・明治・大正・昭和の年号が確認されたほか西暦表記もみられた。銘書から該丘陵の墓地利用を推察すると、概ね 18 世紀中頃から戦前まで墓地として機能したことが窺え、その後、沖縄戦での断絶を経て、2 号墓や 17 号墓のようないくつかの墓は戦後も継続して使用されたものとみられる。ま

た、被葬者の身分を表す位階名称についてみると、「親方、按司、里之子親雲上」などの士族身分のもの（2・11・17・21・53号墓）や「にや、筑登之、筑登之親雲上、親雲上」など士族・百姓身分の両方で使用されるもの（1・7・10・13・14・29・31・37・49号墓）、「名+姓」の百姓身分の銘書を記載するもの（23号墓）が確認され、該丘陵の墓地形成や墓の立地状況は、身分による墓地の選定あるいは制約的なものは無かったものと推察される。

4. まとめ

最後に、前田真知堂B丘陵と沖縄戦の様相についてふれ、全体的な概括を行いまとめとしたい。

該丘陵では、戦時中に墓を改造して壕に利用していた遺構がいくつか確認された。壕と判断されたのは19・39・41号墓で、19号墓が北側上段に、39・41号墓が南側に立地していた。また、民間人が避難時に利用したとみられる6号墓や、大量の火薬片が出土した49号墓は北側に立地していた。丘陵全体でみると、南北での様相は異なっており、北側で埋没墓が多く確認されたのに対して、南側は総じて攪乱の度合いが大きく、遺構の残存状況は不良であった。同様の事例は、前田真知堂A丘陵や経塚南小島原A丘陵でも確認されている。前田・経塚地域一帯には多くの陣地壕が造られているが、具体的な場所の特定はできていない。浦添の中でも最も激しい戦闘が行われた同地域の沖縄戦の様相を解明するためにも前田・経塚近世墓群全体の中で陣地壕の内容や規模などの比較分析は今後の課題といえる。

このほか、該丘陵の墓50基余のうち2類（出窓状棚）が無い点も注目される。2類に伴う蔵骨器は、那覇・浦添市例等からボージャー形を主体に石厨子や転用蔵骨器（陶製専用器の登場以前の器種）で構成される傾向から17世紀中葉～18世紀中葉の造墓年代を想定していた。しかし、調査事例の追加によって18世紀後半まで及ぶことが判明し、このタイプの需要が従前より若干長期に渡ることが確認された。当墓群の2類の墓は、比較的丘陵の中・高位に所在し、隣接する墓同士の間隔がやや広いことや間隔が狭い場合でも遺構が重複しないことが確認されている。このような状況から2類の造墓は墓域が形成される丘陵において、場所をある程度自由に選択できる初期段階と想定できよう。

ところで、17世紀後半の身分制度確立以降、士族層では位牌とともに墓を分かつようになり、一族（門中）墓から家族墓にシフトしていく。その家族墓も数世代使用後、手狭になると墓を閉ざして「神墓」とし、別に墓を仕立てていたようである。田名家文書の墓関係資料では2類の墓を「神墓」としている報告がある。2類の墓は、正面に太祖（元祖）を置いて左右に世代分けして配列する「昭穆」の思想に則って蔵骨器を安置できるため「神墓」を目的とした造墓とみても過言ではなからう。

これまで前田・経塚近世墓群における17世紀後半～18世紀の墓室類型は、5類を除く全ての類型が確認されている。この状況は墓を必要とする側の事情（用途、財力など）が関係しているのではないかと考えている。既述のとおり2類が「神墓」の定型であれば、その他の類型は地形的な制約や財力によるものと考えられる。この仮説が正しいのであれば、2類が所在しない丘陵は、継続使用を目的とした家族墓を主とする墓域の可能性が高いといえるのではないかと推察している。ただし、那覇市のナーチャー毛古墓群や北谷町の山川原古墓群のように2類の墓が一定程度まとまる事例もあるため、時代や地域性を含め検討しなければならない課題が残る。こうした課題を解明するには丘陵単位での墓域の形成過程の分析把握と比較検討が重要といえる。

《 引用・参考文献 》

浦添市史編集委員会 1986 『浦添市史 第六巻 資料編 5』 浦添市

沖縄県地域史協議会編 1989 『シンポジウム 南島の墓 沖縄の葬制・墓制』 沖縄出版

田名真之(編)1994 『時代を拓く・儀間真常 ― 人と功績』 那覇出版社

那覇市教育委員会 1998 『銘苅古墓群(Ⅰ)―那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅴ―』

那覇市教育委員会 1999 『銘苅古墓群(Ⅱ)―那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅵ―』

那覇市教育委員会 2000 『ナーチャー毛古墓群 ―那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅶ―』

那覇市教育委員会 2001 『銘苅古墓群(Ⅲ)―那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅸ―』

那覇市教育委員会 2001 『安謝西原古墓群 ―那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅹ―』

浦添市教育委員会 2004 『内間遺跡 内間カンジャーヤーガマ遺跡 内間西原近世墓群Ⅲ ―浦添市都市計画街路勢理客線道路改良事業に伴う緊急発掘調査―』

浦添市教育委員会 2007 『市内遺跡発掘調査報告書(Ⅰ) ―平成13～18年度調査報告―』

浦添市教育委員会 2011 『前田・経塚近世墓群2 首里大名地区 ―那覇広域都市計画道路事業3・3・16号国際センター線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』

浦添市教育委員会 2012 『前田・経塚近世墓群3 前田真知堂B丘陵(Ⅰ)・前田真知堂C丘陵(Ⅰ) ―都市計画街路国際センター線及び沢峠石嶺線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』

浦添市教育委員会 2013 『前田・経塚近世墓群4 経塚子の方原A丘陵(Ⅰ) ―浦添南第一土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書―』

浦添市教育委員会 2014a 『前田・経塚近世墓群5 経塚南小島原A丘陵 ―浦添南第一土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書―』

浦添市教育委員会 2014b 『仲間稲マタ原近世墓群Ⅱ ―浦添カルチャーパーク整備事業及びてだこホール建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査―』

浦添市教育委員会 2015 『前田・経塚近世墓群6 前田真知堂A丘陵(Ⅰ)・前田西上原A丘陵・前田西前田原A丘陵 ―浦添南第一土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書―』

浦添市教育委員会 2017a 『前田・経塚近世墓群7 前田前原A丘陵 ―浦添南第一土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書―』

浦添市教育委員会 2017b 『前田・経塚近世墓群8 前田西前田B丘陵・前田西前田原C丘陵(Ⅰ) ―浦添南第一土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書―』

浦添市教育委員会 2017c 『前田・経塚近世墓群9 経塚下平大名原A丘陵 ―浦添南第一土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書―』

報告書抄録

ふりがな	まえだ・きょうづかきんせいぼぐん 10 まえだまちどう B きゅうりょう							
書名	前田・経塚近世墓群 10 前田真知堂 B 丘陵（2）							
副書名	都市計画街路国際センター線及び沢岬石嶺線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	浦添市文化財調査報告書							
編著者名	安和吉則							
編集機関	浦添市教育委員会							
所在地	〒901-2501 沖縄県浦添市安波茶一丁目1番1号							
発行年月	平成 29（2017）年 9 月							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	調査 面積	調査原因
まえだ きょうづか きんせい 前田・経塚近世 ぼぐん 墓群 まえだ まち どう 前田真知堂 きゅうりょう B 丘陵	おきなわけん 沖縄県 うらそえし 浦添市 まえだ 前田	47208	—	26° 14′ 09″	127° 43′ 37″	2003/2/7~ 2003/3/24	3,100 ㎡	都市計画 街路工事
	種別	主な年代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	墓	近世～近代		掘込墓		蔵骨器、副葬品、 人骨、戦争遺物		
要約	浦添市前田と経塚に所在する砂岩丘陵地には、近世から近代にかけて 1,000 基を超える墓が造営されており、それらの墓を総称して前田・経塚近世墓群と呼んでいる。発掘調査では 15 基の墓が検出され、いずれも横穴状の掘込墓であった。墓からは、人骨や蔵骨器、副葬品が出土しており、蔵骨器の型式や蔵骨器に書かれた銘書によって、18 世紀中頃から丘陵地一帯が墓地利用されたものと考えられた。このほか幾つかの墓庭で葬具の廃棄土坑が検出されており、文献資料が少ない近世から近代の葬送儀礼の一端が窺える成果や、沖縄戦時に構築された壕や避難時に利用された墓の様子等から、激戦地となった浦添前田地域の戦時下の様子が垣間見える貴重な発見もあった。							